

赤穂の民俗

その二

―坂越編(二)―

赤穂市教育委員会

題字
赤穂市長
笠木忠男

正 誤 表

赤穂の民俗その2

坂越編2

ページ	行	誤	正
目次 1	1 5	返越の言葉	坂越の言葉
5	9	<small>えびす</small> 蛭子社、	<small>えびす</small> 蛭子社か、
5	写真	宮の前の井戸	寺坂の井戸
3 8	5	四カ月	四ヶ月
4 8	1 6	妙見寺、	妙見寺・
4 9	5	時癩熱、暑気さし等	<small>じふくねつ</small> 時癩熱、 <small>しやくき</small> 積気さし等
5 0	上段 3	交化十一	文化十一
7 5	下段 5	浴な	俗な
7 8	下段 9	判らず象	分らず屋

「赤穂の民俗 その二 坂越編(二)」の発行にあたって

赤穂市教育委員会の要請を受けて、赤穂市域の民俗調査に着手して二年になる。我々研究会は、最終目標を赤穂の民衆生活史を再現することに置いて出発した。

赤穂で生まれ、育ち、そして死んでいった人々、縁あってこの地に移り住んで来た人々、あるいは何らかの理由で赤穂を離れていった人々、彼らの大多数は民衆と呼ばれた無名の人達であった。そして、彼ら民衆は日々の生活を記録することは殆どやらなかった。我々は、彼ら赤穂の先人が培ってきた技法や使った道具、住んだ家、食物や着物、石仏や伝承・俚諺などを調査して、これらの諸資料から赤穂の民衆生活史を組み立てることを試みている。

この目標を達成するため、我々は調査の対象とすべき項目を、地域的には赤穂市域に限定した。また、学問的な重要性より、生活への関連性を重視した。例えば、坂越の場合は「海に生きた人々とその生活」をテーマに調査項目を設定した。勿論、坂越にも海と直接の関係を持たずに生活していた人々も数多く存在していたはずである。しかし、海を抜きにして坂越を説明することは不可能であろう。その地域の人々の生活を語る時、必要不可欠な要素は何であったのか、これを絶えず念頭に置いて調査項目を決めていった。

昨年、我々は『赤穂の民俗 その一 坂越編(一)』を発行し、市民の御批判を仰いだ。拙い成果ではあったが、大概好評を得ることができた。しかし、「あとがき」で述べたように、次年度に数多くのテーマを残したものでもあった。この点については地元坂越の方々からも御批判と暖かい御助言を頂戴した。これらに応える目的で、今回は

坂越編第二集を発行した次第である。我々は、これら二冊でもって坂越の民衆生活史を語り終えたとは思ってもない。我々が世に問うたささやかな成果が、今後の坂越の民衆生活史、さらに広がって赤穂民衆生活史研究の起爆剤になれば幸いであると思っている。

次に今回第二集を発行するにあたり、我々は新たな計画を試みた。その計画とは、これまで長年に亘って郷土の文化遺産保存に尽くしてきた人々の声を、紙面に反映してもらおうということである。坂越にも赤穂歴史研究会に入会され郷土史研究に携わっている方が多数おられる。この方々に執筆を依頼し、幸いにも快諾を得ることができた。なかでも佐方渚果氏の御遺稿を戴くことができ、内容を一層充実させることができた。渚果氏は坂越に生まれ、家業のかたわら古文書収集や坂越に関する数々の論文を発表するなど、郷土史家として御活躍であったが、残念なことに昭和五十一年三月脳溢血で研究半ばにして他界されてしまった。戴いた御遺稿から、生前の御活躍の一端が偲ばれる。また、唐崎安也・大西孜・奥藤研二・尾上渡・三木竹夫の諸氏からも、興味ある原稿を戴くことができた。

前述したように、赤穂の民俗調査は、まだ初歩を踏みだしたにすぎない。我々のささやかな活動が、赤穂の民衆生活史研究の本格的な出発点になることを願っている。これまで赤穂の文化遺産保存に尽力された方々からの、御批判と御助言を期待している。

今回の調査分担は次の通りである。

- 一、坂越の生活用水 唐崎安也（赤穂歴史研究会会員）、粟井ミドリ（兵庫県立赤穂高等学校教諭）
- 二、坂越の民家 粟井ミドリ、寺田祐子（赤穂民俗研究会会員）

- 三、船乗りの生活 西畑俊昭（兵庫県立太子高等学校教諭）、上杉元秀（赤穂市城西小学校教諭）
- 四、廻船と海難 大西孜（赤穂歴史研究会会員）
- 五、坂越の地名の由来 奥藤研二（赤穂歴史研究会会員）、尾上渡（赤穂歴史研究会会員）
- 六、坂越の言葉 佐方渚果（郷土史家）
- 七、坂越方言の用法 三木竹夫（赤穂歴史研究会会員）
- 八、坂越の俗信と禁忌 粟井ミドリ、折方啓三（赤穂市立塩屋小学校教諭）

なお、各報告文の文章の統一・編集は粟井・西畑が担当し、また図面の作製・割り付けには岡本欣子（赤穂民俗研究会会員）と西畑があたった。

昭和六十年三月十日

赤穂民俗研究会

目次

赤穂の民俗 — 昭和五十九年度 —

坂越の民俗(二)

はじめに

一、坂越の生活用水 唐崎安也・粟井ミドリ (1)

(1) 共同井戸 (2) 井戸の由来

二、坂越の民家 粟井ミドリ・寺田祐子 (9)

(1) 町並みの成立 (2) 坂越の民家の特徴 付 坂越の民具(魚島の船道具)

三、船乗りの生活 西畑俊昭・上杉元秀 (20)

四、廻船と海難 大西 孜 (29)

(1) 赤穂廻船の海難 (2) 赤穂塩船漂流記 (3) 海難と処理

(4) 坂越浦海域における海難 (5) 黒崎墓所(他所三昧)

五、坂越の地名の由来 奥藤研二・尾上 渡 (51)

(1) 地名の部 (2) 町名(自治会)の部 (3) 網代の部

六、返越の言葉 佐方渚果 (66)

七、坂越方言の用法 三木竹夫 (114)

八、坂越の俗信と禁忌 …………… 粟井ミドリ・折方哲三

- (1)衣に関するもの
- (2)食に関するもの
- (3)住に関するもの
- (4)身体に関するもの
- (5)生（出産）に関するもの
- (6)死に関するもの
- (7)夫婦（結婚）に関するもの
- (8)嫁姑に関するもの
- (9)気象に関するもの
- (10)農事に関するもの
- (11)夢合わせに関するもの
- (12)火に関するもの
- (13)湯水に関するもの
- (14)動物に関するもの
- (15)海に関するもの
- (16)禁忌・まじない
- (17)前兆
- (18)その他

あとがき

一、坂越の生活用水

唐崎安也・粟井ミドリ

(1) 共同井戸

坂越は坂越湾に沿って集落をなしているが、海岸まで山が迫ってきているため、井戸の掘れるような地形・地質ではなかった。たとえ井戸が掘れても、飲料水に不適であったり、十分な水量の確保は望めなかった。そのために坂越の人たちは、水には大変苦勞をしてきた。

谷川の水を利用して洗濯したり、時には千種川まで足を運んでいた。谷川での洗濯といっても、田舎ではとても想像できないわずかな水の流れて、先を争って洗っていたのである。雨でも降れば一斉に谷川の水で、洗物・洗濯をしていた。

風呂は、水・薪等の関係からか、個人の家には少なく、大衆浴場が利用されていた。個人を家の風呂を借りる時（もらい湯をする時）は、水汲みを手伝ったりしていた。

井戸があっても飲料水に適した十分な水量を確保できる家は稀で、親戚とか親しく交際している家の井戸を使用させてもらっていた。

井戸のある家でさえそうであるから、大半の家は、日常生活に欠かすことのできない水を共同井戸に頼っていたわけで、その苦勞は並大抵ではなかったであろう。

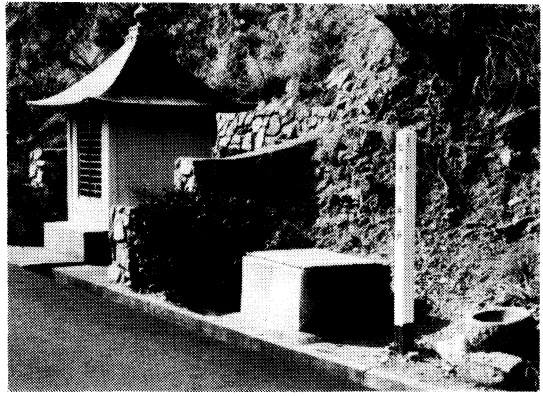
以下、各町の共同井戸について記す。

汐見 道路に面した古い家には大体井戸があるが、大半の家は、飲料水を「ちやの水」(前田の倉庫の山側にあったが現在はない)といわれていた井戸から汲んでいた。その他に、浜田の前の井戸、ヤケ山の井戸、通称「化け物屋敷」(奥藤屋敷跡)の井戸を利用していた。ヤケ山の井戸の上には、谷川の水を海に流してしまわないように堀を作って水を貯え、大切に利用していた。

東之町 岩井の上の井戸、荒神の井戸、岩崎の井戸、宮の前の井戸、寺坂の井戸、松田の裏の井戸を生活用水として使用していた。いよいよ水不足の激しい時は、神社境内の井戸を使用したこともあった、とのことである。この大避神社境内の井戸を「ヤコブの井戸」と呼ぶ人もいる。

大衆浴場「大師湯」は、弘法の井戸から一日に二、三回船で水を運んで沸かしていたが、足し湯の水は、荒神谷の上にあった「風呂の水」といわれていた井戸から、笕かきで水をひいていたとのことである。この風呂の水は昭和四十九年の洪水後、谷川の改修が行なわれなくなった。

本町 井戸を持っている家も多いが、共同井戸として使われていたものは、久田の前の井戸、山植の前の井戸、山の井戸、奥藤商事裏の井戸、大道井等である。大道井の水は豊富で、泉屋いづみやという大衆浴場の水として利用されたり、船の飲料水としても利用されていた。



弘法の井戸

鳥井 妙道寺の上の人家では「わゆみさんの井戸」を使用していたが、大半が常楽寺の井戸水を使用していた。手押し車を押ししたり、荷ない棒でなつて水を運んでいた。

北之町 奥吉の井戸、西川の裏の井戸、中の町（なかんちょう）の井戸を使用していた。西川の裏の井戸には洗い場がなく、汲み水用として利用していた。また洗濯などは、西之町のはずれ、即ち、新トンネルの入口の谷まで出かけていた。

西之町 西之町には比較的井戸が多く、水は豊富であった。

共同井戸として利用していたものは、亀谷の前の井戸、寺坂町（天理教会前）の井戸、大西の屋敷内にある井戸、それと「しんど」等である。「しんど」は「新井戸」のつまつた言い方である。水質が良く、水量も豊富で大日本紡績浜住宅の人々も、この井戸を使用していた、とのことである。

洞龍 エイゴの井戸二ヶ所、原鉄工所工場内の井戸、事務所下の井戸があり、人家が少なかったため、水は豊富であった。

下のエイゴの井戸は、底が岩で深さ二畝位、枠は舟板で作られており、殆ど船の人が利用していた。満潮の時は伝馬船で近づき、船に水を汲み入れるのに便利な所から、上のエイゴの井戸は使用されず、専ら下の井戸が使用されていた。

②共同井戸には、個人が所有しているが町内の人に開放されていた井戸も含めている。

(2) 井戸の由来

水は飲料水として、また洗濯・炊事など日常生活にも必要不可欠なものである。この生活用水を井戸に頼った坂越の人々は、その感謝の気持ちを「井戸の由来」にこめたと思われる。これから述べる井戸の由来の真偽のほどは不明である。多くは歴史上の人物に由来を求めている。誰もが知っている人物を開削者にする事で、井戸を大切に取り扱うようにとの希望をこめたのであろうか。

以下、坂越に残された井戸のなかで、由来が伝えられているものを述べていく。

弘法の井戸　小島に近い山裾の海岸に、「弘法の井戸」とか「弘法の霊水」と言われている井戸がある。水不足

に苦しむ坂越の人を哀れんで、弘法大師が「ここ掘れ、水が出る」と言われ、掘った井戸であると伝えられている。昔は、広さ約十畳、深さ二、三尺（約七十センチ）の池のようなもので、波打ち際にありながら、きれいな清水が湧き出していた。この水は、小島の人たちの飲料水や、坂越から出て行く塩船の飲料水として利用されていた。また、坂越にある風呂屋は、この井戸から船で水を運んで沸かしていたため、「大師湯」と呼ばれて親しまれた。

水は炭酸水といわれ、眼病や風邪などの熱に効力がある、といわれていた。

げんなみさんの井戸　坂越字潮見九三八番地（三勝石油株の山側）にあり、今も使用されている。

「げんなみさん」とは、「げんさんみ」がなまったものではなからうか。八百年程前の治承四年（一一八〇）二



宮の前の井戸

月に、平家追討の軍をおこした摂津源氏の源三位頼政は、宇治川で戦って敗れ、「埋れ木の花咲くこともなかりしに身のなるはてぞかなしなりける」の歌を遺して自害したが、それに先立って愛妾・菖蒲前(あやめのまえ)を播磨国に逃している。追われる身の菖蒲はあちこちをさまよった揚句、坂越にたどり着き、名を伏せ身をひそめていたが、源氏の世になってからは、「げんなみさん」と親しまれた、ということである。

荒神の井戸

東之町と汐見町の境に荒神谷がある。荒神谷は、大昔は藪谷と呼ばれ、海岸近くまでヤブがあった

が、現在では家が建て込んで、ただの「谷」と呼ばれるようになっていく。この谷に沿って上に行くと、荒神の井戸、と言われている井戸が、昔のままの形で保存されている。

以前ここに蛭子社へこ、火除けの神のアタゴ社が建てられていたが、社殿が壊れた後は荒神社を祀り、元禄五年(一六九二)には東浦荒神敷地森六間、五間と書きのこされている。

宮の前の井戸 この井戸は「妙見寺の寺井」ともいう。水を汲みあげた綱のあとが井戸の縁に刻み込まれており、共同井戸として長い間、坂越の人々の喉をうるおし続けてきたことがわかる。

生島の舟井

大避神社の神域として、木を切ると神罰があると伝えられている生島に、「舟井」と呼ばれる井戸がある。この井戸は、船乗りが毎日水を汲んでいた井戸で、この井戸と海岸の二つの井戸に、浦人たちの固

い約束が誓われている、といわれている。

焼けてかや原になった生島を、元の樹林にすることを誓って、浦人たちは毎日のように植林を続け、木を育て、とうとう元の樹林に復活させた、ということである。

大道井 坂越本町に「通り町筒井」とか「大道井筒」と呼ばれていた井戸があった。この井戸の底石に「尾上氏」の名が刻まれているのが、昭和初年の井戸がえの時に発見された。

井戸が掘られたのは、約三百六十五年前、尾上善左衛門が庄屋をしていた元和年間ではなからうか、と思われる。文化年間に掘りかえが行なわれたことが、記録として残っている。

坂越の人たちの大切な生活用水であり、寄航する船や旅人にも重宝されていたが、昭和三十五年十二月、道路拡張のため地上より姿を消し、石の手すりだけが現地に保存されている。

わゆみさんの井戸 寛政の頃、高松藩に松本和右衛門という武士がいた。彼は武芸や学問に秀で、藩の子弟を教えていた。しかし、花に遊び月に狂う世の人々を見て人知れず嘆き、京都の永正寺で出家し、吾有玄道と名乗った。

玄道は、修業僧として諸国を巡っている途中坂越に立ち寄り、気候温暖、風光明媚な地が気に入り、そのまま定住してしまった。そして、京都から



岩崎の井戸（内部）

小沢芦庵を招いて教えを受けたり、土地の人に学問を授けたりしていた。坂越の最初の寺子屋の師匠は和右衛門である、といわれている。

和右衛門が住んで学問を教えていた場所は、妙道寺本堂の右上にある、新しい墓地になった所で、明治の頃は「わゆみさんの井戸の所」と呼んでいた。昭和十年に水道がつき、今はただ「わゆみさん」とだけ呼ばれる場所になっている。

常楽寺の井戸 下高谷の南側、荒神山の山裾に、常楽寺の井戸がある。この井戸水は生活用水として利用されていたが、「イボを治す靈験あらたかな靈水」として、遠く明石の辺りまでも知られていた。

海雲寺の井戸 海雲寺の井戸は「坂越三井」の一つで、古い井戸の一つに数えられている。三井とは、大道井、生島の舟井、海雲寺の寺井である。

海雲寺は、坂越字海雲寺二四一八一一番地の山畑の中にあつた。この寺は、坂越五山五寺の一つ、真言宗妙見寺末寺、靈龜山海雲寺で、天文年中（一五三二〜一五五五）に廢寺となり、現在はわずかに土堀と井戸を残すのみである。

乳の下の井戸 乳の下の井戸は、亭（ちん）の下の井戸がなまったものと言われている。伝説だけの井戸で現存しないと思っていたが、坂越字洞龍の原鉄工所の工場内に保存されている。内部の石積みは、正方形に近い方形に築き上げられている。

この井戸の山の上に、南朝の皇族小倉御前の月見の亭があつたので、「亭の下の井戸」とか「亭の清水」と言われ、水に不自由する坂越の人たちに大切にされてきた井戸である。

エイゴの井戸 昭和五十八年（一九五三）開通した坂越トンネル海岸側の西側山裾に、入江の地藏さんがある。そのすぐ西寄りと道路中央ぐらの所に、井戸が二つ並んであった。その二つの井戸を、「エイゴの井戸」と呼び習わしていた。「エイゴ」という名の由来は不明であるが、豊富な水が尽きることがない「永却^{えいけつ}」を意味するのではなかるうか。

洞龍の人々は、エイゴの井戸、乳の下の井戸、原鉄工事務所あたりにあつた井戸水を、生活用水として利用していた。人家が少なかつたため水は豊富で、エイゴの井戸水は、専ら出入りする船の飲料水として利用されており、それも、船に汲み込む便利さから、下の井戸が利用されていた、ということである。

梅の木の井戸 坂越字大泊三二四〇番地の、梅の木という地名も場所も、今では知る人がほとんどない。梅の大木も今はない。雑木林の深い茂みを分け入ると、谷川の川底に、土砂に埋まった石積みの輪状になつた遺構が、わずかに確認できる程度である。

今から千百年程昔の延喜元年（九〇一）に、菅原道真公が九州の大宰府に流される途中、大泊に船をとめ、今の天神山に逗留したという。後年道真公を祀る北野天満宮は、大泊の梅の木に祀られ、北之町の天神山に移され、明治四十二年には、大避神社の境内へ社殿を解体せず移され、合祀されている。

二、坂越の民家

粟井ミドリ・寺田祐子

(1) 町並みの成立

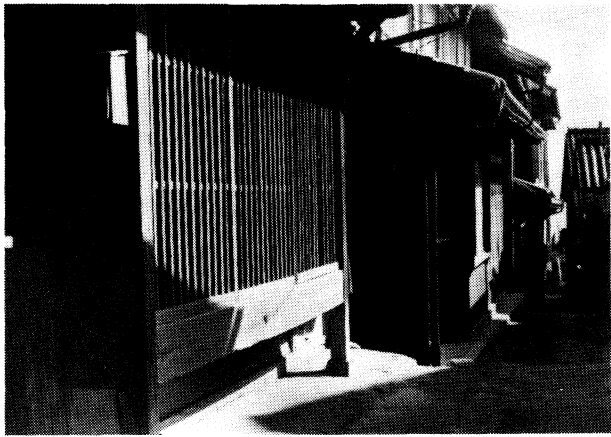
近世・近代を通じて、坂越は西播磨有数の港町として栄えた。その繁栄振りを示した町並みは、太平洋戦争の被害を受けなかったこともあって、現在でも良く保存されている。

近世以降、港町坂越が経済的に発展した時期は三度あった。一度目は十七世紀後半、東北地方と大阪を結ぶ西廻り航路が成立して、瀬戸内海廻船業が飛躍的に発展した時期である。この時期、坂越浦では三十名近い廻船業者の存在が確認されている。廻船業者の活躍は目覚ましく、廻船問屋奥藤家の当主であった助兵衛利興は、一代で家産を十倍に増やしたという。坂越浦の経済的繁栄は周辺の農漁村にも大きな影響を与えたであろう。その結果、近郊の農漁村からは、廻船業や漁業、およびこれらの関連産業への働き口を求めて、人々が坂越に移り住むようになってきた。しかし、流入した人々の大半は僅かな資金しか持ち合わせていなかったと思われる。元禄四年（一六九一）の「改帳」によれば、当時坂越浦には九十五軒の借家があり、また海岸に小屋を建てて住んでいた人がいたことがわかる。これら借家住まいが、流入してきた人々であろう。したがって、この時期の坂越の町は、いわば新興産業

都市ともいふべきものであり、活気はあるが無秩序的なものであったといえよう。

坂越浦が二度目の経済的繁栄を迎えたのは十八世紀中頃、明和・安永期であった。この時期、坂越浦廻船業者は瀬戸内海はもとより九州・東北にまでも出向き、現地の生産物（その多くは米であった）を購入し、大坂・堺で売却して莫大な利益をあげた。また漁業では、坂越浦の伝統的な経営組織である鱈座が座株を二倍に増やすなど、増産を示した時期でもあった。この時期、坂越浦廻船業者や漁民は、その経済力でもって坂越浦の神社・仏閣の造営や修理を集中的に行なっている。これと並行して、これまで無秩序であった町並みも整備されていったものと思われる。前項の「坂越の生活用水」で、坂越浦では生活用水を地下水に頼っていたことは報告した。この地下水を確保するために各町内で共同井戸が掘られたが、その費用の多くは有力廻船業者の出資によるものであった。西之町・北之町の井戸の多くは大西家の、東之町のもは岩崎家の出資によるものが多くあったと伝えられている。したがって、この時期、各町内の有力者の指導のもとで、都市計画ともいふべき町並みの整備が行なわれたと考えられる。現在の坂越の町並みの原形は、この時期（十八世紀中頃）に成立したものと考えられる。

坂越が経済的に繁栄した三度目の時期は、十九世紀後半、明治時代の中頃であった。この時期、坂越浦廻船業者のなかには東京への赤穂塩廻漕で利益をあげる一方、その利益で塩田・農地を集積して大地主へと成長する者もあらわれた。また、この時期、大坂と坂越を結ぶ定期航路が開設され、坂越港は西播磨の物資集積の機能もはたすようになった。この経済的繁栄は、坂越に家の新築・改築ブームを起こしたものと想像される。坂越には明治時代に建てられた民家が多く残っているが、このことからこの時期の経済的繁栄が窺われよう。しかし平地が少なく、しかも町割が固定している坂越にあって、民家の新築には数々の制約があったであろう。そのため、セメントやレ



坂越の町並み

ンガなど近代的な建築資材を使用する近代建築は坂越には不向きであり、むしろ旧来の工法による建築のほうが好まれたものと思われる。勿論、藁葺きを瓦葺きに、平屋を二階建てにするなどの変更もあったであろう。しかし、大概は江戸時代までの工法によったもの、すなわち江戸時代の町並みを復元するかたちで行なわれたものといえる。

以上、坂越の町並みの歴史を経済的繁栄と対比して述べた。要約すれば、十七世紀後半に町並みの原形が成立し、これが十八世紀中頃になると現在の町並みに整備された。そして、この整備された町並みにそって十九世紀中頃に現在残されているような民家が建てられていったのである。勿論、奥藤家のように近世から引き続いた旧家もある。しかし、これなどは民家というより豪商建築ともいべきものであろう。

では、明治時代に建てられた民家（その多くは江戸時代の民家建築の遺風を伝えたものであった）は、どのような特徴を持つのかを報告しよう。

(2) 坂越の民家の特徴

坂越の民家の特徴を列挙すれば、次のとおりである。

- 1、二階建て、本葺きの瓦屋根で、「切り妻」が大半を占める。
- 2、二階は中二階で、座敷にだけ天井が張られている。他はむき出しの部屋で、これらは納戸（納屋）かわりに使用されている。
- 3、階段は、町家風の箱階段か、必要に応じて掛けられる「釣り階段」である。
- 4、一般の民家では、床のついた座敷を持つことは恐れ多いとされたためか、一階には床を設けない。設けても半間（畳半分の広さ）の床である。多くは二階に座敷が設けられている。
- 5、「土間」^{ドマ}は、幅一間（一・八呎）のものが、表から裏へ通り抜けになっている。
- 6、表（入口）の「土間」には天井が張られているが、裏（奥）は吹き抜けになっており、「明かり取り（天窓）」が設けられている。
- 7、奥の「土間」には、クド・流し・水ガメ置場などが設けられ、炊事場になっている。また、ここからツシ（薪置場）に上げられるようになっている。
- 8、クド（竈）^{かまど}は、床上から炊くようになっている。
- 9、入口の「土間」には、幅一間・奥行半間の「俵置場」があり、ここに穀物を入れるようになっている。

10、便所の位置は各家で異なる。表通りに面する家では裏に設置しているが、裏通りの民家では家の外側、入口にある。

11、土地が狭い関係からか、薪置場は二階にある。この薪置場をツシと呼んだ。

12、井戸を所有する家は少なく、多くは町内の共同井戸を利用していた。このため各家とも、水ガメ二、三本に飲料水を汲み置いていた。

13、風呂を持つ家も少なく、大衆浴場を利用していた。

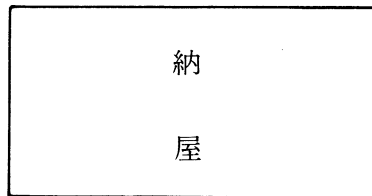
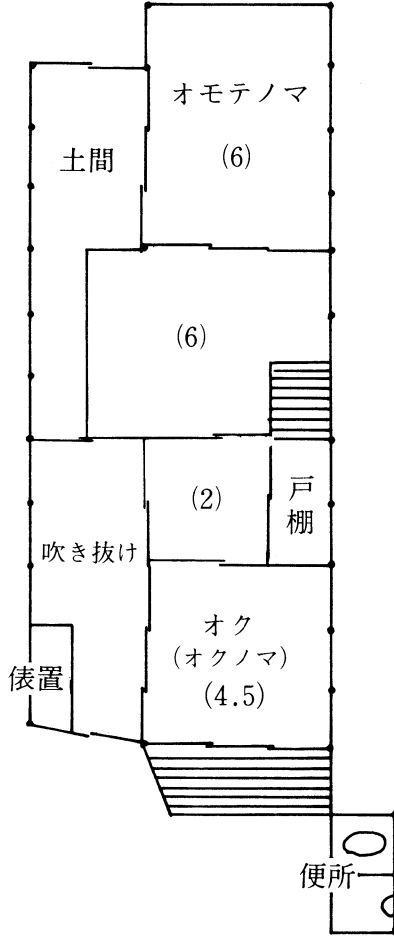
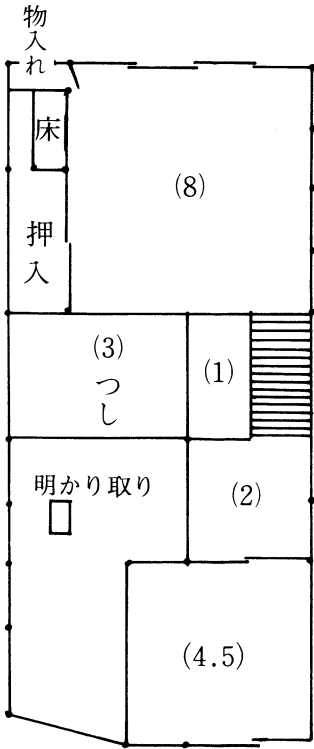
14、食事をする部屋は狭く、大体三畳くらいの広さである。イロリ（囲炉裏）はなかった。奥藤家では玄関の「土間」に大きなイロリを設けているが、これは廻船に乗り込んだ水夫が暖をとるためのものであったと思われる、坂越では例外とみるべきであろう。坂越には薪がとれる山林が少なく、一年間の燃料をこの山からだけでは補うことができなかつたためであろう。

15、道路に面する窓には格子がはめられている。坂越の民家では雨戸を設けたものは少なく、暴雨の時には竹で編んだ簀子スコが降ろされた。この簀子は日除けでもあった。

16、部屋の仕切りは「田の字」形が普通であったが、立地の制約を受けて縦に細長く部屋を作った民家もある。

「田の字」形民家の場合、部屋の呼び方は次のとおりである。入口（表）に近い部屋をアガリグチ（上がり口）その奥の部屋をザシキ（座敷）、台所と食事をする部屋をあわせてタナモト（棚元）、その奥の部屋、すなわち寝室をオク（奥）とかオクノマ（奥の間）と呼んでいた。商家ではアガリグチをミセノマ（店の間）ともいっていた。便所の呼称はチョウズ（手水）が普通であった。しかし、坂越では、部屋の呼び方についてはあま

寺谷家の間取り
 (大正10年以前の復元)



り意識していなかったようである。
 最後に、坂越の代表的な民家の間取りを略図で示しておこう。

付、坂越の民具（魚島の船道具）

汐見とならぶ坂越の漁業生産地である小島の尾上慶信家は、代々網元を勤めてきた旧家である。この尾上家は元禄五年（一六九二）に漁場開拓のため坂越本村から小島に移り住んだと伝えられている。当時の小島は戸数三軒の集落にすぎなかった。その後、小島には赤穂郡高田村釜島からの移住が相次ぎ、漁村として発展していった。いわば尾上家は小島の草分け的な旧家であったわけである。この尾上家には漁業生産で使用されていた漁具などとともに、魚島の時に使用した「船道具」が残されている。

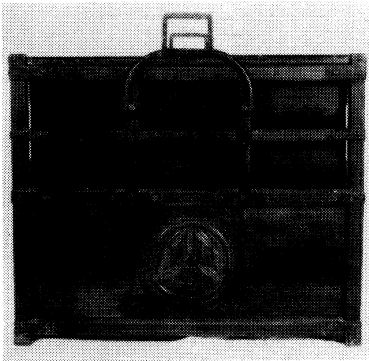
魚島とは、もともとは魚の出揃った五月中旬頃に、漁業生活者が豊漁を祈願して祝う行事であった。これが時代が下がるにつれて、出入りの旦那衆を招待し、舟で歓待するという一種の「舟遊び」の要素が加わるようになった。江戸時代、赤穂藩は千種川河口の唐船沖を藩主の「御舟遊び場」と定めていたが、時には坂越浦に出向き、奥藤・大西・尾上家などを訪れ「舟遊び」に興じる場合もあったようである。藩主が使用したかどうかは不明であるが、尾上家には「舟遊び」の時に使用した船簞筒（船道具）が二棹保存されているので、これらを紹介しよう。

船簞筒(一)

(1) 大きさ 縦二十八・五^セ 横四十一・〇^セ 高さ三十五・〇^セ

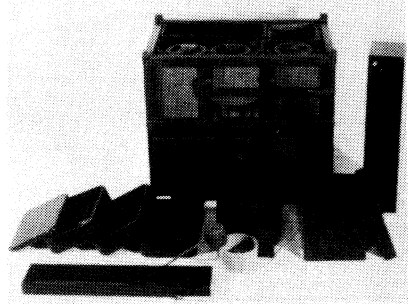
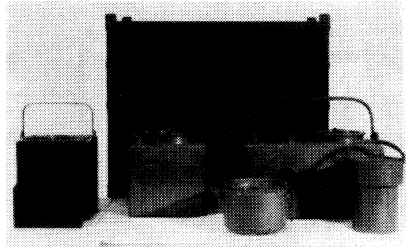
(2) 構造 この船簞筒は上・下二段になっている。上段には酒の燗をする設備と酒燗用具、および煙草盆が収納されている。また、下段には抹茶用具が納められている。これらの細工物の材質は銅や錫である。

また船簞筒の表面には補強の目的で真鍮製の金具が打ちつけられている。さらに持ち運びに便宜を図るため、



船 簞 笥 (一)

(上段左) 正面
 (上段右) 上段の諸用具
 (下 段) 下段の諸用具



上部側面には「担い棒」を通すことができるよう鉄製の金具が取り付けられている。

船簞笥正面の中央には「丸に三ツ笹」の家紋風の文様が彫られている。これが家紋であるとすれば、尾上家の家紋とは異なることから、この船簞笥は尾上家と出入りがあつた旦那衆（あるいは赤穂藩士）が作らせて、尾上家に預け置いた可能性も考えられる。

(3) 用具（上段）

○酒を燗する用具 縦十三・〇セツ 横二十三・〇セツ 高さ

十三・五セツ

半分が炭火を入れる場所、残りが湯を沸かす場所である。この炭火を入れる場所の側面には「空気入れ」が細工されている。

○酒を温める用具 上部直径は十・〇セツ 下部は九・〇セツ 高さ十一・〇セツの円柱形。上部に取っ手がある。

約四合（〇・七セツ）ほどの容量である。この用具の上部直径は湯入れ場所の直径（九・五セツ）より大きく作

られている。

○銚子 直径十一・〇セツ 高さ七・〇セツの円柱形で、上部に取っ手がある。

○湯入れ 縦・横とも十二・五セツ 高さ十二・五セツの直方体である。上部の入口は直径九・五セツの円形に細工され、蓋が取りつけられている。

これら諸道具にはすべて蓋が取り付けられており、この蓋は鎖で取っ手に結ばれている。

○煙草盆 縦十二・〇セツ 横九・〇セツ 高さ十三・〇セツの直方体。上・下二段からなり、上部は煙草盆、下段に引き出しが二ヶ所設けられ、小物が収納できるようになっている。

なお、これら諸用具は、いずれも個別に出し入れができるようになっている。

(4)用具(下段) 下段は縦二十六・八セツ 横三十七・〇セツ 高さ十三・五セツの引き出しになっており、このなかには道具箱二箱、三段重の重箱一組、水差し一箱、箸置き一箱が収納されている。

○道具箱(二組)

蓋付きの道具箱は縦十七・〇セツ 横十二・〇セツ 高さ十二・五セツの直方体。蓋なしの道具箱は縦十七・〇セツ 横十一・五セツ 高さ十二・五セツの直方体。いずれも抹茶茶碗・茶筌・茶杓などの抹茶用具を収納するものであったと思われる。

○三段重の重箱 最大の箱で縦十一・五セツ 横十七・〇セツ 高さ三・五セツである。他の箱は少しずつ容量が小さい。いずれも菓子器として使用されたと思われる。

○水入れ 縦七・五セツ 横三十五・八セツ 高さ十・二セツの直方体。上部に栓付きの注ぎ口がある。

○箸置き 縦七・五^セ 横三十五・八^セ 高さ二・四^セの直方体。この箸置きと水入れはセットになっており、

水入れの上に箸置きが置けるように作られている。

これら下段に収納される諸道具は、いずれも木製で、表面には漆塗りが施されている。

船簞笥(二)

(1) 大きさ 縦二十八・〇^セ 横四十九・〇^セ 高さ三十二・〇^セ

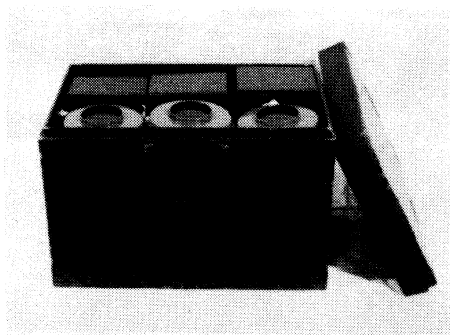
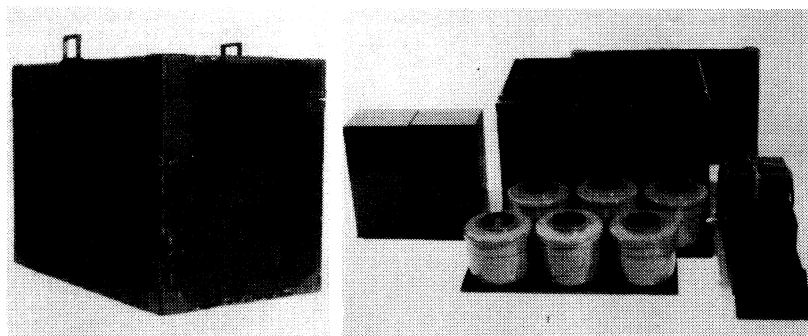
(2) 構造 前述の船簞笥と同様に木製で、要所に真鍮製の金具が、また上部側面には持ち運びに便利のように、棒通し用の鉄製金具が取りつけられている。この船簞笥のなかには、朱塗り・丸型の什器（弁当箱）と、黒塗り・角型の什器（弁当箱）が、各々六客揃で収納されている。

(3) 什器

○朱塗り・丸型什器（六客揃） 一客分は上・下の二段からなる。いずれも直径十三・五^セで、上段は三・五^セ、下段の什器は九・五^セの高さである。また厚さ三・〇^セの蓋がついている。塗りが上等であること、什器の形態からみて、招待客の接待に用いられた弁当箱であると思われる。

○黒塗り・角型什器（六客揃） 一客分は蓋と上・下二段の箱からなる。いずれも縦十二・〇^セ、横十四・五^セで、蓋は厚さ三・〇^セ、上段は三・五^セ、下段の箱は九・五^セの高さである。用途は前掲の什器と同様であろう。塗りが多少粗末であるところから考えて、当主か御供衆が使用したものと思われる。

これら船簞笥、収納された諸道具とも保存状態は良好である。製作時期は江戸時代末頃であろうか。細工物も



船 簞 笥

(上段左) 斜め側面

(上段右) 収納の様子

(下 段) 収納の諸用具

丁寧に製作されている。先人の知恵と技術の巧みさを示す好例といえるであろう。なお、尾上家に残された船道具の同種のものがまだ坂越には幾つも保存されているというが、今回は確認できなかつた。

三、船乗りの生活 — 西川六三郎・福田太治郎氏からの聞き書 —

西畑俊昭・上杉元秀

今回の調査に協力して戴いた西川六三郎、福田太治郎の両氏は、いずれも大正から昭和三十年頃まで船乗りとして活躍された方々である。両氏とも帆船かきに炊かきとして乗り込み、機帆船（汽）さらには機船（汽）へと船を乗り継ぎながら、海を相手に生活を送ってきた。かつて赤穂塩の積み出し港、内海航路の寄港地として栄えた坂越にあっても、帆船を経験した船乗りの多くは物故され、現在では両氏のほかは数えるほどになっている。今回の調査を契機に、両氏をはじめ、貴重な体験をされた方々の談話を記録保存していきたいと考えている。なお紙数の関係上、本項は両氏から別々に聞かせて戴いた話を一緒にまとめた。特に注記のないかぎり、両氏に共通する体験である。

生家・父親のこと　西川六三郎は明治三十四年十二月二十一日父清吉、母シンの第六子として北之町二二〇八番地で生まれた。西川家は代々の船乗りで六三郎で五代目になる。長兄新三郎、次兄清四郎、三兄五郎もすべて船乗りであった。祖父も父清吉も船乗りで、その腕を見込まれて西川家を継いだ。祖父は「ちよん髷」を結っていた頃から船に乗っていたことを自慢していた。父清吉も「雇われ若衆」（水夫）として奥藤家や高川家の塩船に乗り込み、

東京・坂越間を往復していた。塩専売制施行（明治三十八年）前まで、坂越には父清吉が乗り込んだような塩船が十パイ（艘）ほどもあり、数多くの船乗りが活躍していた、という。

専売制施行後、父清吉は一人乗りの和船を購入して、坂越・相生・那波の港から大阪まで薪や炭などを運賃積みで運んでいた。

福田太治郎は明治三十七年四月二十五日、坂越町二二四番地で父太吉、母セイの長男として生まれた。母セイは佐用郡南光町の生まれである。福田家の二、三軒隣家に住み、車力で佐用と坂越を往来していた人の仲人で嫁いできた。福田家は屋号を福浦屋という。由来は太治郎より五代前の幾治郎が日生の福浦から移り住んだのにちなんだものといわれている。この福田家は大避神社の祭礼の時の「歌船」組を世襲してきている。初代幾治郎以来、参勤交代の途上坂越に立ち寄った肥後の大名細川公を出迎えて室津まで廻漕し、そのつれづれに船歌をうたい、旅の疲れを慰める役を務めて来たという。その褒美として、寛政元年細川公より頂戴した御座船が歌船であり、現在では大避神社の神輿の海上渡御の際に、神輿船の警固を兼ねて祝言歌を奉納している。現在使用中の歌船は三代目で、昭和三十四年に建造されたものである。天保三年に備前牛窓の船大工大野友治郎が、初代の歌船を模して造った二代目歌船より若干全長が短い、他はほぼ変わっていない。

福田家は坂越に来た当初は廻船業を営んでいたが、三代勘七（文政七年〜大正七年）の時に経営不振となり、廻船業を止めて千石船に使用する桶屋に転職した。四代目の父太吉（明治十年生）の時にまた廻船業に転じ、父太吉は帆船を持って、薪・米・雑貨等を明石や神戸方面に運賃積みで廻漕していた。父太吉のように坂越と京阪神を往復する船が、明治の後期には坂越に十六艘程あったと記憶している。積み荷のなかには糠もあった。当時（明治後

期)、潮見に糠問屋があり(現在前田石油給油所の前)、ここから高松まで運んでいた船もあった。父太吉の頃、坂越から神戸までは一航海七、十日間位であったと記憶している。

幼少時代 小学校が休みになると、父の船に乗り込み手伝っていた。櫓の漕ぎ方、帆の操り方など教わるともなぐ覚えてしまった。私の子供の頃の遊びは、海で舟遊びをしたり、泳ぐくらいであった。特に船乗りの子供だけで遊ぶという訳でもなかったが、当時の坂越では、子供でも櫓を漕いだり泳ぐことができるのが当たり前であった。泳げない子がいると、「泳げるようにしたっろ」と言つて、無理やり海の中に頭を押し込んだりしたものだ。無茶苦茶のようだが、自分もされたし、やった。しても誰も文句を言わなかったし、その子もそれで泳げるようになったものだ(西川氏談話)。

私は小学校五年生の夏休みに、父の船に手伝いとして初めて乗った。それ以降、休みになると父の船に乗り込んだ。父太吉は月に三日も家におれば多い方で、仕事の話は私にはあまりしなかった。船の操り方等も父の仕事振りをみて覚えた。高等小学校一年の時、満州(現在、中国東北部)で製材業を営んでいた叔父の誘いを受けて、満州に渡った。話に聞いていた鴨緑江(朝鮮と中国東北部との国境をなされる河。全長約八百キロメートル。朝鮮第一の長流)が見たかったからである。私は四人兄弟(次男勤治郎、三男三郎、四男福治)の一番上であるが、是非とも家を継がねばならないということもなかった。当時の坂越には船乗りに限らず、一度は他郷へ出て、他人の飯を食わなければ一人前にはならないという風潮があったので、父太吉も強くは反対しなかった。

しかし、渡満後五カ月で脚気を患い帰国せざるを得なかった。学校も止めていたので働こうと思ひ、大正八年五月、第三三池丸みいけに炊かまとして雇われたのが、船乗り生活の初めであった(福田氏談話)。

炊の時代 第三池丸の船主は尾崎村の島佐太郎、船長は潮見の小島清太郎であった。小島清太郎は、日本で十

番目に船長の資格を取った人であった。私の乗った三池丸は乗組員五名の帆船で、九州若松から大阪方面への、石炭の運搬に従事していた。当時（大正八年頃）坂越には、三池丸のような石炭運搬の帆船のほかに、父太吉が操った「シンシ帆船」を含めて十六艘ほどの廻船があった。奥藤家には、赤心丸という持ち船があった筈である。

船では、船長 — ボースン（水夫長） — 若衆（水夫） — 炊（食事・雑用係）の職層があり、船乗りは、最初は炊として乗り込んで仕事を覚えた。船乗りには、「オモチ（船首）で喧嘩してもトモ（船尾）へ行けば話をす」と言われるほど仲間意識が強く、また同郷意識も強かった。三池丸の炊のとき、船主と船長の意見が衝突し、船長が下船してしまった。その時若衆も「船長が下りるなら我々も」といって全員やめてしまった程である。

船の上では娯楽が少ないために、炊は若衆のオモチヤにされるが多かった。私の場合は乗組員が同郷者ばかりであったため、そう無茶はされなかったが、なかには「メシの炊き方が悪い」と言っ、若衆にお櫃の蓋が壊れるほど殴られた炊もいた。

大正八年十二月、三池丸を下りて第二花房丸に炊として乗った。この花房丸は乗組員四名で、船長は潮見の高野貫治郎で、船主でもあった。花房丸も石炭運搬船であった。当初は炊であったが、若衆が徴兵されたためすぐに若衆に昇格し、月給も十二円から十五円にあがった（福田氏談話）。

私の場合は、大正四年十四歳のとき大西源十郎の秀栄丸に炊として乗ったのが始まりである。秀栄丸は五人乗りで、九州若松から大阪まで石炭の運搬に従事していた。時には東京へも行った。若衆には坂越だけでなく、尾崎・加里屋の者も乗り込んでいた。秀栄丸の若衆頭を長兄新三郎が務めていたが、兄弟であったがため、長兄新三郎は

逆に私には厳しくあつた。

炊の仕事は食事の準備が主で、夜明け前に起きて準備をした。食事の時間は船によって異なっており、四時間ごとに食事をする船もあれば、秀栄丸のように航海中は日に四食（朝食・昼飯・晩飯・夜食）と決めていた船もあった。主食は米で、副食は沢庵などの漬物ぐらいであった。船乗りは麦の混じらない「米の飯」が食べられるのが自慢でもあつた。朝飯の時だけ味噌汁を作つた。晩飯は粥をつくるが多かつた。食器は各自の箱膳があり、これに盛り付けて車座になつて食べた。船によっては船長と若衆・炊が別々に食べることもあつたが、秀栄丸では船長・若衆・炊の区別なく一緒に食べた。若衆の食欲はすごいもので、一度の食事で茶碗に七、八杯も食べていた。食事の後片づけも炊の仕事で、食器は海水で洗つた。朝飯が終わると昼飯のダンドリ（段取り・準備）にかからねばならず、炊の仕事も結構忙しかつた。

十七歳の時、潮見の岸本家の持ち船である豊国丸に移つた。岸本家は屋号を大黒屋といい、廻船業だけでなく、石炭問屋も営んでいた。豊国丸は九人乗りで、船長は東之町の照峰さん、若衆には新浜村（現在御崎）の者も二名乗つていた。私が一番年少であつたため、この船でも最初は炊であつたが、すぐに若衆に昇格した。秀栄丸に乗つていた時分で、炊の給料は月四円五十銭、若衆で十円位であつた。豊国丸もその位であつたと思う（西川氏談話）。

服装と仕事　船乗りの服装は、下着は六尺袴、その上に縦縞のパッチと筒袖のシャツ、冬はその上にヤンザ（綿入れで袖なしの厚着）を着た。足には足袋を履くが、雨の時は濡れて滑るので素足になつた。履物は草履で、航海の暇に自分で編んだ。鼻緒はロープの切れ端を利用した。草履の底には、ロープの切れ端を三つ編みにして、真田紐のようにしたものを縫いつけ、コールドールを塗り、砂を付けた。擦り減るのを防ぐためと、滑り止めのためで

ある。蓑かぶや笠などの雨具は、動きの邪魔になるので着なかつた。雨天の時はシャツやヤンザを重ね着したりして、身体が冷えないようにした。被り物は手拭かぶだけで、何時も鉢巻かぶきをしていた。昼間は頬かむりは許されたが、夜のワッチ（当直・見張りのこと）の時は、「（頬かむりをする）風の音が聞こえなくなる」との理由で、許されなかつた。手袋は、布で親指と人差し指、後の三本は一緒に入れるという三本袋の手袋を自作して使用した。（西川氏談話。手袋の項は福田氏談話。両氏とも服装については同じ内容であつた。）

当時帆船で石炭を運搬する場合、一航海（九州若松と大阪間の往復）に約一カ月かかつた。荷積み・荷揚げの期間も要るから、一年で十〜十一回航海ができれば良い方であつた。航路は往復路ともに北側（本州側）を航行したため、南側（四国側）の港には立ち寄つたことはない。港に寄るかどうかは船長が風向き、潮間しほま（潮流）などを判断して決めた。上関・室積（山口県）、糸崎・木の江・御手洗（広島県）、宇野・下津井・牛窓（岡山県）などに寄港した。兵庫県内では坂越の次が兵庫であつた。室津は港が小さいため不便であり、他船も坂越によく入港した。当時の帆船の速力では、京阪神と坂越間が丁度一日の航海距離であつたため、坂越は帆船の寄港地として賑わつてゐた。航海中、昼間は風向きさえ良ければ仕事は舵取りかたくらいで、交代して任務についた。空き時間はデッキ（甲板）洗い、帆の修繕、ロープの繕い、船体のペンキ塗り、私物の修繕などをやつた。帆は白木綿の厚手の布を重ねた物であつたが、重ね部分が風を受けてよく綻ほつびた。畳職人が使用するような針やアテコ（当子）を使い修繕した。夜間は二時間おきにワッチに立つた。

船が港に着くと荷積み・荷揚げの仕事があつた。荷積みのりの時は船倉内で石炭をバランスよく均ららした。目上の若衆は楽な部所へ行くため、新規の若衆や炊火は一番シンドイ（疲れる）所で真っ黒になつて働いた。大阪での荷揚げに

は時間がかかる場合もあった。大きな石炭問屋への荷であれば、倉庫へ運び入れるだけでよかったが、小さな問屋の場合には、船を倉庫代りに使うことがあった。そのため荷がはけるまで停泊せねばならず、上陸もできなかった。しかも「粉炭だけくれ」と注文する場合もあり、その都度節せちにかけねばならず手間がかかった。

帆の操縦と船宿　三池丸・花房丸・秀栄丸・豊国丸のいずれも帆船である。この他にも、当時坂越には高島家の日出丸・天神丸などがあつた。

帆の操り方は、若衆の仕事振りをみて覚えた。帆船の操縦は、風が頼りのため、天候の移り変わりを読み取る判断力が求められた。夏は南風みなまぜ、冬は北西風あなせが良く吹いた。北西風は上り荷の時は楽であつたが、下りの時は逆風で操縦に苦労した。特に下りは空船であつたためバランスが悪く、操縦が難しかった。そのほか瀬戸内海では南西風なせし、東風こち、北風きたが吹いたが、「五月雨降つて西」と、五月頃は西風が吹くと雨になることが多かつた。また、朝の空模様で今日一日の風向きを判断する必要もあつた。今日は南風が吹くと判断すれば、前もって船を通常の航路より南へ持つていかなければならなかつた。そうしなければ航路をはずれてしまうからである。現在でも、当時体で覚えたことが習癖になつてゐるためか、風向きには敏感である。帆の操縦は、理屈でなく体で覚えこんだため、今でも帆船を操る自信がある。

航海中、船長は風向きや潮間を判断して寄港地を決めた。寄港地は前述したとおりである。特に糸崎や木の江には「タデ場」（船についた船虫を殺すために、船底を燻もよほらせるようにしたドックのこと）があつたため、夏はそこで一泊した。この「船タデ」の時は、船主から酒が祝儀として振舞われた。

入港すれば、現地の船宿の者が魚や野菜などを持って挨拶に来た。彼らを船乗りたちは「港のムシ」が来たと呼

んでいた。持参してきた魚や野菜を受け取ると、その船宿に投宿することを意味した。船宿では風呂を沸かしており、船乗り達は連れ立って入った。船宿の料金は決まっておらず、受け取った魚や野菜の代金を想定し、その二〜三倍の金を渡す習慣であった。

当時港のなかにはヒメ（女郎のこと）がいる港もあった。船乗りは入浴は許されたが、上陸して泊まることはできなかったため、ヒメはオチヨ口舟に乗って誘いに来た。ヒメのなかには昼間は漁に出て働き、夜になればオチヨ口舟に乗り込む娘もいた。当時遊び代は八十銭から一円位であつたらうか。若衆の給料からすれば高かつた。また大阪に着いた時は連れ立って活動写真（映画）をみに行ったりした。（若衆時代の項は両氏の談話を総合してまとめたものである）

日和相撲　航海がうまくいかなかつた時、ゲンナオシ（気分転換）に「日和相撲」を興行する場合もあった。私が体験したのは御手洗港であつた。この時は西風が強くて航海ができず、港に多くの船が停泊していた。船宿の亭主が興行主になり、各船から寄付を集めて行なつた。地元の者を西方と東方にわけて相撲を取らずが、わざと西方には弱い者を集めて負けるようにしておいた。当然東方が勝つわけで、東方が勝つたから東風が吹くといつて喜ぶ仕組みであつた。他愛のない遊びであるが当時は流行していたようで、東京へ行った時にも日和相撲の話をしていた（西川氏談話）。

乗り初め　正月の二日には乗り初めをやつた。私が乗っていた花房丸では次のようである（大正八年頃）。

二日の夜明け前に炊は茶の準備をしてから、陸にいる船長を呼びに行く。若衆は乗り初めの時刻を見計らつて、船長宅へ集まるか直接船へ集まつた。この時は特別の挨拶はしない。全員が船上に揃うと、船長はトモ（船尾）、

水夫長はオモテ（船首）に立つ。若衆・炊は船の要所に立って見ておく。全員が持ち場についた頃、水夫長「（トモを向いて）トモに申し、トモに申し、トモに仕度はようござるか」と声をかける。

船長「トモに仕度はようござる」と答える。

水夫長「ヒアンド・ヒアンド・ヒアンド」と早口に三回唱えて、「トリカジ」と叫ぶ。

船長「トリカジ」と復唱。

水夫長「ヒアンド・ヒアンド・ヒアンド」と早口に三回唱えて、「オモカジ」と叫ぶ。

船長「オモカジ」と復唱。

水夫長「ヒアンド・ヒアンド・ヒアンド」と早口に三回唱えて、「ヨーンロ」と叫ぶ。

船長「ヨーンロ」と受ける。

水夫長「ヒアンド・ヒアンド・ヒアンド」と早口に三回唱えてから、金槌（材質は樫、長さ約五尺（約一五一センチ）。錨の錆落としをする道具。オモテに常備）を左右二本持ち、甲板を突きながらトモの方へ歩く。船霊様は耳が遠いため、この音で目を覚まさそうとする目的である。

儀式が終わると、全員トモの船長室に入り、お茶を飲みながら年始の挨拶をする。特別の言葉ではなく「明けましておめでとうございます」程度のものであった。その後全員上陸し、お宮（大避神社）に参拝した。このころ夜が明けた。乗り初めのために、特別に船を飾ることはなかった。マストに門松を、トモに船名入りの幟を立て注連縄を張り、神棚に供物をする位であった。（福田氏談話。なお西川氏によれば、西川氏の経験した乗り初めでは、「トモに仕度はようござるか」が「……ござんすか」と江戸の方言で行なっていたという。）

四、廻船と海難

大西 孜

(1) 赤穂廻船の海難

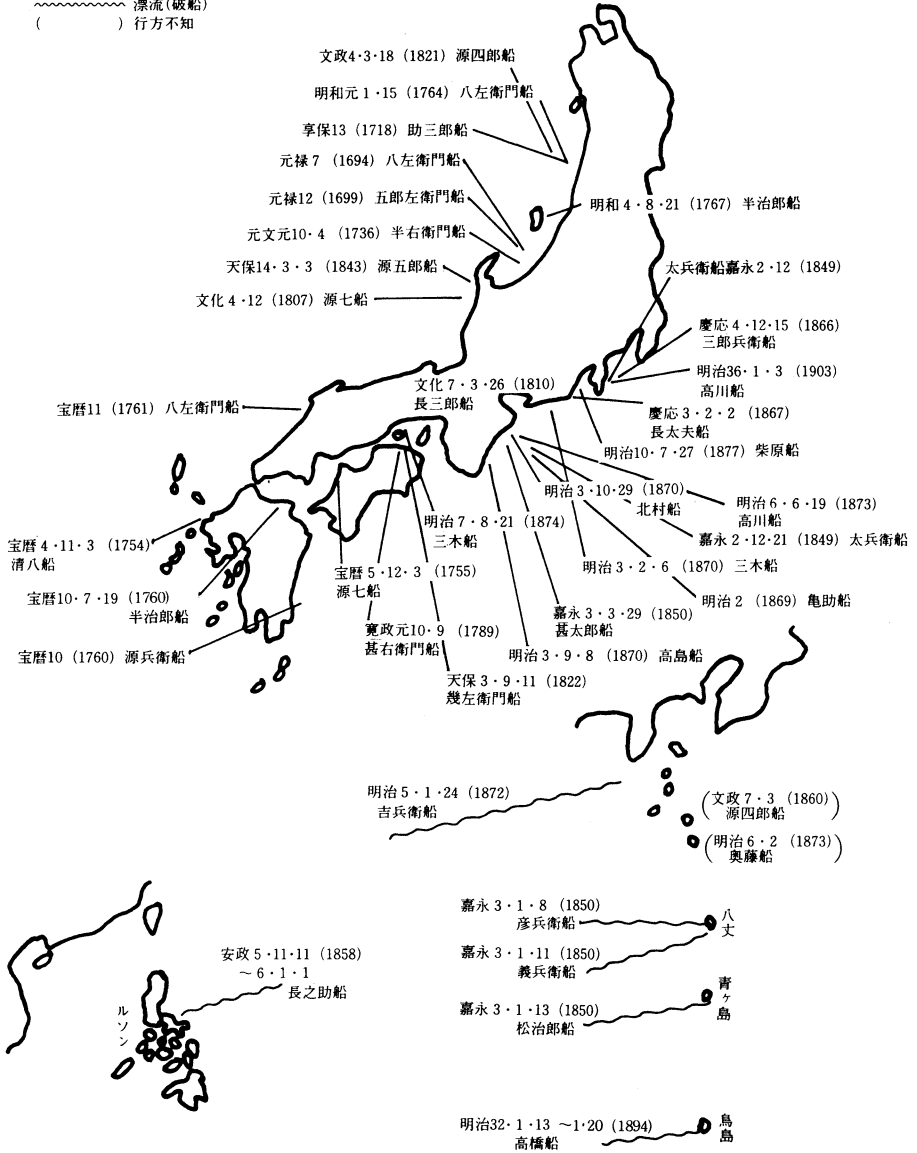
「私の先祖の誰彼は、何処の船に乗っていて、何処で難破した。」と、かつて坂越ではよく聞かれたものである。明治時代の末頃まで、航海技術の未熟さや船体構造の欠陥に加えて、日本沿岸の気象・海象の悪条件が海難を一層多くした。さらに、就航船が多かったことも海難を多発させることにもなった。

赤穂廻船も例外ではなかった。元禄七年（一六九四）から明治三十二年（一八九九）までの約二百年間に、破船三十隻、破船して漂流した船六隻、行方不明の船二隻の海難事例がある。記録に残っている海難事例をまとめると次図のようになるが、実際はこれに数倍する事例があったと思われる。

図に示した海難事例を海域別にみると、日本海側沿海域十隻、九州沿海域三隻、瀬戸内五隻、太平洋側沿海域二十隻となる。さらにこれを年代的にみると、日本海側沿海域で海難にあった十隻のうち、七隻は一八〇〇年代以前の事例である。これに対して、太平洋側沿海域では二十隻のうち十八隻が一八五〇年以降海難にあっている。このことから赤穂（坂越）の廻船は、一八〇〇年代を境にして日本海側沿海域から太平洋側沿海域に活動場所を変更

赤穂廻船海難図

————— 破船
 ~~~~~ 漂流(破船)  
 ( ) 行方不知



した事情が考えられよう。幕末から、江戸（東京）への赤穂塩の積み廻しが多くなるにつれて、海難も太平洋側沿海域において多く発生するようになったのではないだろうか。

現在確認される海難にあった廻船三十八隻のうち、航行不能となり漂流・漂着したものが五隻、漂流中に外国船の救助を受けたものが一隻ある。廻船が漂流しながらも助かるということは極めて稀なことであった。このうち安政五年（一八五八）に鹿島灘沖で遭難してフィリピンのカタンロウガン島に漂着した光塩丸と、明治三十三年（一八九九）に紀州日の御崎沖で遭難して鳥島（八丈島より南三〇〇<sup>キロメートル</sup>）に位置する小島に漂着した末吉丸については、克明な記録が残されている。まずこれらの日記をもとに、漂流着のようすを示してみよう。

（光塩丸の漂流）

光塩丸 加里屋・那波屋長之助船一四〇〇石積、

水主 同 己松 水主 同 新湊弥四郎

二十九反帆

同 佐方村市太郎 炊 坂越浦 弥四郎

乗組員

安政五年（一八五八）

沖船頭坂越浦庄三郎

水主 姫路領 溝ノ口村 嘉市

十月 六日 奥州石ノ巻から米積廻し請負

梶取 同 浅吉

同 芸州広島民三郎

十月 十日 浦賀出帆

水主 同 善四郎

同 同 利助

十月 十二日 鹿島灘で大山風 船玉持ちがたく帆柱

同 同 権八

同 水戸生 浦賀住 金兵衛

切断、綱碇曳かす、子丑、寅卯の風、

同 同 源蔵

同 房州立山清五郎

西南へ流される

十二月 十四日 梶巻込、表碇二頭曳かす、この日から

一月 一日 明六ッ大きな島 (PANAY) 南西にあ

米一升五合仕舞、一食米五合粥、水は  
雨水を用いる

り、七ッ時この島へ漂着、磯多し、島  
人三人いくりに舟にて来るも言葉一切判

十二月 十六日 南風にて波浪なし、柱の株巻だし桁を

らず、腰に庖丁差して恐ろしき姿なり、

柱に立てる、夜風強くなる

浪高く光塩丸水船となり、島人助けに

十二月 十九日 大南風、五ッ時大北東風、船東の方へ

より橋舟で上陸する

流される

浦名バカマノウ (BAGAMANOC)

十二月 初 食物少くなる、山 (陸) が見えますよ

村名カベタンビリシヤノウ

うに神様に神くじ、十二月十二日に山

島名カタンロウガン

が見えるとの神くじくだる

(CATANDUANES)

十二月 十七日 明方、富士山のような山が表 (船首)

一月 二日 五月 二日 バカマノウに滞在

の方に見える、二、三里傍らに島が一ッ

五月 二日 ビラ (ビラク・VIRAC) 、大将コ

見える、この所の陽気六、七月のよう

ミニナドホセイジャシヨウの手船に乗

で衣類身にかからず

り、バカマノウ浦出船

十二月 廿三日 南西の方へ流れ速し

五月 十七日 五月 十七日 ビラ (ビラク) 入津

十二月 廿四日、廿五日 浅瀬あり

五月 十七日 五月 廿六日 ビラ (ビラク) 滞在中

安政六年 (一八五九)

五月 二十五日 アルバエ (レガスピ・LEGASPI)

入津、役所の大将ドウノホウアンの世話になる

五月二十五日～二十六日 アルバエ滞在

五月二十九日 ドウノホウアンの手船、カシイペイ号

に乗船アルバエ港出船

六月十日 マネラ（マニラ・MANILA）川入津

六月十日～二十日 船中に滞在

六月二十日～三十日 マネラ川中州の寺に滞在

七月一日～十月二十日 チャイナエモイチャンチュウウの

村長に引きとられ、空家を一軒

与えられて滞在する、

十月二十三日 唐人村長の世話により、イギリス船ア

ンホロギス号に乗船してマネラ出船

十二月十五日 エモイ（アモイ・AMOI）湊入津

十二月十五日～十二月二十三日 アンホロキス号船内に滞在

十二月二十四日～十二月二十日 入港のマネラ船に移り船中

に滞在

十二月二十日 唐人役所の世話によりイギリス船に乗船、帰国の途につく

万延元年（一八六〇）

一月 八日 五島を見る

一月 九日 大風雪のため長崎沖に滞船

一月 十日 長崎口にかかる

一月 十三日 長崎湊入津、役人乗船して取調べあり、

小舟により上陸、大波止御番所へ収容

される

梶取・浅吉の記録「石バニヤ国マネラコトバ、カタンロウガン嶋同」より

（末吉丸の漂流）

坂越浦・高橋孫十郎船 一八三頓、船長山谷

弥三七 九人乗り

明治三十二年（一八九九）

一月 三日 東京よりの帰途、紀州日の御崎沖にか

かるころより、風浪次第に烈しく東南

へ流される、大島あたりで帆柱切断

一月 廿日～一月 七日 風浪烈しく陸影見えず、飲料水・

食糧節約、海水で炊飯するも辛

くて食べられず

一月 六日 風浪やや衰える、人の住む所へ着くよ

う折る

一月 三日 南方に島影を見る、夕刻島に接近す、

灯りをつけた小舟来るも接触できず引

返す、暫くして小舟来る、末吉丸を放

棄して小舟に移乗し島へ上陸す、

島名 鳥島（八丈島より南三〇〇キロトルメ）

一月 廿日～四月 六日 島人とともにシラボ（阿保島）

の白毛採集作業に従事する

四月 七日 午後九時ころ二発の大砲鳴る、伝馬舟

来り、見ると海洋丸船長・小島岩吉さ

んほか顔見知りの人達である、小笠原

島へ寄港したところ、末吉丸の船額が

漂着していたので、もしやと思い鳥島

へ立寄った、とのことである

四月 六日 海洋丸に乗り出帆

四月 二十日 房州館山入港

（付記）

山谷弥三七 坂越三〇一四の一 安政三年十

二月八日生

小島岩吉 坂越九五一 慶応元年四月十日

生 昭和二年三月三十日没

## (2) 赤穂塩船漂流記

次に、この記録をもとに、光塩丸難船の様子を再現してみよう。

あれは、安政五年秋のことです。九月二十九日私（船頭。庄三郎）の乗る光塩丸（赤穂加里屋。三木長之助船。二十九反帆。一四〇〇石積十二人乗り）は品川に入津して、北新堀の喜多村富之助方へ主人荷物赤穂塩の荷揚げも無事終わりました。

十月の初めのことでした。喜多村主人より浦賀の鎌倉屋の仕事で奥州、石の巻よりの米の積みまわしの話がありました。石の巻は、光塩丸にとって経験のない航路であり、一まつ不安がありました。増水主（ましかこ・増水夫）など一切を、鎌倉屋で手配することであり、ほかならぬ喜多村主人の依頼でもあるので、積みまわしを承諾しました。

十月中江戸に滞在し十一月二日、品川を出船、神奈川へ入津して「たて船」（船底をくん焼すること）し、十一月四日、神奈川出船、十一月五日、浦賀入津、鎌倉屋荷物の繰り綿、茶を積み込み、増水主（ましかこ）の三人も雇い入れ、十一月十日奥州石の巻へ向けて出帆いたしました。

十一月十一日鹿島灘にかかるころから、北西風がしだいに強くなり、波は高く、空もまっ黒になってきました。

旧暦の十一月は今の十二月にあたり、現在の気象現象から言えば、西高東低の気圧配置のもとで、急速に発達した低気圧の暴風圏にまきこまれたこととなります。雪まじりの強い風と、高浪がおそいかかってきました。急いで、

かじもまき揚げ、表（船首）に碇を二頭たらしましたが、積み荷が繰り綿であり、船足の軽い船は、高波にほんろうされ、北東へ流されて行きます。

水密甲板のない船は、船垣を越して打ち込んでくる海水のため、水船になる危険があります。水主（かこ）を叱咤して、懸命にアカのくみだしをしたものです。

このままでは船体がもたないので、最後の手段として、おみくじをいただくこととしました。

今から思えば、ずい分迷信めいたことですが、当時はご神託をいただくことと必ず助かると信じていたものです。それは、髪を切るか！ 荷物を捨てるか！ 帆柱を切るか！ 神のご宣託により決めることです。

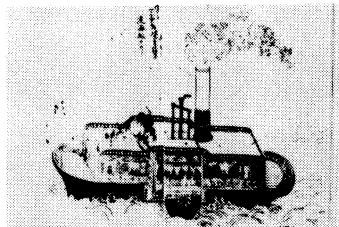
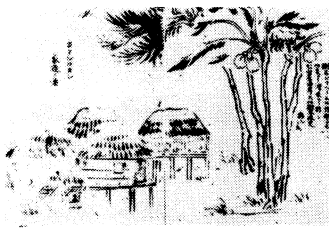
一寸角に切った紙三枚に、それぞれのことを書き込み、一升ますに米八合を入れ、紙を丸めて米の上に置き、水ごりをとった私は、大神、観音さまを念じて、御幣をその上にかざし、最初にあがった紙により、帆柱を切れとのご神託をうけました。

帆柱を切断するといっても、やぐらの上の部分で八十センチもある、数本の柱を寄せ合わせたタイマツ柱であり、ゆれ動く船上で、オノによる切断作業は容易なことではありません。それでも、水主（かこ）三人が交互にオノをつかって二時間ほどで切断しました。

船首に碇を二頭たらし、船首を風上に向けるようにして、横波から船を守るようにしましたが、北東の強風は、船を西南の方へ流してゆきます。

十一月十四日から、一日に米一升五合をカユにして、十五人の食事とすることとしました。水は雨水を用いました。





## カタンロガン島

(上段左) カタンロガン島の様子

(上段右) 〃

(下 段) マニラの渡海船

十一月十八日になって、風波もやっと弱まりましたので、帆柱の株をとり除き、帆ケタを柱とし、帆を十三反に縮小して、南風を利用して北上をこころみました。一四〇〇石の光塩丸に三〇〇石程度の帆の能力しかなく、翌日午前四時風が北東になり、帆柱のない船は、洋上を漂う木片となってしまいました。

十二月になり、食物も少なくなってきました。どうか、陸地が見えるよう、神仏にお祈りしたものです。

十二月十二日の明け方、富士山のような山が船首の方に見え、二、三里はなれて島が見えたときは、船中一同、神仏の加護と驚喜しました。幸い船は島の方へ流されてゆきます。こちらの陽気は、七、八月のよう、とても衣類を身につけていることができません。

一月一日、午前四時ごろ、南西の大きな島に近づき、午前八時ごろ島の沖の磯に乗りあげました。しばらくすると、島人が三人丸木舟でやって来ました。何やら、こちらへ呼びかけますが、言葉がわかりません。よく見ると、色が黒く、腰に包刀（蛮刀）をさしており、恐ろしい姿です。しかし、別に危害を加えるようすはないので、光塩丸を放棄して橋舟（伝馬舟）で島へ上陸しました。五十二日ぶりに味わう陸

地の感觸でした。

後でわかったことですが、この島は、ルソン島東部のカタンドロン島 (CATANDUANES) で日本の淡路島ほどの島であり、上陸したところは、バカマノウ (BAGAMANOC) とひうところでした。また、十二月十二日に見えた富士山のような山は、マヨン火山 (二四五〇呎) でした。

バカマノウ村の人達は、私も十五人に、たいそう親切にしてくれました。わからなかつた言葉も、四カ月間滞在するうちに通じるようになり、カシキ (炊事夫) の近之助 (十八歳) など、村長の娘と親しくなり、私もが村をはなれるとき、ぜひとも、近之助だけは村に残してくれるようにと、村長から哀願され、私を困らせたものです。

五月二日村に別れをつけ、島の中心ビラク (VIRAC) への九日間の船旅につきました。五月十九日にビラク出船、五月二十五日、マヨン山のふもとの港町アルバエ (現レガスピ) へ入港。五月二十九日、アルバエを出船、六月十日、マネラ (マニラ) 川に入港し、役人の指示により、中州の寺院に滞在することになりました。

そこには、三〇〇人ほどの老人が収容されていました。食事は、牛や魚の塩づけした、だんごめしなど、いっさい塩味で、それはひどいものでした。

五十日ばかり、その寺で、起居したでしょうか、早く日本に帰りたい、と、役人に懇願しておりましたところ、唐人街の村長に引きとられることになったのです。私どもに、空家一軒と、炊事道具、寝具、米、調味料、その上毎日副食代として、銀貨一枚を与えてくれました。

この唐人街で、アモイ行き船便を待つことになったのです。

十月二十三日唐人村長の世話でイギリス船、アンホロギス号に乗船。

十二月二十一日アモイで別のイギリス船に乗船し、長崎港に入船したのは、万延元年一月十二日小雪の舞う寒い日でした。

後書き

乗組のかこ（水夫）のうち、姫路領の二人は、帰国してから、藩主の御座船の水主（かこ）として抜擢されたという。坂越浦の七人は船乗りとしてその生涯を終える。

文中「私」庄三郎は、金光丸（大俵塩六五七一俵積）の船頭となる。

坂越浦船乗りの体験記録より

大西吉甫

「赤穂塩船漂流記」（赤穂歴史研究会坂越支部発行・ふるさとの歴史No4）を再録

### (3) 海難と処置

廻船が海難した場合、船長はこれを浦役人に届け出なければならぬ。これを怠ると処罰を受けた。海難届があると、浦役人により事実調査が行なわれ、浦手形が交付された。船頭は帰着後、地元浦役人に提出し、海難証明材料とした。浦手形の様式は一定し（史料Ⅰ）、海難届・浦手形交付などの手続きの一切を、各浦とも船宿が代行した。

船が難破した時、浦辺の者は救助を義務づけられていたし、積み荷・船具等を取り揚げ、まとめて役所へ報告した。

積み荷等の処理については、各藩により異なっていたようであるが、天保十年（一八三九）以降統一されたようである（史料Ⅱ）。

（史料Ⅰ） 浦証文・浦手形の例文

羽州庄内飽海郡十里塚村於北浜、及 難船乗揚候ニ付浦手形之事

今般、播州赤穂郡坂越浦大西源四郎船、冲船頭七  
五郎・水主共拾貳人、外ニ増水主三人、都合拾五  
人乗之弁才船老艘、国元より木綿六拾反入四拾貳  
箱・下古手三拾貳箱・同のし継取合拾壹箱・立ヶ  
浜塩五斗入百俵積、外ニ秋田能代行之藍玉五本運  
賃積、先月十七日出帆、同二十八日下ノ関江入津、  
当月朔日出帆仕、同五日隠岐国目貫江入津、同十  
五日出帆、秋田を心掛下候処、同十七日納米島よ

り半道程下ニ至、風合悪舗相成候ニ付、戻し申度  
色々相働候得共、南風強相成、同夜五ツ曉頃より  
西風烈舗吹来、帆を持候事茂不叶、其上甚舗風波  
ニ罷成、被吹流、同十八日五ツ時当村方より拾町  
程北、北浜江難船被乗揚候ニ付、早速村方より大  
勢罷出、船頭・水主介抱候処、船底痛、あかの道  
付相見候、  
右難船之趣、城下江及進注ニ候処、佐川貞治・齋

藤銀四郎罷越、難船之次第被相尋候、村方のもの  
等果の致方茂無之哉、かき揚荷・諸道具ニ至るま  
で取隠、理不尽之致方茂於有之者、仮令取包候共、  
追而風聞有之段ニおいてハ、急度曲事可申付之旨、  
嚴重ニ被為吟味候

則、取揚候品々左之通相渡候覺

一、木綿四拾貳箱 但六十反入

内貳箱壹歩 御定法之通、浮荷揚賃貳拾歩

一、請取申候

此代錢八拾貫六百四拾文 但壹反ニ付六

百四拾文

残三拾九箱九歩 相渡申候

一、下古手三拾貳箱

内壹箱六歩 右同斷

此代錢貳拾貳貫文 但壹箱ニ付拾三貫七

百五拾文

残三拾箱四歩 相渡申候

一、のし継拾壹箱

内五歩五厘 右同斷

此代錢壹貫九百貳拾五文 但壹箱ニ付三

貫五百文

残拾箱四歩五厘 相渡申候

一、塩百俵 但五斗入

内拾俵 御定法之通、沈荷物揚賃拾歩一、

請取申候

此代錢五貫五百文 但壹俵ニ付五百五十

文

残九拾俵 相渡申候

一、藍玉五本

内五歩 右同斷

此代金三步二朱 但壹本ニ付壹兩三步

残四本五歩 相渡申候

一、本船 壹艘

一、帆柱 壹本

一、帆 壹下り

德治郎 印

一、帆桁 壹本

勘兵衛 印

一、碇 八頭

与八郎 印

一、揖 壹羽

三右衛門 印

一、綱取合 拾五房

喜助 印

一、橋船 壹艘

三十郎 印

一、掛硯 拾五

喜右衛門 印

一、船具並諸道具・着替・夜具共不殘

仁右衛門 印

右之品々、酒田船宿柿崎孫兵衛名代庄助立合、相

肝貫 九助 印

渡申所美正ニ御座候、右難船ニ付怪舖儀茂有之候

大組頭 喜惣右衛門 印

ハバ、幾重ニ茂穿索可被致旨、佐川貞治・斎藤銀

沖船頭七五郎殿

四郎再往被相断候得共、疑舖儀毛頭無之、証文取

前書之通、双方逐吟味、相違無之段承、届未書仍

置、浦手形仍而如件、

而如件

文政四辛巳年三月二十一日

酒井左衛門尉内 佐川貞治 印

五人組頭 半三郎 印

斎藤銀四郎 印

善兵衛 印

三平 印

(史料Ⅱ) 難船に対する幕府の定法

—大避神社所藏文書—

一、御城米併武家荷物、その他商内荷物共、海上ニ致難船候節、荷物陸揚致候者分受取前之儀、是迄区々之場所ニ有之候ニ付、以来別紙之通可相心得有、右者江戸表より被仰出候

一、浮荷物と沈み荷物と浦高札ニ有之候ハバ、船中之荷物無之、難船之節海中江散乱致し、海上ニ浮き、又ハ海底ニ沈み候荷物之事有之、海上浮き有之荷物取揚ヶ候ものハ二十歩一、海底ニ沈み荷物取揚候ものハ十歩一受取可申候

一、船中ニ有之候荷物之儀ハ、沈み船ニ可至程之水船、並ニ沈み船ニ而も浅き場所ニテ陸揚致し候荷物三十歩一受取、深海江沈み船之陸揚いたし候分ハ歩一受取申間敷事

右之通相心得、得分一受取高之義者、寛政七卯年御触之通、其品相当之代金ニ而受取可申候、尤も差向難決之義も有之候荷物ハ、不残荷主江預置、分一受取高之義ハ其時々可被問候

天保拾亥年

#### (4) 坂越浦支配海域における海難

坂越浦支配海域における破船は、享保十一年（一七二六）から安政四年（一八五七）までの間に二十九隻あるが、そのうち十隻が筏が瀬（通称かべ、丸山沖）で破船している。

筏が瀬において破船する船が多いので、坂越浦では丸山に「番小屋」を設け、見張り人を常駐させ、海難に対応した。

陸揚げした船の積み荷は小舟で大道浜まで廻漕し、日没になれば、かがり火を燃やし夜警した。また損傷の少ない水船は、坂越浦まで曳航し、「生船」として船頭に渡し、損傷の多い船体は、坂越浦で入札処分にした。

遭難船の救助には専ら船宿があたっていたが、船が機帆船化するとともに船宿もその機能を失い、大正年間に至ると遭難船の救助には、各町の若衆組織があたるようになった。

そのうち、西青年会（協和社）の記録によると、次のとおりである。

(1) 大正十一年三月二十日午後三時ごろ、西風強く入港せんとして黒崎沖十町の位置にさしかかるや折悪しく転覆す。

紀州海草郡内海町 宝栄丸・十八頓積 船主・東野岩吉 船長・東野由三郎  
救助参加人員 二十日六名、二十一日二十名

(2) 大正十一年十月二十七日午前一時丸山にて破船。

大阪西区天保町 丸（丸ヶケカ） ⑤五号 船主・橋本市太郎 船長・松岡善次郎 積荷塩八貫俵・千三百俵



救助参加者四名 謝礼・西青年会あて六円

(3)大正十二年十一月三十日午後六時、西北風強く入港せんとして、丸山沖かべの瀬に座礁す。

山口県上関村長島 明栄丸・四十三頓積 船主・水野久平 船長・水野久平 積荷・石炭

救助参加者十名 謝礼・西青年会あて二十円

(筏が瀬における破船)

○享保十六年 (一七三二) 一月三日 筑後柳川・市内船

○延享元年(一七四四) 八月十日 竹原浦・善兵衛船

○寛延二年(一七四九) 八月一日 日向名浦・忠左衛門船

○宝暦五年(一七五五) 十二月六日 日向油津・仁之丞船

○天明六年(一七八六) 九月三十日 長門阿川浦・萬右衛門船

○文化五年(一八〇八) 三月十九日 大阪・松屋彦左衛門船

○文政九年(一八二六) 十一月六日 安芸三ツ庄浦・竹内為次郎船

○天保六年(一八三五) 十二月十九日 長門藤北浦・藤五郎船

○天保十三年(一八四二) 十二月十七日 安芸大原浦・藤助船

○安政二年(一八五五) 十一月 備中乙嶋・久吉船

(その他の海域における破船)

○享保三年(一七一八) 十一月二十九日 伊予沖ノ嶋・甚右衛門船

- 享保十一年(一七二六) 一月十五日 安芸浦外浦・吉郎左衛門船
- 享保十一年(一七二六) 十月二十二日 安芸・七蔵船
- 宝曆十年(一七六〇) 四月 周防小郡・清助船
- 宝曆十四年(一七二九) 三月二十一日 備後尾道・徳次郎船
- 明和八年(一七七二) 六月七日 阿波中嶋浦・甚太夫船
- 明和八年(一七七二) 十一月四日 備前郡村・増治郎船
- 明和九年(一七七二) 九月二十二日 安芸京泊り・惣吉船
- 天明三年(一七八三) 二月二十九日 安芸小万浦・利三郎船
- 天明三年(一七八三) 二月二十九日 長門大浦・与右衛門船
- 天明八年(一七八八) 二月七日 豊前長浜・甚四郎船
- 享和三年(一八〇三) 十月二十七日 尼か崎(ニカマ)・庄右衛門船
- 文化元年(一八〇四) 七月十五日 豊後小中嶋・清右衛門船
- 文化元年(一八〇四) 八月二十九日 塩飽福田浦・善次郎船
- 文化元年(一八〇四) 八月六日 備中瀬尾・藤次郎船
- 文化十四年(一八一七) 四月十七日 東二見浦・源助船
- 文化十四年(一八一七) 九月二十四日 日向川内名村・惣左衛門船
- 文化十四年(一八一七) 九月九日 薩摩摺之浜・市郎兵衛船

○安政四年（一八五七）七月一日 備前日生浦・庄三郎船

(5)黒崎墓所（他所三昧）

坂越の南西、洞龍の海岸黒崎の地に「他所三昧」と呼ばれる墓所がある。この墓所の広さは一畝二十七歩、（約一八八平方尺）、ここは江戸時代に坂越浦で客死した人々の墓所であった。江戸時代、坂越浦では、浦人の火葬は高谷・鳥井・潮見・西の四ヶ所で行なっていたが、坂越浦で客死した他領の者は黒崎の地に埋葬するのが通例であった。

坂越に残された浦方文書（報徳会文書・大避神社文書など）や妙道寺過去帳を調査した結果、この黒崎墓所には、北は出羽国秋田から南は薩摩国種子島まで二十九ヶ国、百三十名の人々が埋葬されていることがわかった。彼らの多くは、航海中に病死した船乗り（船頭・水主）や乗客である。

以下、この黒崎墓所から、江戸時代「海に生きた人々」の生活の一端をみよう。

死没者とその処置

廻船乗員に死亡者があつた場合、航海中のときは最寄りの港へ入港して、浦役人へ届け出るものであるが、これら届出事務の一切は船宿が代行している。坂越浦には、渡海屋・登瀬屋・玉屋・福地屋・歌屋・湊屋・土佐屋・浜屋・蛭子屋・渋屋・魚屋・大黒屋・姫路屋・浜市屋等の船宿がありそれをしていた。

届け出を受けた浦役人は、死亡の原因、宗旨について吟味し、疑わしいところのないのを確認して埋葬を許可している。埋葬の取り置きは、浄土真宗妙道寺が行なっているが、真言宗妙見寺の取り置きも享保十年六月（一七二五）に一例を見る。

埋葬が終わると、寺院は届け人に対して、「取置証文」を交付し、届け人は、浦役人と寺院へ死亡、埋葬の経過について一札を書いて提出している。

### 黒崎墓所埋葬者

坂越字本町にある真宗本願寺派光明山妙道寺は、享禄五年（一五三二）の開基である。この妙道寺に保存されている過去帳の中に「元文三年戊午年三月九日（一七三八）調之 光明山妙道寺 楽存」と巻末に記されている一冊がある。これには元文三年以前が七名、以後は百九名の客死者だけの法名が書かれている。筆跡から見ても、楽存のみによって書かれたものでないことは明らかであり、別巻の存否も今は不明である。また黒崎墓所埋葬者とも明

記されていないが、大避神社や坂越報徳会に保存されている浦状等により、黒崎墓所に埋葬された事情が詳しく把握できるものが数多くあり、その他の伝承から考えて黒崎墓所埋葬者の記録と考えられるものである。

### 黒崎墓所

この過去帳は、宝永七年（一七一〇）春の筑後の人三名が最初の記入であり、以下嘉永元年（一八四八）に至る一三八年間に一一六名を数えることができる。年平均〇・二人、享保以後元文五年（一七四〇）から文化六年（一八〇九）に至る七十年間は、年平均一・一人と五倍強の七十三名を数える。この七十年間は、大避神社・天満宮・妙見寺、妙道寺・常楽寺等、坂越に於て杜寺の造営修復が数限りなく行なわれ



た時期であり、廻船業による繁栄と符合している。

季節に就いては、春二十八人、夏四十人、秋三十三人、冬十五人となる。最も多いのが、旧暦七月の二十一人、次いで三月と八月の十四人、九月の十二人と続き、全体の四割を占める四十七名が七、八、九の三ヶ月に他界している。しかしながら、この過去帳には陸路海路の別や他界した原因は記されていないから、季節的要因を考える場合、海難ばかりでなく浦状に見られる天然痘や時疫熱、暑気さし等の疾病や廻船航行の頻度にも留意する必要がある。

在所に就いては、北は秋田から、南は薩摩種子島、東は伊豆、西は対島に至る二十九ヶ国に分れる。豊後の十三人が最も多く、次で日向の十人で対島を含む九州地方が五十九人と全体の五割を占めている。宝永七年（一七一〇）から宝暦九年（一七五九）に至る五十年間は、十八人中四人を除いてすべて九州地方の人であり、これ以後、土佐・伊勢・伊豆と多様化し、宝暦十年（一七六〇）以後は、九州地方四十二人、その他五十五人となる。これは、九州以外の船の寄航と他領船乗組の増加等が考えられる。

### 墓碑

黒崎墓地にある墓数は、六十余基あり、いずれも埋葬後縁者が設置したものである。風化により損傷しているが次のものが判読できる。

次太郎 阿洲中島浦

釋宗円 天明八、八、二三 尾張半田村栄

和泉屋松右衛門 文化二 伊豫大津長浜

岡村定吉之子 周防佐延徳伏野村

庄七 享和二

釋觀了信土俗名小西徳平 丹後港大向村

高浜乗 文化十二 肥後唐津

釋了女 宝曆十四申 豊後国東郡

釋道円信土俗名巖吉 文化十一、十二、七 尾張知多

郡野間浦

真勝義潮信士亀屋源七 六十七才 阿州中島浦中ノ下

西村與左衛門周吉 天保十二、七、十八 日州児湯郡

美々津

伊隆丸船子太左衛門 三十九才 文政五、八、二十九

尾洲内海東端村

地藏尊

黒崎墓所に一体の地藏尊を安置している。元禄十二年（一六九九）六月二十六日に羽州酒田で死没した浦人の墓  
じるしにと、酒田まで送ったものであるが、同地寺院境内に安置する許しなく放置していたものを、文化八年（一  
八一）二月とり戻し同墓地に安置したものである。

その際には坂越浦各船宿、問屋より五十二人を動員して、石垣土塀を築いている。また、その年三月十五日には  
盛大に法要を営み、浦人達多数が参詣しており、地藏尊の安置、石垣、土塀工事、墓所供養法要のための入用費八六  
四匁一分八厘は浦人の寄進によつてゐる。

秀太郎 二十才 天保八、一、六 種子島島門浦

竹村直吉 文政四、八 尾州智多郡常滑

常家清八郎 文政七、七、八 防州富田吉市

国家宗右衛門 文化七、五、四 防州三田尻浦

西岸寺墓 天明五、五、十 長門笹渡

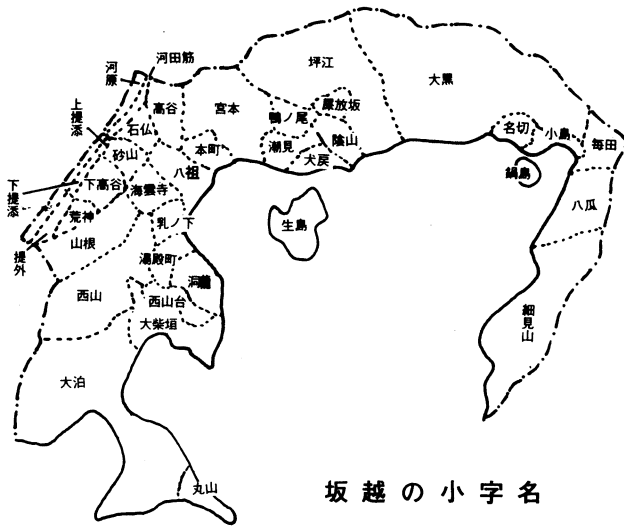
大坪兵左衛門 天明三、五、十三 日州佐土原

太郎衛門 文久二、九、十 尾州大泊村

市太郎 文政五、九、十四 石州田須郡野津浦

岡村與左衛門 長州萩、金谷

## 五、坂越の地名の由来



坂越の小字名

### (1) 地名の部

#### 坂越(さこし)の由来

伝承によれば、皇極天皇の三年(六四四)、秦河勝が、蘇我入鹿の難を避けて坂越へ来たという。これにより「避け来し」が「さこし」になった、と言い伝えている。また、秦氏の一族である酒氏(さけし)が変化した、ともいう。

『風姿花伝書』や『和名抄』等によると、坂越のことを、酒漉村・沙来至村・佐古志・左護・沙来至・シヤクシ・酌子・沙胡志・沙久市・佐護と書き、古名として、登保留ノ里・戸遠留ノ里・登於里宇・登龍・洞龍などがある。

昭和十年、坂越尋常高等小学校発行の『郷土調査』によれば、「さこし」と「とおりう」は、元は別々のもので、天神山より西を「とおりう」といい、東は番所山を

境として東之町と潮見を「さこし」といったという。

本町は、妙道寺あたりまで海で、海が後退することによって本町と北之町が発展してでき、そのため「さこし」と「とおりう」が一つになった。西之町は「とおりう」より移住して栄えた、と述べられている。

洞龍の名は、菅原道真公が、延喜元年（九〇一）に九州へ流される時、坂越に逗留されたことによる、といわれている。

○小字

1 細見山（ほそみやま） 起伏の少ない鎌崎半島が、細く長く、坂越湾の東に横たわっている。これを遠望して名付けられたものと思われる。

2 八瓜（はちうり） 瓜がよくとれていた所である、といわれている。

3 毎田（まえた） 水田があるとは思われない地形でありながら、山の中腹に溜池があつて、田が一枚ごとに段状に作られている。この形状によるのではないか、と思われる。

4 小島（こじま） 永正の頃（一五〇四―一五二一）備前国児島郡釜島に寺を建立し、新田の開拓に当たった多田三郎満行が、赤穂郡上郡町の釜島に、紫雲山西光寺を建立した。満行に従事した人達が、後に坂越の小島に移住した。現在小島に西光寺門徒が多いのは、このことによる、という。小島の名も、これから名付けられたものと思われる。

5 名切（なきり） 「なぎり」とは、「海岸に近く海波の侵し易いところ」の意味で、西日本に多い地名である。



この土地は、醍醐中納言顯基卿になれそめた室津の遊女宮城が、尼となって竹ノ岡禪尼といい、庵住した所と古記にある。

また、この地を竹ノ岡とか涙浜といい、寛政の頃の記録には、泣里（なきり）と書かれている。かつては塚があつたが、今は畑になつてゐる。

ところが『赤穂郡誌』に「竹岡禪尼ノ邸址ハ濱市村ニ存リ。一ニ泣里・泣入トイフ。室津ノ遊女ニシテ名ヲ宮城トイヘリ。醍醐中納言顯基卜情好深カリシヲ、後薙髮シテ庵ヲ此地ニ構ヘ、竹岡禪尼トイヒ、世ヲ没シタリト云フ」とある。

6 大黒（おくろ） 「大畔」と書いているものもある。クロとは畔のようになった小高い所を指し、「黒」とか「畔」の字があてられる。

大黒の海岸には、昔、石を集めて作つた大きな畔（あぜ）が築かれており、その内側に田があつた、といわれている。大黒は大畔によるものと思われる。

7 屎放坂（しほうざか） 「によほうざか」と言いならわしている。海岸に道がない頃は、急な山坂越えであつたため、山を登つたところで小休止し、大小便を催すことになる。屎放坂とは、これにより名付けられた、という説がある。

9 鴨ノ尾（かものお） 山の形が鴨の尾に似ているところから名付けられた、という説もあるが不明。

10 陰山（かげやま） 字義通り、日陰になつている山の意味と思われる。

11 犬戻（いぬもどり） 犬でさえもあと戻りするような、急で寂しい山坂道であつた。通行の難所として、今で

も語られている。

12 潮見（しおみ） 汐見の小高い所に立つと、景勝地として知られる飛着（飛付・飛月）や岩堂（岩戸）など、坂越湾が一望できる。イナミノコーヤ（鑑見の小屋）があった所で、漁業者が潮の具合、すなわち魚の群れ具合を見るのに適した場所である。

13 宮本（みやもと） 大避神社があるのでこの名が付けられたものである。現在の東之町を、宮本町と言っていた。また宮の正面通りを、宮の前とか、宮の下と呼んでいる。

14 本町（ほんまち） 昔は、通り町とも、大道（だいどう）とも言っていた。現在でも大道と呼ぶ人がいる。「古キ往還ノヨシ」と、古記にあり、本通りより来たものと思われる。

15 高谷（たかや） 坂越の赤城山に住んでいた赤穂大領高屋越前二郎為経（法名常楽院行慶、嘉永二年（一一〇七）卒）が出家して、ここに庵を結んだため、高屋（たかや）と呼ばれるようになったという。また、為経の子孫、高屋先生源景義が住んでいたからだ、とも言われている。

16 石仏（いしぼとけ） 字石仏一六四五番地に、石仏と呼ばれる石がある。昔は田の畔にあり、近くの荒神社に運んでも、いつの間にか元の所に戻ってくる、という話が伝わっている。この石仏により字名がついたと思われる。

17 砂山（すなやま） 戦後住宅地になったが、戦前は全部水田であった。明治初年生まれの人が、「私等が子供の時は、今みたいに田圃ではなかった。砂やバラスが高く積もって、灌木や雑草が生えていた。」と言っていた。千種川の石や砂が小高く堆積していたので、砂山と名付けられたものと思われる。

- 18 下高谷（しもだかや） 今の上高谷部落（字高谷）より後の時代にできた土地で、上高谷の下手にある。
- 19 荒神（こうじん） 字荒神に隣接する字山根の山すそに、荒神社が祀られている。この山を荒神山という。花園天皇の正和二年（一一三二）に、高屋先生景義が靈夢を見てこの山に来てみると、三つの幣帛が天から下がっていたので、岩上に権現祠を建てたという。また『峰相記』に「坂越・織潟ナトニ権現天降り給ウヨシ……」等のことがある。荒神は、荒神社により名付けられたものと思われる。
- 20 上堤添（かみつつみぞえ） 千種川堤防の河川側に添った土地である。
- 21 下堤添（しもつつみぞえ） 上堤添の下流にある土地。
- 22 堤外（つつみそと） 下堤添の下流にある。千種川堤防の外側である。
- 23 河原（かわら） 千種川の堤外の川原である。明治の字限図には、秣場（まぐさば）としてある。
- 24 八祖（やそ） 真言八祖（しんごんはっそ）の八祖に由来すると思われる。坂越五山五寺の一つ、八十山長明寺のあった所で、今、八祖山（やそやま）と呼ばれている所にあたる。
- 25 海雲寺（かいうんじ） 坂越五山五寺の一つ、真言宗妙見寺末寺、靈龜山海雲寺のあった所である。海雲寺は天文年中（一五三二〜一五五五）に廃寺となった。
- 26 乳の下（ちのした） 乳の下の井戸がある。この井戸の上に、南朝の皇族、小倉御前の月見の亭（ちん）があったという。亭の下がなまったものと伝えられてある。
- 27 湯殿町（ゆどのまち） 湯屋田と書いているものもある。由来は不明。波打ち際に、エノゴの井戸が二つ並んでいた。

28 洞龍（とうりゅう） 菅原道真が筑前に左遷された時、途中ここでしばらく逗留されたとか、南朝の皇族小

倉御前が坂越へ来た時、はじめは洞龍のあたりに住んでいたという。

坂越全体のことを洞龍とも言っていた時代もあり、坂越全体の古い名称が、今もこの地に使われているのは、理由のあることと思われる（坂越の由来の項参照）。

29 西山台（にしやまだい） 坂越の西側にある西山に続く台地。西山は尾崎に属するという。

30 大柴垣（おおしばがき） 大宮垣と書いているものもある。小柴垣・乳の下と共に、高貴な人が住んでいた所であるといわれ、小倉御前にゆかりがあるとされている。

31 大泊（おおとまり） 西ノ泊・大泊・王泊・西ノ尾泊とも書かれている。菅原道真が左遷される時、ここに停泊したので、御泊と言ったともいわれている。坂越の人は現在も「オトマリ」と言っている。

32 丸山（まるやま） 山の形から名付けられたと思われる。丸山鼻とも言い、坂越と尾崎の境で、海に突き出た所である。

33 山根（やまね） 山の根、すなわち山のふもとの意である。山根道として、坂越から尾崎・加里屋への道が山裾を通っていた。

34 生島（いきしま） 秦河勝が、蘇我入鹿の難を避けて坂越へ来た時、生島へ上陸した。生島には、河勝の墳墓の外、大避神社の御旅所・船小屋・鳥居がある。

昔、この島が焼けて、カヤ原になったことがある。浦人が悲しみ嘆いて、生島にある舟井の外、海岸にある二つの井戸に誓紙を灰にして沈め、生島の木を切ることに約束した。そして毎日のように木を植え

ていった。浦人たちは、朝夕この井戸の水を汲んでいたもので、誓いに背くものは自然に罰を受けた、という。また、坂越に寄航する船も植樹した、という。大正十三年に、天然記念物に指定された。

生島の別名を、活洲・活道山・鞍置島・鞍居島・渡りの島等という。生島の周囲は、十四丁半と記録されている。この島の木を切るものは、必ずタタリを受けると伝えられ、原生林が護られてきた。

生島の名は、河勝が生きてこの島に上がったからである、という説があるが、真偽のほどは解らない。

35 鍋島(なべしま) 鍋を伏せたような形をしているので、この名がある、という。山頂に古墳がある。

「塩は早 よき程なれや 鍋が島 杓子の中へ 入れて見れば」という、細川幽斎の歌が『古今夷曲集』ひなかりにある。これは豊臣秀吉征韓の時、幽斎が坂越へ寄航し鍋島をみて詠んだという。

## (2) 町名(自治会)の部

1 小島町(こじまちょう) 字を以って町名としている(字の項参照)。

2 山杜宅(やましやたく) 大日本紡績(現在ユニチカ化成)の社宅で形成された町である。浜社宅と區別して、山杜宅という。

3 汐見町(しおみちょう) 字を以って町名としている(字の項参照)。

4 東之町(ひがしのちょう) 東浦と呼ばれていたことによる。大避神社があるので、宮本町とも言われていた。

5 本町(ほんまち) 「通り町」とか「大道」と言われていた。坂越の本通りのことである(字の項参照)。

6 鳥井町(とりいちょう) 道の両側に山が迫り、「鳥ヶ峠」とか「鳥」といつていた所である。「鳥栖(とり

すみ」とか「鳥カタ尾」「鳥居」とも書いていたといわれる。

7 上高谷町（かみだかやちよう） 下高谷と区別して上高谷という（字の項参照）。

8 砂山（すなやま） 大日本紡績の社宅で形成された自治会であったが、昭和五十八年に土地が分譲されて、個人住宅となった。現在では上高谷自治会に所属している。

9 下高谷町（しもだかやちよう） 字を以って町名としている（字の項参照）。

10 北之町（きたのちよう） 菅原道真を祀っていた天神山がある。かつて、この地にあった北野天満宮にちなんで名付けられた町名である。

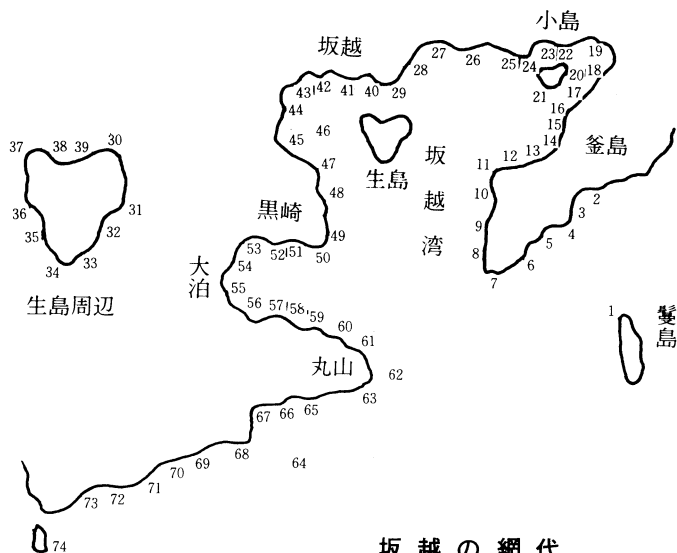
11 西之町（にしのちよう） 坂越の西にあたる。本町の東の海岸を東浦、西を西浦と書いているものもある。この事によると思われる。

12 築地（つきじ） 昭和八年、海岸六千余坪を埋めたてて造成した土地を築地と言った。この土地の西側に大日本紡績の浜社宅ができて、築地自治会を形成した。

13 大泊町（おとまりちよう） 昭和五年西之町より独立して形成した町である。字を以って町名としている（字の項参照）。

### (3) 網代の部

五世紀中頃、この地方を支配していた豪族の墓である小島のみかんのへた山古墳（ゆうのへた古墳）に見られるように、坂越に人が住むようになったのは、相当古い時代と思われるが、その生活は漁業と切り離して考えることはで



坂越の網代

きない。

天の恵み、海の幸という言葉さえ、遠い昔の幻影のように感じられる現在ではあるが、千数百年の間、海を暮らし、海を愛した我々の祖先は、誰よりも海を愛し、海をよく知り、そして海を大切に生きて来たものであった。坂越浦の比類なき景観や、豊富な漁業資源を背景とした生活をよりどころとしてできた地名は、網代と呼ばれる網漁業の漁場の名称として使用されてきたものが多い。

しかし現在では、漁業の変遷と共に地名との接合が減少して、文化形成の上で貢献してきた地名が忘れられつつある。

坂越の海を、そして瀬戸の海を、生き生きと蘇らせるために、今一度この海を見詰めて、毎日のくらしや坂越の将来に希望と活力をもらいたいと思う。

○網代

1 鬘島（かずらしま） 相生市。

- 2 和田(わだ) 波の静かな所。今は一〇〇呎程北に、関西電力の放水口がある。相生市。
- 3 平岩(ひらいわ) 相生市。
- 4 揚げ場鼻(あげばはな) 相生市。
- 5 白ズレ(しろずれ) 相生市。
- 6 玉石(たまいし) 海岸に直径三呎程の玉のような岩がある。
- 7 鎌崎(かまさき) 別名「センゴク鼻」ともいう。相生市と赤穂市の境界。
- 8 百足岩(むかでいわ) 恋が浜ともいう。
- 9 井ノ浜(いのはま) 飲料水になる清水の出る井戸が現存する。
- 10 赤崎(あかさき) 「一本松」ともいう。岩の上に傘を広げたような古い松があった。
- 11 穴ノ下(あなのした) 奥行十呎位、高さ二呎位の穴がある。今は大分埋まっているが、鉱山の跡らしい。
- 12 立岩(たていわ) 直立した岩がある。今は大分欠けている。
- 13 水ノ下(みずのした) 「中鼻」ともいう。早魃の時でも水の出る所がある。
- 14 栗ノ木(くりのき) 栗の木があったからか、今はその木はない。
- 15 向津羅裏(むかづら) 長さ百呎位の浜がある。
- 16 長崎(ながさき)
- 17 大石(おおいし) 浜に直径三呎位の大岩がある。
- 18 亀合(かめぞあい)



- 19 浄ヶ尾（じょうのう） 今は「こじまのうち」と呼んでいる。
- 20 タアラ池（たあらいけ） 鍋島の「こじまのうち」に面した所。
- 21 鍋島（なべしま） 鍋を伏せたような形をしている。
- 22 名切ノ浜（なきりの浜） 長さ三百呎位の浜があった。現在は道路ができて浜はない。
- 23 弘法ノ下（こうぼうのした） 大師堂がある。多量の清水が出ていたが、道路ができてから出なくなった。
- 24 刈又（かりまた） 岩場の先がふたまたになっている。蛙又ともいう。蛙が足を広げたようになってい  
う説もある。
- 25 大黒ノ浜（おくろのはま） 坂越浦では、最大の浜であった。道路ができてなくなった。
- 26 越ヶ鼻（こしがはな） 法師ヶ鼻ともかく。
- 27 坪江（つぼえ） 現在赤穂化成の工場がある。
- 28 地ノ飛付（じのとびつき） 岩洞ともいう。坂越浦十二景の景勝の地。
- 29 潮見ノ鼻（しおみのはな）
- 30 沖ノ飛付（おきのとびつき） 秦河勝公が坂越へ来られた時、最初に上陸された所という。
- 31 堂ノ後（どうのうしろ） お旅所の裏。いな座の舟小屋があったが今はない。
- 32 和田（わだ） 生島にあり、島の浦（裏）ともいう。
- 33 真方（まかた） 伊吹ともいう。古いいぶきの木が数株ある。
- 34 西鯛磯波（にしだいざわ） 五十呎程突き出た大きな磯がある。

- 35 宋ノ下（そうのした）
- 36 松ヶ鼻（まつがはな）
- 37 稻荷ノ前（いなりのまえ） 稻荷社があつた所。
- 38 大福良（おおぶくら） 天然の良港。昔はここに沢山の船が入っていた。
- 39 小福良（こぶくら）
- 40 沖ノ岩（おきのいわ） 御番所の下にある岩場。小倉御前入水の地といわれる御前岩が近くにある。
- 41 頭岩（こうべいわ） 人間の頭に似ている岩があつた。今は埋め立ててなくなっている。この磯あたりを古くは、西ノ泊りといつた。
- 42 地藏ノ下（じぞうのした） 西ノ町の地藏堂がある。昔はこのあたりまで海であつた。
- 43 乳ノ下（ちのした） 小倉御前の亭（ちん）の下のことという。
- 44 洞籠（とうりゆう） 鉄ヶ崎（てつがさき）ともいう。
- 45 谷ノ木（たんのき） 黒崎の船三味のある所。昔□野氏の浪人、玉貫（タマヌキ）という人住むとも、タラの木ありともいう。
- 46 御前岩（ごぜんいわ） 昔おみこしが沈んだ所とも、岩があるともいう。網がかかって困っていたが、今は埋まっているようだ。
- 47 仏岩（ほとけいわ） 仏が立っている姿に似ている。今は頭部がなくなっている。
- 48 水谷（みずたに） 地下水が出る所。
- 49 小浜（こばま） 小さな浜がある。

- 50 黒崎（くろさき） 岩が黒い色をしている所からか。
- 51 しび浜（しびはま） 「しび」とは、大きいまぐろのこと。しびがここでよくとれたとか、解体していたという伝説がある。
- 52 中鼻（なかばな） 網代（あじろ）として、小柴垣とっていた。
- 53 小柴垣小丸（こしばがきこまる）
- 54 大泊谷尻（おおとまりたんじり） 八ヶ谷の水が出ている所。
- 55 大泊西浦（おおとまりにしうら） 小西屋の下ともいう。
- 56 松茸山（まつたけやま） 松茸がよくとれたのでこの名がついたのか。
- 57 立岩（たていわ）
- 58 三原（みはら）
- 59 道ノ下（みちのした）
- 60 大仏（だいぶつ） 大仏の形をした大岩あり。
- 61 矢倉松（やぐらまつ） 櫓のような形をした松があったらしい。つばあみの夏張りの漁では、最高の場所であった。
- 62 丸山鼻（まるやまばな） あじろ前とも重り岩ともいう。
- 63 毛抜岩（けぬきいわ） ここが西の境界であったらしい。
- 64 壁岩（かべいわ） 筏ヶ瀬（いかがせ）と坂越浦の古文書に書いている。

65 宮間地（みやまじ） 大きな浜が今でもある。

66 白石（しらいし）

67 柚ノ木（ゆうのき） 縄文時代の遺跡のある所。

68 兜岩（かぶといわ） 兜の形をした岩あり。

69 梅ノ木（うめのき）

70 大塚（おおつか） 大塚古墳の下。

71 トリイシ（とりいし）

72 キタガサキ（きたがさき）

73 御崎福良（みさきふくら） 良好の海水浴場あり。

74 御前岩（ごぜんいわ） 暗礁あり。今は灯台がついている。昔は難破船がよく出ていたそうだ。

### 物見跡（魚見・色見・まねき場）

1 揚場ノ山（あげばのやま） 主に鰯網。

2 立岩ノ山（たていわのやま） 鰯網

3 名切ノ山（なきりのやま） 鰯座と鰯網

4 越鼻ノ山（こしはなのやま） 鰯座

5 潮見ノ山（しほみのやま） 鰯座。いなみの小屋ともいう。

- 6 黒崎ノ山（くろさきのやま） 鯨座と鯨網。  
7 丸山ノ山（まるやまのやま） 主に鯨網。

注

昨五十九年十月、奥藤研二氏が坂越の「地名考」を、赤穂市坂越公民館から発行された。これはこの項にみられない地名を検討されたものであり、極めて貴重な労作である。ここに集録すると坂越の地名の考究がより完璧となるのであるが、発行年が同年代であるため割愛した。それと併せてお読みいただきたい。

## 六、坂越の言葉

佐方渚果 遺稿

これは、昭和八年頃から集めかけたものであります。

一、二年で大半は集まりました。配列は、東條操先生の「簡約方言手帳」によりました。この方面については、何の知識もありませんが、集めているうちに、方言と標準語の区別が判らなくなりました。

方言についても、訛言をいかに扱うかと言うことにも、疑いをもりました。その当時、奈良の県立中学校におられた高田十郎先生から「小河の方言」と「小河の昔話」をいただきました。高田先生は、赤穂郡矢野村小河の御出身であり、坂越とは四、五里の距離のところなので、これを見ているうちに「方言」ではなく、「坂越で使われている言葉」と言う意味で集めることにしました。「方言」を研究するのではなく、集めたのであります。

ひとまとまりましたので「方言手帳」に随い浄書しましたが、説明のあるもの、ないものなど、内容の体裁は誠に不統一です。

言葉はひと通り集め得たと思いましたが、実際は二年に一つ、三年に一つといった具合に、書きとめていないも

のが出てきました。甚だしいのは二十年目に気付いたものもあります。こんなに苦労するのであったら、もう少し方法もあつたのですが、基礎の知識がないものには致し方ありません。

更に清書したいと思うのですが、その道の人に見て頂いて取捨選択していただきたいと多年念願しておるのであります。随分前に、当時、神戸新聞にいた河本正義さんが出版してやろうと言われて、本稿をもって帰られました。

本稿中、鉛筆で消してあるもの、赤インキの記入は、その時のもので私の書き入れではありません。出版はされませんでした。

#### ○集めた態度について

なるべく土地の老人を主としました。これは言葉がなくなるのを恐れたからです。次に老人でも他所から来た人（たとえば嫁にきた人）については、警戒しました。一つの珍しいと思われる言葉でも、二人の人から聞かない時は採りませんでした。

漁村の語彙の少ないのは、接触が少ないからだと思えます。

#### ○説明について

不十分であります。老若、男女、貴賤、尊卑など、区別すべきかどうかとも一応考えさせられます。

これを御覧くださる方はどんなに御加筆くださっても結構ですから、あらゆる点に御教示賜わり、殊に、言葉の

取捨をお願い致したく存じます。

○私（佐方渚果）について

私の家は父祖代々坂越に住み、母は一里距たった赤穂の加里屋から来て六十七年間この土地にいました。八十八歳で死にました。私は当年五十四歳になります。

今、これを読みかえしてみますと、全く死語となったものが数多くあり、挨拶の如きは、老人層にのみ使われ、それも数少なくなっています。

戦争という断層で、この稿本は古典的なものになってしまいました。

二十数年前に発願した「坂越の言葉」も、前に述べました事情で、未だに宙に迷っています。

昭和三十二年十月十日記

兵庫県赤穂市坂越 佐方 渚果



天文

キタ

北風。アラシ。夜明けより朝まで主として春秋に吹く地吹き。天候の加減による。

キタゴチ

北東風。

コチ

東風。

イナサ

南東風。強風。ワイダ。暴風雨。

ヤマゼ

ヤマゴチ。雨を含む強風。

マジニシ

南風。マジ。晴天の場合。

ニシ

南西風。

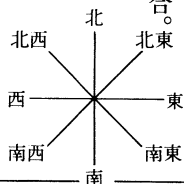
アナジキタ

西風。

アサマ

朝。

○風の名は四季を通じて同じ。



アサガタ

夜明け。朝マジメ。

ヨアサ

〃 ヨノヒキアケ。

アサツテ

明後日。

アシタ

明日。

イチニチハダメ

隔日。三日目毎 || ミツカハダメ。

オツキサン

月。

グワツテンサン

〃 (老)

マンマンサン

〃 (幼) 神、仏、月 (満月、三日月)

ノノハン

〃 (幼) 共に同一の言葉で、拝する時は「マンマンアツ」という。

オテントハン

太陽。

コンニツツアン

〃 (老)

ニツテンサン

〃 (老)

オトツイ

一昨日。

オトトイ

〃

カドハキアメ

通り雨。

キノノパン

キニヨー

キンノ

シアサツテ

ジベタ

ジキベタ

ツチベタ

ソーダワラ

ソバエ

タオ

ダケ

ダケツパチ

ダンナビヨリ

マイマイカゼ

一昨夜。

昨日。

ク

明々後日。

大地。土地。

ク

ク

山裾などジメジメと自然に水の湧出し

ている所。

少しだけの雨。通り雨。

峠。

崖。

崖の端。

夜、雨が降って翌朝晴れて、又夜雨で

翌日晴天の場合、つまり旦那（雇主）

が有利な天候ということ。

施風。 冬季街頭に多い。

ヨガナヨドーシ

ヨダチ

ヨダチグモ

クモノミネ

オキノジロー

タンバタロー

ヨンベ

ユーベ

○日ニアゲズ

終夜。

夕立。

入道雲。 雲は出るといふ。雲ガデル

(南へ)、雲ガイレル(北へ)。

ク

ク 沖辺にたつ雲。

ク 山にたつ雲。

昨夜。

ク

○日といわず。三日ニアゲズ。

地理

イシゴロ

イシゴラ

イソ

ガギ

小石。

石地。

潮の満干により見え隠れする岩礁。

石階。

クサブキ

コゲ

コゲツパ

コゲツバラ

ゴヘイダ

ズンベライシ

セー

ソーヤ

テンテコダイ

ヤマノテンダイ

ナル

叢。主として五、六寸の青草の一面のくさむらを指す。

芝。

芝生。

ク

石炭。(老)(稀)

丸い石。メクライシ || 河原の石の中に時折白い丸い小石がある、これを

いう。

陸地より海底に何程か続く岩礁で干潮

の時でも現われない。

海底で谷になっている個所。一里余りの沖合にもある。

山頂。

ク

緩い傾斜地、又は平地。

ヌカアメ

ヌマエル

ネノホシ

ノロ

バンゲ

ヨサリ

ヒガクレ

ヒノクレ

バンガタ

ヒガナイチニチ

ヒヨリガオチル

ホーキ

細雨。

湿地。田、野原等の低地に出水の際、水がのつて沼のようになる。ヌマウ。

北斗七星。

淀。ワイ。

夜。

ク

夕暮。タマジメ。

ク

ク

終日。

快晴から曇天に、又は曇天から雨模様になること。

淵。主として急傾斜な山の裾を川が回り淀むところ。

動物

|         |                   |
|---------|-------------------|
| アカベンケ   | 石蟹。梅雨時に出てくる陸地のカニ。 |
| イカナゴ    | 人家附近、または山の水辺に多い。  |
| イトウナギ   | かまつか(鮓)。          |
| イナ      | うなぎ(鰻)の子。         |
| イセボラ    | なよし(鯰)。           |
| シクチ     | ク                 |
| イヌコロ    | 犬の子。              |
| イボトリムシ  | かまきり(蟻螂)。         |
| イラ      | 毛虫。               |
| オハグロトンボ | とんぼ(蜻蛉)。かねつけとんぼ。  |
| シヨロハン   | ク                 |
| トンボ     | 赤とんぼ。             |
| ヤンマ     | ク                 |
| オンビキ    | ひきがえる。            |
|         | 大きなとんぼ。           |

|      |                                                   |
|------|---------------------------------------------------|
| ガタロ  | かつば(河童)。川で水を浴びた後で、三度水をあびて「オサメノトリガタロヒークナヨ」と子供等がいう。 |
| ゲーエロ | ク                                                 |
| ギー   | べら。                                               |
| キスゴ  | きす(鱧)。                                            |
| ギン   | ぎぎ。                                               |
| クチナ  | へび(蛇)。カラスグツナ。ヒメグツ                                 |
| クツナ  | ナ。ネズミトリ。オンナ                                       |
| ズミ   | グソ。                                               |
| ダンガメ | 米にわく小さな黒い「のみ」位の虫。                                 |
| チヌ   | すつぽん。                                             |
| チンコロ | くろだい(黒鯛)。幼魚    ゼンゴ                                |
| ツナシ  | ノコ。中位の時    ニサイ。                                   |
|      | ちん(狗子)。                                           |
|      | このしろ。                                             |

ツバクロ

デンデンムシ

デンドロ

デンブク

ドンビゴ

ノジユ

ハタハタ

ハメ

ヘーヘリダango

ママカレ

ミミンジャコ

ムクロモチ

ヨドロ

つばめ。

かたつむり (蝸牛)。

てながえび (手長海老)。

ふぐ (河豚)。

すずめの子。

しみ (紙魚)。

ばった (飛蝗)。

まむし (蝮蛇)。

おたまじゃくし (蝌蚪)。

きづなし (鱚)。

めだか (日高)。 ミナクツジャコ

(水口雑魚) 〓 農村、田の水口にいる

めだか、鮒等の小魚。

もぐらもち (土龍)。

さより。

植 物

アゼマメ

コマメ

イカブ

イモ

ウماغイ

サルトリイバラ

エビナゴ

エボ

オネエノジーババ

カブタ

カヤゴ

ギスグサ

キツネノタスキ

大豆。 田の畦に蒔くから。

〃

宿根。

さつまいも (甘藷)。

さんきらい (山帰来)。

〃

やまぶどう。

末。

山らん (山蘭)。 主として花を指す。

称して山蘭の代名詞とす。しゅんらん。

株。 樹木の瘤状となった年数経った

ものをいう。

かや (萱)。

つゆくさ (鴨跖草)。

ひかげのかつら (日陰の鬘)。

サル

キツネノハリ  
 キンカイモ  
 グイ  
 グイビ  
 クニギ  
 コイモ  
 コクバ  
 ゴンボ  
 ササボネ  
 サルノコシカケ  
 シヤカキ  
 シヤシヤキ  
 シヤゴシヤゴバナ  
 ジャツケツ  
 シヤミセングサ  
 ピンピングサ

オガセ、神代カヅラ、ともいう。

きんぼうげ (金梅草)。

じゃがいも (馬鈴薯)。

いばら (茨)。

ぐみ (茱萸)。

くぬぐ (榎)。

里芋。同類のものに水芋、田芋あり。

松の枯葉。

ごぼう (午莠)。

小笹の地下茎。

れいし (靈芝)。

さかき (榊)。

〃

おきなぐさ (翁草)。

〃 (枳殼)。

〃 (苳)。

〃

シヤンガレ

シンキク

スズメグサ

スツコベ

ダンジ

コッポン

エツタンドーリ

スモントリバナ

スンジョー

ツノイモ

ツンパネ

トীগキ

トコロテンバナ

トージンキビ

ドツカメ

枯枝。

春菊。

ほうずき (酸漿草)。

いたどり (虎杖)。

〃

〃

〃

すみれ。

素性。樹身の曲がつているのはスンジョ

ヨが悪いという。直なものはスンジョ

が良いという。

つくねいも。

つばな。

いちじく (無花果)。

なでしこ (撫子)。

唐人きび (蜀黍)。

どくだみ。

トンガラシ とうがらし (蕃椒)。

ドングリヒヨロ どんぐり (榲桲の実)。

ナンキン 南瓜。

カボチャ 〃

ナンバキビ とうもろこし (玉蜀黍)。

ニシムケヒガシムケ からすむぎ (烏麦)。 烏麦の穂を一

つとつて指につばをつけてのせると、

くるくる動くから。

ジネング 〃

ネブカ ねぎ (葱)。

ハグサ えのころぐさ。

ヒガンバナ まんじゆしゃげ (曼珠沙華)。

シビトバナ 〃

ヒヨコグサ はこべ。

ヒヨングリ まつかさ (松毬)。 千チリ (稀)

ビヤ びわ (枇杷)。

ホーシコ つくし (土筆)。

マスグサ かやつり草。

マスワリ 〃

モロマツ むろ (杜松)。

○この外にもあるけれど、動物と同じで正当な名も、浴な呼び名も、知らない。

### 人 倫

アカリミズ 世間見ず。

アサネコキ 朝寝坊。朝寝をする || アサネコク。

アトイリ 後妻。

アマエタ 甘やかせた子。

チバケ 〃

アホクライ 馬鹿。

バカタレ 〃

トロイ  
アラシコ  
イツケ  
ミー  
イットー  
カブウチ  
イヤシ  
ウソタレル  
ウソコク  
エラシコ  
オイボシ  
オゲ  
オシイレ  
オナンバリ  
オービン  
オーヘッラ

要領が悪いこと。

荒男。

親類。

〃

縁続き。イットーは坂越村で用い、

カブウチは新坂越村(農村)

で用いる。

食いしん坊。

うそをつく。

〃

えらがり。

おい(甥)。

さんか(山窩)。

強盗。(老) (稀)

おてんば。

臆病。

横柄な人。

オベロク  
ゴクナイ  
オヘンドハン  
カシコベ  
カチワリダイク  
ヒヤメシダイク  
カバチ  
シャベリ  
シャツペ  
カンノツサン  
キレンズク  
クジクリ  
ゲンサイ  
コイエノモン  
コジケ  
コスツポ

私娼。

〃

遍路。

かしこぶる人。

下手な大工。

〃

饒舌家。カバチは文句にも通ず。文

句を言うな 〓 「カバチタレナ」。

〃

女の饒舌な者を指す。

神官。

きれいい好き。

文句言ひ。公事クジをくる人。

情婦。

まずしい人。

寒がり坊。カジケ。イジケ。

けちんば(吝嗇者)。



ゴツンハン 使僧。

コツマアキンド

セルの厚司に前垂れをして、商品を自  
転車に積んだり、又は肩にかたいで商  
う人。たいていは他所より来るものをい  
う。

コドモシ

息子。子女。普通は、何所のムスコ、  
ムスメと言ひ、中流以上の者は、ムス  
コハン、ムスメハンと言ひ、上流は、  
ボンサン、イトハンという。

コー

コマンチャ

子供。㊦ 「コマンチャのくせにダー  
マツトレ」等とつかう。

サイジン

愛嬌と心安さのある人。

シオフミ

勤め奉公。

シトヤ

人屋 Ⅱ 人の出入りの多い家。ちよつと  
イッパイ屋とか、茶のみ友達が集まる家  
とか、その家の職業ではなく、人の出

シミツタレ

シャレモン

ジョーズモン

ジンバリ

シntax

シンヤ

スツキヤン

スッコミダイコ

ズンバク

セケンシ

入りの多い、又は集まる家という。

浴衣の糊の落ちて尻のよごれたような  
ものを着たり、女なら髪をばらばらさ  
せたりして、コジャンとした風体をせ  
ぬ人（ケチのことではない）。

若い衆から中年位で女にでもモテたい  
ように、小ぎれいになっている人。

お世辞をいう人。

すけべえ（好色漢）。

分家。

情人。

少年の頃、他のものと遊ばずイジケて  
いる子供。

腕白。 ヤンチャ。

いろいろの職業をやつて世間の事情に  
明るい者（世間師）。日本左衛門ともいう。

セラエーゴ

実子がない時、他所から子供を貰うとかならずできるといので貰う。また、貰うとたいいていできる。そのできた子供を指していう。

タテイシ

顔きき。又は顔のいい家。⑧老稀

ダンナシ

財産家。

チャリ

道化者。 チョケ。

ツルマゴ

玄孫の子。

テツカウチ

ばくち（博打）打ち。バクチがアマル。

（アマルとは当局にあげられること）

テッポー

大きな事を言う人。自然にうそも交じる。鉄砲の上が大砲（大砲師）。

（大砲師）

テテナシゴ

私生児。

テנקロ

うそつき、ほらふき。（千三つ屋）

テンボ

針仕事のできない人。

トツシヨリ

老人。

ヌシト

盗人。

ネンシヤ

念を入れる人。

ノンダクレ

よいどれ。大酒飲み。

ハリモノヤ

表具師。⑧老稀

ヒダリコシ

左利き。（酒呑みの意味ではない）

ヘソトリ

ついしよう者（追従者）。

ホンソノコ

いとし子（愛子）。

ホンタク

本家。

マセ

大人びている子供。

ムキツチヨ

一途者。随つて無愛想。

ヤケ

判らず家。ヤケチン、カジワラハン、

カジワラともいう。

いそろう（食客）。カカリウド。

玄孫。

ヤシヤラマゴ

ヤケを言う人。主として少年期を指す。

ヤダケ

「あの子はヤダケや」

肢 体

アクチ

アゲト

イトキリバ

ウメボシ

エダ

エダカシ

オイド

シリコブタ

オシゴロ

オツム

オツモ

カイガラボネ

カイモチカキ

ガツソ

カツツエド

口唇炎。

あご(顎)。

犬歯。

くるぶし(踝)。

四肢。(卑)

ク

しり(臀)。婦人が用いる美称。

ク

おし(啞者)。

頭。

ク

けんこう骨(肩甲骨)。

てんかん(癲癇)。

いがぐり頭。

きがの人(飢餓の人)。

カップク

カンチ

キビス

キピシ

キノミズ

ギリギリ

クチピラ

ゲロ

コピンチャコ

コマメ

サカモゲ

サス

サムサガウク

シタイグチ

スネボンサン

セウル

体格、格好、風采など。

片目。物の双方が有るべきものが片

方のみのときもカンチという。カンダ

かかと(踵)。

ク

気の水(胃液のこと)。

つむじ(旋毛)。

くちびる(唇)。

おうと(嘔吐)。

よこずら(横面)。

まめまめしい。

ささくれ。

持ち上げる。力石をサス。

鳥肌がたつ。

ひたい(額)。

ひざがしら(膝頭)。

用便の際、出そうで出さず何となく腹具

タグル

ツブレ

カッタイ

デボチン

トビヒ

ヘイボ

ハ克蘭

ヒエ

ヘタル

ベニサシユビ

ホーン

ホベタ

ホタンバチ

ボンノクソ

ボンボン

合の悪い時。

咳をする。

らい病（癩病）。

ク

ひたい又は突額。

腫物の一種。

ク

コレラ。(老)

梅毒。

腰をおろす。ヘタバル。ヘコタレル。

くすり指。

麻疹。種痘をすること || ホーンをウ

エル。

ほほ（頬）。

ク

後頭部。

腹。

マヒゲ

ミソカウ

ミツチャ

ムツチャ

ムカイキ

メノイモ

メバチコ

メーミツケル

モノ

ヤケハタ

ヤツカン

ヨバレ

リビヨ

リユーン

ローガイ

ワエーガ

眉毛。

病氣。具合が悪い。あんばいが悪い。

あばた（痘痕）。ヒキヅリミツチャ。

ク

嘔吐を催す。

ものもらい（麦粒腫）。

ク

ひきつけ。小児の脳充血。又は大人の

気絶の場合。

腫れ物。

火傷。

かぜ（感冒）。(老)

寝小便。寝小便をする || ヨバレコク。

赤痢。(老)

胃病。(老)

結核。

わきが。

ワタモチ

服

アシナカ

イツケヒモ

オイコ

ネンネコ

イツチヨラエ

ヨソイキ

ウワツパリ

オコシ

イマキ

コシマキ

ふくらはぎ。

飾

わら草履の一種。横緒から後のない文字通り足のなかばまでのもの。草刈り、タンポイキ等農村の人が用いる。

子供を背負う時用いる紐。兵児帯などを流用することもある。

子供を背負う時用いる綿入れの袴襠。

晴れ着。

仕事着。主として家庭における婦人の事務服。カッポーター着のようなもの。

こしまき(腰巻)。

Ⓢ

ユモジ

オムツ

ムツキ

カミイレ

ウチガエー

ドーラン

ハヤミチ

キヌガサ

テリフリ

サツカワ

タカゲタ

ジカバキ

ドージマ

シタオビ

ハダノオビ

ジヨリ

ゾリ

こしまき(腰巻)。<sup>Ⓢ</sup>

むつき(襦袢)。

〃

財布。

〃

〃

〃

洋傘。

Ⓢ

足駄。

〃

駒下駄。これを普通は下駄とする。

Ⓢ

ふんどし(男褌)。

〃

草履。

〃

シリカラゲ

スパッコ

センダクモン

ヌレガエ

ツマカラゲ

ツマコ

テツポコ

ツツツポ

ドンザ

ヤンザ

ヌイモン

ハラオビ

尻端折。男が着物の背筋の裾を帯には

せると三角形になる。女はしない。

わら草履の緒に布も紙も巻いていない

わらのままのもの。(農)

洗濯物。

洗濯して干さずに直ちに糊をつける。

女が着物の両襟をからげると四角また

は丸くなる。男もすることあり。

足袋のカバーの前半分のようにわらで

作って雪降り、雨降りに用いていたが、

今は地下足袋、ゴム靴が有る。(稀)

着物の筒袖。

ク

布子半天。ドテラ。

ク

裁縫。

岩田帯。

ポッチリ

ホドキモン

マツタカ

メンタイ

### 食

アイモン

アモ

バツポ

アンコロモチ

オハギ

ツツミモチ

ボタモチ

オカラ

オミー

オムシ

カキマゼ

ボタン。コバセ(足袋)。

着物等の解き物。

袴。(老)

木綿の綿。

### 物

乾物。

餅。(美)

ク(幼)

あん餅。あんをまぶしているもの。

ク ご飯をつぶしたものにつける。

ク あんを中に包む。

ク ついた餅にあんをつける。

豆腐粕。

雑炊。

味噌。(重石 || オムシ)。

ちらしずし。

カンジンチョー

オハギの隠語。勧進帳はあつちに一筆、こつちに一筆書いてある。オハギあんもまだらについている。

トナリシラズ

オハギの隠語。餅のようにベツタン、ベツタンとつかぬから隣りは知らぬ。

クモジ

葉ブサ（漬物の一部）。

ゴハンタキ

炊事を総じていう。

コラ

ヒト（一）コラ、フタ（二）コラは、

ほうらく（炮烙）で一ぺん炮烙する分量。あられば砂と共にいるとよくいれる。

ダイ

ごま、お茶などにも通じる。

ひきうす（碾臼）に一ぺんひくだけける分量をいう。ヒト（一）ダイひき終ると、またヒト（一）ダイというように。

タテアク

わらび等のあくぬきをすること。

タンバエ

大豆を煎り皮をむいたものをませたご

ツマキ

飯。主として仏事の配りご飯に用いる。柏餅。柏の葉の代りにウマガイ（山帰来）の葉を用いることがある。チガヤ（茅）で巻くちまきは皆無。

テノクボ

餅をついた後で直に食べるためについたアンコロモチ。

テンヤモノ

手買物。店屋物。

ナンゾ

間食。おやつ。

ネハツケ

根と葉を切り離さずにつけた漬物（主として大根）。

ハツタイ

麦の煎り粉。

ハン

主としてイナ（鱈）を水煮してむしり、その汁を加減して味を出し、ごぼう、ねぎ等とむしった身を入れる汁でこれをイナハンという。

ヒローズ

がんもどき。

マメジャ

空豆を煎ったものをませたご飯。主と

ムシ  
ヤツジヤ  
ヨバス

## 居

アダ  
エンゲ  
クド  
ヘッツイ  
コーザ  
ゴテンバ  
シミズ  
シモタヤ

して吉事の配りご飯に用いる。

赤飯。オコワともいう。

午後の間食。

裸麦の精白したものを水煮して（ヨバシテ）米と共に炊く。麦をヨバス。

## 宅

玄関。Ⓢ  
縁側。  
かまど。

ク

式台。Ⓢ

海辺の家が浜側の窓から涼み（露台）をつくっていることをいう。

居宅の正確でない所。畳の敷合わせ、建具の立て付け、土地等。ヒミズ。

何も商売せず入口を格子戸にしている

タタキヤネ

タナモト

チヨーズ

ツシ

ツマ

ヒアエー

フタタエ

ツボノウチ

デー

デノクチ

ナンド

ニワ

ノキ

家。まず中流以上である。

こわぶき。折り箱の材料のようなものを重ねて屋根をふく（昔のバラック）。

台所。

洗面。便所。「チヨーズ」を使う。

物置。二階の天井裏の低い所を物置としているところ。普通の物置は座敷にできるところを物置として用いている。

家と家の間。

ク

ク

小さい前栽。

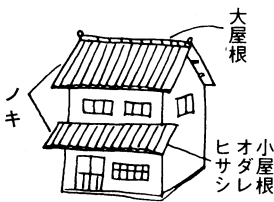
座敷。Ⓢ

ク

奥の間。Ⓢ

せんざい（庭）。主として土間を指す。

ひさし（庇）。オダレ





二階造りの家ならば前図

の通り。平家の場合、

大屋根とは言わない。

縁側付き二階で縁に添って手すりがあり、その外にガラス戸を建てている所。

流し台。

流し台。の有る所。

棟上げ。

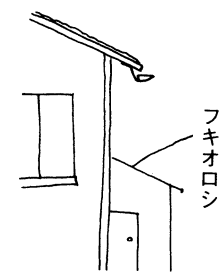
裏座敷。

玄関。(農)

下図の通り。

離れ座敷。

井戸。



器

イカノボリ

物

紙風。 イッチンヨ。

ウマ

クラカケ

フミツギ

フマエツギ

ウチハラエー

サエーハラエー

エグリ

エスズ

オーコ

サシアイボー

オサラ・オシト

踏み台。

老稀

老稀

ハタキ(塵払)。

わらで作って幼児を入れておくもの。

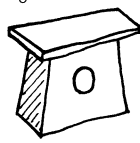
ゆりかご(揺籃)の代わり。

五人ドッキリ、又は三人ドッキリを箱に入れてある錫の酒器から変化したもの。

てんびんぼう(天秤棒)。

石などかえる時、用いるオーコより太い棒。

お手玉。お手玉をする時歌う歌の一番



クラカケ



ウマ

オージュー

オテシ

オトシガミ

オヒツ

オービラ

オブキサシ

カケヤ

ガンジキ

はじめの文句より来る。

入れ子になっていく大きな重箱。農村では祝い事にエスズとオージューに米を入れたものをかならず持つて行く。仏事にはオージューに、米と御仏前(金包)を持つて行く。

手塩皿。小皿のこと。

便所の紙。

めしびつ(飯櫃)。

ふたのある大きな井。宴席へ温かいものを出す時、別に盛るとさめるのでこれに入れ、出してから銘々につける。

仏にご飯を供える器具。

おおづち(大槌)。

熊手。竹と針金(八番線)と二種類

ある。コクバ(松の枯葉)をカクのは

竹製。

カンテキ

ヒチリン

チンカラリン

グスイタ

グスイタ

キビシヨ

キンリョー

チギ

クモノス

カルコ

モッコ

ハイフゴ

こんろ(焔炉)。

ク

ク

風呂のサナ。

ク

きゆうす(急須)。

はかり(秤)。天秤。

ク

わら製の入れもの。

ク

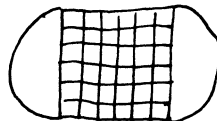
ク

ニナイモッコー 一人でなうから小。

カエモッコー 二人でかえるから大。

ク 皿型、

またはそれよりやや深いからモッコに乗らないもの、土砂等小粒のものを運ぶ



モッキ



クモノス

コシキ

サイツカゴ

ジャラカゴ

フゴ

メカンゴ

メカゴ

シツボクダイ

ハンダイ

シヤモジ

スマル

スリビ

センバ

ヒカキ

のに用いる。

せいろう(蒸籠)。

かご(籠) 荷なうもの。

魚を入れる。

フゴは、本来、わら製のものらしいが、現在では籠の小さなものをコフゴという。

草刈り籠 | 背負うもの。

食膳。食卓。

箱膳。

杓子。

井戸につるべがはまつた時取り上げる器具。

マツチ(燐寸)。

じゅうのう(十能)。



スマル

ソーケ

チャガマ

チョートジイト

チンチョー

トカケ

トボ

トージンクギ

ナガタン

ナーザシ

ニナイ

ネブリコ

ハガマ

ざる(笊)。

ダンガメゾーケ(形状による)。

かんす(罐子)。

帳綴じ糸。真緒(麻)の糸。

酒樽等に左右からかけて、

二人でカエル時に使う鉄

製の二つ一組の器具。

とかき(斗搔)。 升の縁なみに平ら

にならず短い丸い棒。

等していう。

庖丁。(農)

たわし(束子)。

水にないおけ(水担い桶)。

おしゃぶり。

釜。



チンチョー

ハマ

ゴコ

バンジョー

バンジョツチ

ハンボ

ヒビロ

モチヤソビ

ヨツカンベ

ロクダイ

ワー

人

アカベ

アマンジヤコ

イチマハン

車輪の部分名。

ク

からうす（唐臼）から米をすくい取るもの。

さいづち（才槌）。

平たい桶。菜切りハンボ。魚ウチハンボ。

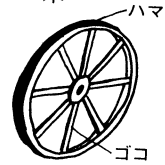
票箋。えふ（荷札）。

おもちゃ。

奴胤。

木枠を組み、ひもをつけて物を乗せて運ぶ台。

たが（箍）。



ロクダイ

事

あかんべい。

あまのじゃく（天邪鬼）。

市松人形。

イッケンケン

エドエ

オケソク

オケツ

オタヤン

オツリ

オツリ

オチャタク

オウエーヤコ

カカリモン

カクレンボ

カケロク

カタクマ

キンサツ

ゴケ

片足で跳ぶ。

浮世絵。

仏前に供える餅。

狐。「物の怪」としての狐。

お多福。

おうつり（お移り）。贈り物を入れて来た容器に、返礼として入れて返す品。

釣銭。

嫁入り。嫁入りさせること || カ

タズケル。嫁入る || カタズク。

おにごっこ。

税金。

かくれんぼう（隠れん坊）。

かけごと（賭事）。

肩車。

紙幣。

寡婦。

コンレー 結婚式。

サツチヨコダチ しやちほこだち (鯨立ち)。さかだち。

サルマタカヤス とんぼがえり (蜻蛉返り)。

ジゲ 近辺。近所。

ドイ 〃 〃 (農)

ドーギョー 〃 〃 (農)

クンミヤイ 〃 〃 組合。

シユークン じゃんけん (石挙)。

セイボ 贈答品。中元、歳暮を通じて称す。

ツカイモン 〃 〃 右記以外のもの。

ソバツブシ 仲間つぶし。

ソーレン 葬儀。

オクリ 葬送。会葬。

ハイソー こつあげ (骨揚げ)。

ムカワリ 一周忌。

チンダエーゴト 兵隊ごっこ。

ツクリモン つくりもの (作り物)。祭り等の時、人形

ミタテ

ダシ

デコハン

テングンサン

ドレアイ

ナゾカケ

ナンゾゴト

ネツキ

ユキボー

ハチブ

ヒツツク

フエン

ホクロクサン

ポチ

ボーニ

ホンミヤ

などを作り飾って公衆に見せるもの。

〃

〃

人形。人形遊び || デコハンゴト。

天狗。

野合。

なぞなぞ (謎々)。

冠婚葬祭を総じていう。

根木打ち。子供の遊び。

子供の遊びの一種。

仲間外れ。

密通。

離縁。

ふくろくじゅ (福祿寿)。

心付け。寸志。

盆。

祭り当日。

山車。

ヨミヤ

ウラマツリ

マイリゴト

ムギウラシ

メンボ

モノマエー

ヤツカノカミ

ヤマメ

雑

アエル

アガル

マウ

祭り前日。

ク翌日。

説経会。一向宗の寺で説経会が勤まっ

ていると、老人達は「マイリゴトが、

ツトマツリヨル」という。

嫁入って初めての年、麦がうれる頃に

ムギウラシと称して親里へ休みに行く。

目隠し鬼ごっこ（盲鬼）。

物事の前。ナンゾゴトや歳末などの前

頃。

厄神。

寡夫。

詞

落ちる（植物の実）。……の実がアエル。

植物が枯れること。茄子の木がアガル。

ク 茄子の木がモーター

アコギ

アゴマシイ

アサツパラ

アジロ

アズル

アタ

アダグチ

アダケル

アダテ

アタリ

アタリキ

アバレル

アバレル

ホタエル

アビアビ

アホゲ

モタ（枯れてしまった）。

ひどい。ムヒドー。

もどかしい。億劫。

朝早く。朝早くから 〓 アサトウカラ。

巢。多く有る所。魚のアジロ等。

無意識のうちに動く様。

あたら。

無駄口。

落ちる（人間）。

見計らいのないもの。アダテナシ。

配当。

あたりちらす（報復）。

乱暴する。

ふざける。子供がアバレル。

ク

不安な様子のこと（ひやひや思う）。

阿呆気。

アラク  
アリタラレン  
アンカラホン  
アンケダマトル  
アンジョー  
エエガイ  
イキナリ  
イキナリ  
イキマ  
イゴト  
イジクル  
イジマシイ  
イジル  
イタマル  
イツカツサン  
イツテ

間があく。間をあけて ㊦ アラケテ。  
取るに足らぬ。  
うかうか（浮世三分五厘）。  
仰向けに寝転んだ様子。  
いい具合に。  
㊦  
急に。  
だらしない。  
はずみ。  
言い争いごと。  
えぐりかき回す。  
汚い。  
さわる。  
子供が意地を張る様子。イジコキ。  
沈澱する。  
いつだったか。  
一番。最も。

イツツイキ  
イトシイ  
イノゲ  
イモヒク  
イヤイキ  
イヤゴト  
イレブツジ  
イロインゲナ  
イロサツテナ  
イロンナ  
イワズカタラズ  
ウツカツ  
ウツリ  
ウマ  
ウマアイ

いつも。常に ㊦ ジョージ。  
気の毒。（可愛いの意味ではない）。  
生命力。力。赤子やからイノゲがない。  
弱る。閉口する。  
威勢。元氣。  
嫌言。  
費用の入れ損。徒勞。  
いろいろな。  
㊦  
㊦  
不言不語。何も言わないけれど。  
怒った様子。喧嘩の様子。ウツカツに  
喧嘩して……。  
似合い。相応。その着物と帯はウツリ  
ガエエ。  
相性。共鳴。  
㊦  
㊦  
あの人とこの人はウマ

ウニウニ

ウンザイクサ

エチヨラク

オアテガイ

オオマカ

オカイ

ヨーケ

オーギサシ

オギレエー

オゾマシイ

オチヨクル

ヒヨトクル

オチイル

アイヤデナァー。

折衝。相談。

まん(間)悪く。マンコン悪けれ。

虫のいい。

好都合。物事がうまく行く条件が偶発

した時にいう。

細かく考えないこと。

多い。

ク

扇さし。旦那はん。扇子を差してぶら

ぶら歩き回っているような人のこと。

未練がましいの反対。すっぱりしてい

る。お金をオギレエーに使う。

物憂い。髪が乱れてオゾマシイ

からかう。馬鹿にする(嘲弄)。

ク

臨終。死。今オチイりました。

オツベル

オード

オトグライ

オトマシイ

マドロシイ

オーネ

オーバツ

オーピラ

オボラシイ

オメク

オモイネン

オーヨ

オンザ

オンマク

オンマクソ

オンマクソ

カイクピナゲル

おびえる(怯える)。

凶太い。野太い。

薄暗い。

ぐずぐずして見ていられない。

ぐずぐずした様子。

元来。私はオーネが元氣ヤデ……。

算用なし。

公然。

待ち遠しい。焦燥の気分。

うなる(唸る)。

思い念。オモイネンが叶うた。

外氣。オーヨが寒いから……。

最盛期を過ぎたこと。もう西瓜もオ

ンザや。オンザのハツモン(初物)。

思いきり。

ク

ぐつうと首をたれる。困ること。



カイナイ  
 カイニカケン  
 カエサマ  
 カクアイ  
 カゲラ  
 カザ  
 カザグ  
 カナシイカナ  
 カマエ  
 カンスル  
 カンチヨロイ  
 キコンカイ  
 キソク  
 キヅツナイ

足りない。材料の不足等の場合。  
 頓着しない。気に掛けない。  
 さかさま。サカシ。  
 程合。  
 日陰。  
 匂い。  
 匂いをかく。  
 悲しいことに。カナシイカナお金が足りない。  
 担当。受け持ち。  
 米が悪くなって食べられない状態になること。米がカンスル。  
 ひ弱い。  
 気ままに。自由に。  
 計算。キソクがタツ(合う)。キソクがタタン(合わない)。  
 心苦しい。

キドメ  
 キビル  
 ギョーサンナゲ  
 キントー  
 クソキツチャナゲ  
 コキタナゲ  
 クツチヨゴシ  
 グノメ  
 クルシトゴタス  
 クンジョー  
 ケガヌケル  
 ケナリー

急所。仕事の要所。  
 出し渋る。これだけイル言うのに、ソガイ(そんなに)イラン言うてキビルんや。  
 おおげさ。  
 嚴重。丁寧。エライ、ゴキントーなことで……。とても汚なげに。  
 口よごし。食物、菓子などを人に差し出す時にいう。ホンノ、クツチヨゴシ。  
 来る人毎に。  
 苦情。  
 酒、酢などの状態が悪くなったこと。  
 羨しい。ケナルイ。

ケブライ

ゲン

ケンタイ

ゴーガワク

コゲテク

コージク

ゴジャ

ワヤ

ワヤクチャ

ボジャ

コス

コスイ

コダテ

ゴチョージ

気配。

縁起。

当然。無遠慮。

腹が立つ。

連立って行く。

固苦しく。

猥雑。無茶苦茶。

〃

〃

〃

あふれる。酒をコス程ついで……。

けち。

理由。それをコダテに……。

御停止。音曲差し止め等の意味から、目

上の人が居て、がやがや言えぬ時等、

半ば悪口の意味で「ゴーチョージジャ」

などと言う。

ゴツイ

コツゲ

ゴツテキ

コーツト

コート

コトコトシイ

コドモダマシ

コメンジャ

コーヨー

コーリヨク

コンジヨガラ

コンズメ

サエサエ

ツンメテ

大きい。しめた・うまい等喜びを現わす時もう。

機会。何ぞコツゲがあつたら……。

強敵。ゴツテキさん。

物事を思案する時、発する言葉。

地味。

大仰な。嚴重な。

つまらぬの意。

小さい。微塵。

少人数の家族でかつちり暮らしている様子。アノ家はコーヨーなデナ。

労働奉仕

根性柄。ソゲエナ(そんな)事になるのもお前のコンジヨガラヤガナー。

一生けんめいの様子。根気よく。

再々。度々。

再々。度々。

再々。度々。

再々。度々。

再々。度々。

シギョー

サザカス

サイラカス

ササタベル

ザツク

サツチ

ザブツケナイ

ザブイ

サヤシ

ザングリ

サンコ

サンパイ

シガク

シギョイ

シタナエー

ク　ク

取り次ぐ。托す。○さんトコへこれを

ク　ク　サイラカイテツカア。

酒を飲む。

ざつくばらんの意味。

ぜひ。必ず。ぜひしなくてもよいも

のを || サツチセンデモエモンヲ。

量が過ぎる表現。下品。

ク　ク

競売。

雅味がある、すつきりしている等、主

として骨とう品を賞める時用いる。

引き散らす。ムサンコ。

処分。

たくわえ（貯蓄）。

間隔の狭い様子。

内意。下心。

シフク

シヤシヤク

ジャラクム

ジュンサイ

シヨテン

ジヨーマン

シヨラエー

シヨンボガナイ

ジラ

ジルイ

シンシヨ

スアイ

スエル

スケナイ

スケル

修復。㊦

文句。講釈。

あぐらかく（胡座）。

適当に（いい加減な）。ジュンサイな

人 || 相手に合わせて話をする人。

要領。身のまわり。取りなし。

アシコの嫁はんは、シヨテンがエエ。

間（まん）が良い。

性質。アノ人ばドシヨラエーが悪い。

見栄えがない。ミソガナイ。

だらしがない。横着。

ぬかるみの状態。柔らかいの意。

身上。資産。

仔細。スアイな人。

腐る。ご飯がスエル。

少ない。

載せる。

スケル

スマンダ

スメン

助ける。  
隅。  
淋しい。 皆さんお留守でスメンだす  
なあ。

セチベン

セツロシイ

セビル

セビラカス

センドマ

ソツ

ソーデ

ソノタリ

狭苦しい。  
ねだる。 乞う。  
いじめる (苛じめる)。  
永い間。  
無駄。  
間もなく。  
同類項の意。 ○○は何も知らんから  
不作法や、お前もソノタリや。

ソノマエー

ゾーベ

ソナナリ

ごごかしい。 けちくさい。  
以前。 この間 || コノマエー。  
無頓着。  
そのまま。

ソン

ダイジョーカン

ダチ

タテル

タライボー

ダンナイ

タンノー

チカヅキ

モーケトル

チトバイ

チヨビツト

チヨイイチバン

チヨケル

ヒヨージェル

ヒヨージェル

ヒヨージェル

系統。 遺伝。 それはあの家のソンの。

太政官。 えらがり。 意地張りの子供。

間隔。 広さ。

山の立ち木、畑の作物等を目で見て何

程と決めて取り引きする。

体の弱い人。 あっちこつちと始終悪い

処のある人。

かまいません。 それでよろしい。

満足。

惚れていて関係のあるもの。 (老稀)

惚れている。 (老稀)あの子にモーケトル。

少し。

ッ

最初 (帳一番)。

おどける ふざける。

ッ

ヒョービヤク おどける。ふざける。

チヨーサイボ一 ぐろう（愚弄）。人をあなどり、からかうこと。

かうこと。

チヨロマカス 人目を盗んで金品をとる。ごまかす。

ツギチャチャコ 継ぎはぎの多い様子。

ツケ 請求書。

ヅツナエー 苦しい。

ツバメガアワン 辻つまが合わない。

ツバミガアワン

ツラツケナイ あつかましい。

ツロク 釣り合う。似合う。

ツンギヤイ 相殺。お互いにすべき事を話し合いの上でやめること。（贈答品など）

ッ

ヅツコー

デエーライ どえらい。ものすごい。デイキナイ。

テゴ 労働の助力。

テチヨラク

テツパル

有様。反発し合う。○さんと△さんがけんかして、それさかコッチー、テツパリ

ヨートルンヤ（反発し合っている）。

ツツパル

テンコツ

段取り。

テンコボシ

日ざらし。

テントボシ

ドガイカコガイカ

なんとか。ドガイカコガイカ済みま

した。

ドガイモコガイモ

どうしようもこうしようも。

ドギル

頑とする。

トコトン

徹底的。最後まで。

ドーゾゴゾ

やつとのことで。

ドシヤゲル

衝突。

ドダイ

どうも。ドダイ困ったもんや。

トチバチ

ドツク

ブチマワス

ドヤス

トツケモナイ

トットキ

トットク

トリ

トリーモン

ナガタラシイ

ナシテ

ナラン

ナンカナシ

先々と。

なぐる。たたく。

ク

ク しかる。

途方もない。

取って置き。特別の意味。 トットキ

の着物。

しまっておく(仕舞って置く)。

終わり。トリ肴。トリの盃。

通り者(自他共に周知のこと)。あの

人は、うるさい事でトリーモン。

永い。長い。ナガタラシイ話。

何故。

奇特。世話をする人がない人を進ん

で世話をする人を「ナラン世話をする

人」と言う。

何とはなしに。

ナンノカノテテ

ニダエル

ネキ

ネキモン

ネコンザイ

ネツカラハッカラ

ネダル

ノーテ

ノフンド

ノテ

パウテ

ハゲチヨロケ

ハソバ

ハダツ

パット

ハットバリ

ハナシクイ

何やかやとは言つても。

蒸し暑い。

そば(傍)。きわ(際)。

置き古し。半端物。傷物。

根こそぎ。すべて。

ちつとも。

強請する。セビル。

斜め。

のんき。図太い。

ク

気おくれ。パウテがしてものが言えん。

色あせている状態。

合間。

乗り気。

すつきり。パットせん話や。

通せんぼ。

話をしたものがすぐほしくなる人。

ハバシイ

ハヤトー

ハラマカス

ハンチャク

ヒツコイ

ヒツン

ヒツタクル

ヒトクチバナシ

ヒトツバナシ

ヒヨットシタコト

ピン

ピンヒク

フセル

ギヨシナル

素早い。

大分前。

魚等が死んだ状態。

半端。

しつこい。

静かな。

強引に取り上げる。

何かある度に話す話。あの人のヒト

クチバナシ。

自慢話。

唐突なこと。ヒヨットシタコト言い

ますが。

便。ついで。

天引。最初から取っておく(悪い意味)。

寝る。

ㄥ (美) (補)

イネツム

ブツツメ

フツツリ

ブトー

フルセ

ヘチャガル

ヘツサ

ヘラヘット

ヘル

ベロマカス

ヘンネシ

ヒンネシ

ホエル

ホガラアキ

ホケラカス

寝る。(美)(補)歳旦に縁起言葉として用いる。

ずっと続く様子。

充分。満足するまで。

無骨。

劫を経ているの意味。老練者。

へこむ。

久しく。永い間。ヘツサカリ。

たくさん。ヘラヘット食べた。

生む。植物の株から芽が殖える場合。

虫類の子、または卵を生む場合。

見せびらかす。

ねたみ。

ㄥ 泣く(入間)。(卑)

開け放す。胸をホガラアキにする。

言いふらす(吹聴)。

ボダイナゲ とても疲れて寝ころんでいる様子。体をボダイナゲにする。

ホッキオル 我を折って発心する。

ボード 満更。

ホバ そば(傍)。その処。

ホボケ 余慶(おこぼれ)。

ボーマイル 途方にくれる。

ホンダイ そのかわり。

ホンニヤサカイ そうであるから。

マカタ 一定の仕事の合間にする仕事。

マガナスキガナ 常時。

マルコク 全部。

マンコソヨケレ 間がよくて。

マンガチコク 我先きと先を争う。ずるい方法で先取

権を握る。

マンダロ まんだら(斑)。

マンダラ ッ

マンロク 満足。碌。

マンソク ッ ッ

ミソガナイ 見栄えがしない。

ミヤセ 見計らい。

ムヒド ひどい(無非道)。

メクシヤ むやみ。

メグ こわす。

メシキ 一面に。びっしり。

メツソ 目分量。

メツソーモナイ とんでもない。

モーツイ やがて。もうすぐ。

インマニ ッ ッ

モトール 金品が充分な状態。手元がモトール。

モノイリ お金が掛かること。普請をシタデ、モ

ノイリヤ。

モモケル 毛羽だつ。布の表面がもろもろになる。

ヤグロシイ 取り散らかしている。ヤギロシイ。



ヤダ

ヤット

ギョーサン

ギョーハン

ヤマグチ

ヤンツ

マンパ

ワタクシ

ヨ

ヨーガエ

ヨケマイ

ヨザン

ヨソモル

ヨミガコマヌ

ヨロズ

つまらぬ。不細工。

沢山。ヤットカシ。

〃

〃

しめたノの意味。 労を奏せず得をす

る事が有る時。

私腹、または私腹を肥やす。

〃

〃

ほか(他)。

備蓄。

余計。

〃

片寄る。

堅実でないこと。

万事。なんでも。

ラク

ラッシガナイ

ロクダマ

ワザ

ワメク

可能の意味。 多分大丈夫でしょう 〃

たぶんラクダツシヤロ。

しょうがない。つまらない。

ろくに。ろくろく。

障害の原因。さわり。 熱のワザで顔

が赤い。

さけぶ。

……ダハン

……ダスカ

……です。 わたしがユータンダハン。

言ったのです

あなたそんなにされ

……ですか。 アンタがソガエーシタ

たのですか

ツタンダスカ。

……ダシタ

……でした。 そうダシタなあ。 でした

……ガエー

……でしょう。 オマハンが あなた

(……ガヤアー)

……あげると言った でしょう。  
ヤロユーターガエー。

……ガナー

……よ。 ぼくはシランガナー。 知らないよ

……ダスナー

……ですね。 こういう場合にこれがコーユーガイニ

……なるのですね  
ナルンダスナー。

……ダッソ

……ですよ。 本当ですよそれホンマダッソ。

……ダッシヤロ

……でしょう。 隠したのでしようカクシタンダッシヤロ。

……トイ

……と。 こうコガエー くジャッタンジ だ

……と

……ヤトイ。

……トエー

……

……ねえあなた

……ナンタ

……ねえあなた。 ねえあなたあれからナンタ

……いろ いろしたけれど ねえあなた

……アッチコッチシタケドナンタ。

……(坂越の言葉の中で「ナンタ」は代表的なものである。)

……アンタ

……相手 アンタトコ(一般)

……オウチ

……美

……オタク

……美

……オドレ

……卑

オドラ  
 オマハン  
 オンシ  
 オンシヤ  
 コンナニ  
 ソンナニ  
 ジブン  
 ワガミ  
 ワガデニ  
 ワエラ  
 ワレ  
 アシ  
 ウチ  
 ウラ  
 オレ

相手。オドラネエー || お前の家。④

〃 オマハンネエー || 〃

〃 オンシネエー || 〃 ④

〃 (女の子)。コンナニトコ。

〃 (〃)。ソンナニトコ。

〃 (相手のこと)。

〃 我がでに。ワガデニシトイテ

〃 || 自業自得の意。

〃 ワエネエー || 自分の家。④

〃 相手。ワレトコ。④

〃 自己。

〃 ウチネエー。ウツネエー ウツ

トコ。

〃 ウラネエー || 自分の家。④

〃

〃

農

自己。コンネエー。

〃 銘々等。自己を指す。

〃 ワシネエー。

〃 私。

村

余り水の通路(溝)。

田植えを終わった時の休日。

雨祝い。

用水を池または川から引く。

〃

稲むら。

ワラグロ

連作をきらうこと。

〃

きらう」などと言う。

畝の始まり。

「西瓜はイヤジを

マクラ

ウマヤゴエ

オトシ

オドシ

オナメ

カジク

カタ

カナメ

カネゴエ

カマ

アイガマ

アツガマ

ウスガマ

カミノリガマ

ノコギリガマ

カマアキ

下図のとおり。

堆肥。

水の落とし口。

かかし（案山子）。

牝牛。

耕す。

畝の両側。

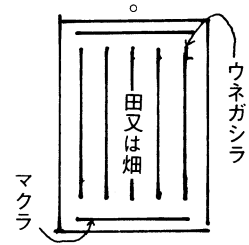
竹で荒くあんだ浅い籠。田植えの時、

荷なつて苗を運ぶ。

化学肥料。（反対 ↓ ゲスゴエ）

鎌。

（山ガマとも言う）



稲の刈り始め。

カマドメ

ガラガラ

カラサオ

クワ

トンガ

チョンナガ

サンボンコ

ゲスゴエ

ゴケダオシ

コセ

キシ

キワ

コツテ

コーリマキ

ザイシヨ

稲の刈り終わり。

鳴子（オドシ）。

穀竿（連枷）。

鍬。

ク

ク （バチ）。

ク （ビツチュー）。

下肥。

木の枠に割り竹をわたしたもの。小麦を

パンパンとその上でたたいてこなす。

畑の畦。

ク

ク

牝牛。

種を蒔いたが所々「はえ切れ」がある

のでそこへ蒔くこと。

農村。

サエン

菜園。

サス

竹で作り尖端を俵にさし込み米を出す。

サナブリ

田植え祝い。

サノポリ

ク

サンダラ

俵蓋。

シカエ

牛言葉。右へやる時牛綱を「シカエシカエ」と言いながら引つ張る。

アイシ

ク  
左へやる時牛綱を「アイシア

チャイチャイ

ク  
進む時。

ボーボー

ク  
止める時。

ジャグルマ

水車。

ジョーヤ

地主。

スイノー

ふるい(篩)。ノリコシ。コーフルイ。

スクモ

粃殻。

スモト

ハデ足の上に架してそれに稲束をかけ

て干す。

セヤク

作物の世話。

ソーウエ

田植えの時、組合にして互いに力を貸し合う制度。

ソートメ

早乙女。

タイコノバチ

竹で編んだ笠。

タテル

米、豆等が少量の場合、唐箕でくる代りに風を利用して上からパラ／＼と落としながら実と殻を選別すること。

ダル

汚水(風呂、台所など)。

ダルツボ

肥溜め。

タンゴ

肥桶。

ツツボ

米麦の地上にこぼれたのをはき寄せたもの。最後で悪い状態になると「ツツボトツタ」と言う。

トーシ

ふるい(篩)。ヌカオロシ。コメド

トーシ

トーシ。ニバンドーシ(砂)。ハダカド

トーシ

トーシ(麦)。カツラドーシ(荒いもの)。

トーシ

トーシ

トーシ

トーシ

トーシ

ダイドーシ。

唐箕。

苗代田。

ク

夏越休み（以前は六月三十日は荒神祭であつたから一名ナゴセ祭りとも称して休んでいたが現在はない）。

稲の刈り上げ祝い。

苗代踏み。

休日。

竹笠。

稲架（足）。

作男。

作頭。

用水溝のない田へ水を通す場合、田の端に二尺余り（約六十センチ）の幅の通路

ベコ

ホシナ

ボーダ

マンゴク

マンリキ

ミズガノル

ミト

ヤンバタ

ユデ

ユミゾ

ワサウエ

魚

イロ

オモテシ

村

をつくる、これをいう。

子牛。

干菜（大根の葉ブサに限る）。

麦、小麦の殻。

米撰機。

いなこき（稲扱ぎ）。

田に水が満ちてくる。

みなくち（水口）。

山畑。

いせき（井堰）。

小さな溝。

田植え初め。

魚群。

楫取り。

オヤジ 船子頭 (老若によらず)。

カシキ 炊事方。

センドハン 船長。

ドーマル 魚籠 (大、小共に同じ)。

バツテラ ポート。 (老)

フナガタ 船乗り。

ボンボン 発動機船。

モグリ 潜水夫。

スリコミ 飛び込んで水にもぐる。

ワカイシ 船子 (老若によらず)。

挨拶

オ早ヨウ 朝

オ早ヨウサン

コンニチワ

船子頭 (老若によらず)。

炊事方。

船長。

魚籠 (大、小共に同じ)。

ポート。 (老)

船乗り。

発動機船。

潜水夫。

飛び込んで水にもぐる。

船子 (老若によらず)。

挨拶

朝

〃

日中

エエオ天気ダスナ

ウツトシイダスナ

オ寒ム

オ暑ツ

コンバンワ

ヘエーオシマエー

コンニチワ

ゴメン

ヘエーゴメン

オッテンダスカア

オ留守ダスカ

日中 (晴天)。

〃 (曇天)。

〃 (寒中)。

〃 (夏)。

時候、天候を用いるのは心安い人の場合。

夜。

〃 この言葉を主として用いる。

訪問。

〃

〃 (子供が家の用で他家へ行った時は殆どこれを用い、コンニチワ等は言わない。)

訪問。

〃

オコシ  
来客への応答。

オイデ  
ク

サイナラ  
辞去（客側）。

オ邪魔ハン  
ク

オヤッカマスツサン  
ク

エライナガオリ  
ク

シマシテ

マアゴメン  
ク

サイナラ  
辞去（主側）。

マアヨロシイガ  
ク

ドウイタシマシテ  
ク

ナンノオアイソ  
ク

モアリマヘズ  
辞去（主側）。

何がデキマス？  
途中（相手が何かしている時）。

デキヨリマスナア  
ク（ク）。

ドツチイ  
ク（相手を見た時）。

オコトアツシャロ  
物前（婚礼、歳末など何か準備中の時）

御事多いでしょう、が転化したもの。

オヒサシアスナア  
久潤を序す。

ドガイダス、オ  
ク

タツシャダスカ  
ク

ミナハン、マメ  
ク

デシマイヨツテ

ダスカ



ドコトモ言ウテ  
ヤアラシマヘンカ

久澗を序す。

オ宅ノチイサイ  
ノガ、エラエー  
可愛いコトダシタ

死去  
(子供)。

ソウデ  
トウトウヨウア

リマヘナンダソ

ウデ  
(永い病人)。

エラエー思イモ

ソメン事がデキ

マシテ  
(肝要な人)。

オ宅ニコソ存ジ

モヨラン事がデ

キマシテ  
〃  
( 〃 )。

オカルウニオ身

ワケガアリマシ

タソウデ

出産。

オニギヤカニナ

ツテダシテ

結婚。

オメデタ

慶事。

ゴ不幸

凶事。

ゴ心配ナコト

〃

オ悪イソウデ

病気。

アブナイコト

火事。

子供の言葉

○以下子供とは主として三、四歳以下を指す。

子供が言うより子供に向かって大人が言う言葉が多い。

|      |      |
|------|------|
| アイヤ  | 足。   |
| アッポ  | 帽子。  |
| アッポ  | 阿呆。  |
| アンポ  | ク    |
| アッパイ | 更に。  |
| オッパイ | ク    |
| アバイ  | 危い。  |
| アボ   | 遊ぶ。  |
| アンマ  | 母乳。  |
| オチチ  | ク    |
| イコイコ | 行く。  |
| ウツツイ | 美しい。 |

|         |                |
|---------|----------------|
| ウンウン    | ウンウン           |
| ウンコ     | ク              |
| エーヤ     | 船。             |
| オイチイオイチ | 食べなさい。         |
| イシ      | ク              |
| ンマンマシ   | 小便。(美)         |
| オシッコ    | ク              |
| シー      | 小便をさせる時、口笛を「シー |

|      |                     |
|------|---------------------|
| オツケー | 呉れ。「お母あぜニ(銭)オツケ」。   |
| オッチイ | 恐い。                 |
| オッチン | 座る。                 |
| エツチン | ク                   |
| オツム  | 頭。                  |
| オツモ  | ク                   |
| オプー  | 湯、水、茶、湯、冷水、流水などの区別な |

ブー  
オボ  
カーカー  
カッコイ  
カッカ  
ガンガン  
クークー  
ゲー  
ケーケー  
シャシャ  
ジヨジヨ  
ゾゾ  
ゼゼ  
チンチン  
タイタイ  
ダッコ

し。  
湯。水。  
帯。  
烏。  
賢い。  
下駄。  
蟹。  
車。すべての車を指す。  
嘔吐。  
奇麗。  
麻裏（草履）。  
草履。  
々  
錢。  
々  
歩く。  
抱く。

タッチ  
チャエー  
チューチュー  
チューチュー  
チンチン  
チンチン  
ツー  
テテ  
テンテン  
ドタン  
トット  
コケッコ  
コッコ  
ニーニーサン  
ニヤアー

立つ。  
制止。叩く意に用いる。「悪いことシ  
ヨルト、チャイスルデ」。  
雀。  
ねずみ。  
男陰。  
自転車。  
吐く。食べて悪いものを口に入れた時、  
「ツー、シイ」という。  
手。  
手拭。  
落ちる。  
鶏。  
々  
々  
人形。  
猫。

ニヤアーニヤア

ネンネ

バツポ

ババエー

ブーブー

ベベ

ポッポ

ポンポン

オナ

マエーマエー

マンマンサン

ノノハン

メーメ

ミーミ

クーチ

猫。

寝る。

餅。

汚い。

自動車。

着物。

汽車。

腹。

ク (美)

前掛け。

神、仏、月を指している。区別なし。

拝む時「マンマンアツ」と大人がいわ

せる。

ク

耳。

口。

眼。やつと発音の出来る子供に教える

ク

ク

モー

ポー

モタモタ

ヨイヨ

ワンワン

ンノンノ

イノイノ

ンマンマ

牛。

ク

もたれる。

負ふ。

犬。

帰ろう。

ク

食べ物。

昭和の初め頃から、亡父渚果が、趣味の郷土史の一環として「方言」ではなく「坂越の言葉」として少しずつ収集し、一応草稿として形付けていました。生前、自分なりに何とか完成させたいと願い、機を得て柳田国男先生にお目通しをいただいたりしておりましたが、結局そのままとなっておりました。

その父も昭和五十一年二月に没し、本人のいない今となつては、意図するところも汲み兼ねますが、なるべく原稿に忠実に、しかし、配列に関しては原則として五十音順に組み替え、現代語訳は時の経過を考えて現在に通じるように、私なりに訂正した部分もあります。

原稿を整理するうちに、忘れかけていた昔懐かしい言葉が次々とよみがえり、改めて、これを発願した父の心情が思われました。しかし、方言のなかには、差別用語や、全く意味のわからない語句もあります。これらも昔は使われていたものと思われまますので、あえて掲げましたが、死語として扱っていただくようお願いいたします。

父が前書きにも述べておりますように、これは未完成なものであり、御覧くださいました皆様に、いろいろと御加筆、御訂正をいただければ幸いと存じます。

昭和六十年一月

佐方 さよ子

## 七、坂越方言の用法

三木竹夫

学校教育の普及、交通機関の発達、情報文化社会の中にあつて、言葉のうつり変わりが速くなり、長い間、その土地独自の言葉として定着していた古い方言が、ある年輩の人たち以外の口からは聞かれなくなりつつある。坂越でもその例にもれず、限られた言葉以外は殆ど忘れられ、使われなくなつてきている。

次に、坂越方言がどういふふうに使われていたのか、具体的な文例によつて紹介してみることにする。

(あ)

○そがえなことしたらアカヘン（アカン）がな。

○これアンギョ（アンニョ）か。

○アノ、ホレ、あれ、おくれえな。アラヘン（アレヘン）のないに。（アツカーレ。）またアエーナこといよる。

あんたとこの裏あるにアンマハン。ああ、あれか。あれはアゲラレヘン（アゲヘン）で。

○アンバイ忘れてもとつたがな。アシからもいうけど、お爺あまえてにアンジョウ言うといつつかあよ。

○アガイナ（アナイナ）やつにアナイシテくれ言うてもアマコエテしくさらへんで。

○ええ着物があつたさかいに、アリマチコマチはたき出してこうたんだはん。

(い)

○あそこのことイロサツテにいなはるけど、うつとこと、あそこはイツケだつせ。

○イロンゲに言うだけ言うて、もうイヌンかな。そんならイニツシヤに、あそこへ寄つても、イジマシイこと言うたらアカン（アカシマヘン）で。

○くれくれ言うてイジツたらアカヘンで。

○もう昼飯クタカ。

(う)

○ウラの家へ来やへんか。いいや、ウラのところへ来いや。

(え)

○せえなええエレモンに、砂いれたりしたらおこられるどな。エーダハン（カマヘンダハン）。

○時間がきとんのにこしらえもせんとエチヨラクなやつや。

○正月が来よんにブラブラして、ほんまにエチヨラクなやつや。

(お)

○オラとオマハンはおせになつても友達やど。せやで何でもオセトツケ（オセトクレ、オセカシトクレ）よ。

○オンザの初物やでオンマク食べとけよ。オテシヨに入れて食べんとオナベに笑われるど。

○なんぼおまはんに教えてもわからへんで、オボラシテ、オボラシテ、あほらしわいな。

(か)

○ガ<sup>石の階段</sup>ンギを登りよつて、餅箱カヤシたやろ。

○わしのことあんまりカモテくれな。

○われみたいなガンラは黙つとけ。

○大勢カリしてこつさえた握り飯が、ワヤ<sup>駄目</sup>になつてもたがな。

○あほたれよ、頭カチワルど。

(き)

○こ<sup>この家</sup>んねへキヤシテモロテ、キコンカイに草取りさしてもらいまほわえ。

○あがえーなキナイボは、めつたにあらへんのやでな。  
気のまかぬ人

○ようまあ、キヤヘンいうたんだつそ。さえいわんかて、いんまにキマツサエ(サイ)。

(く)

○わしにもあれ取つてクランセ<sup>下さい</sup>。何ぬかす、どあほめ。頭クラガス<sup>なぐる</sup>ど。

(け)

○坂越祭りが、にんやかやいうて聞いたさかい、来てみたけど、さきおとついで済んだんやいうて、ケツチ<sup>阿の變化</sup>ヨもな

つたがな。

(こ)

○コンネへ来たたらあかんと、なんぼもいうてコマスンだすけど、コージョクなやつやで、またきましたんでつか。



へえ、そうだす。何か悪いことしよらしまへなんだか。

○コツサエたつたんだつか、あんたが。エエガエにできとりマンナ。

○いやいや、そがいなことはゴワヘンで。

(さ)

○サツチ数えてそこまでせんでもええのに。

○そらあんた、それくらいなことは私でもシマツサーナ。

○そやサカイニ、サラバエテ、サイラカシてしまいましたがな。

○そがえなことそのようにサーイに考えんでもええがな。

○サーイナ、それでもよろしおまつしやるか。

(し)

○兄のほうはシヨウウ裏面目ミなんだつけど、弟のほうはなにせい、言うてもシンドイ、シンドイというて、ほんとにジラなまけ

な子だすし、時にはジユン適当なことサイコク言ようなこともあるんだすがな。

(す)

○なんぼ重なるずつスケラれるか、一ツズラずつやりあいこしたんやけど、ズイコあいこになつてしもたんだはん。へてな、スケタ

だけ一ぺんにひつくりかえたらな、ほらスコツチ気分がよい様ヨカッタどな。

○あの人はスドイ冷淡人やでな、こげえな話しなはんよ。

(せ)

○セチベンにして、セーダイゼにためておかな、年とつて泣く目にあうんやでいうて、セングリセングリ言うたつても、言うことときかへんがな。

○ほんにやけど、あんまりセカすのも考えもんやで。

(そ)

○あいつもうソーテニ来るで、来てもソーベにしときなはれよ。

○ソウヤナー。

○うーん、ソウヤデ。

(た)

○ダエーナことしとんかとおもて、タナモトへ入つてみたら、やつちもねえことしとつたがな。

○ダチもせめえせまかつたがな。

○へえ、ようけタイボウとつてなあ。

○なんぼ働こおもても、タライボやで、どないもならへんわ。

○ようなつとつたおもたのに、またねとんか。おまはんはほんまにタライボやな。

(ち)

○チートマ見んうちに大きいなつとつたがな。ほんにやけど、チートましになつとつかと思たけど、同じこつちや。

○チヨイチバンになつて、あのをチヨウサイボニシとつたがな。

(つ)

○あいつはよう食う奴やで、ごつつおよばれてもどつたツイナに、また餅屋へ走つて、餅ツカー（オツカー）くたさいとい  
うて、買ひよつたで。

(て)

○あの人ら二人、お互いにテツパツ張りあうとるで、今度はデエライ大衆ことになるかもわからんで。

○デーキナイ非常えらい目にあうようなことがないように、テノーつれだつてて行かなあきまへんで。

(と)

○トカシナイ子やで、トンシヤク世話をやくしたらなあかんでいうて、トーカライ早くからよつたんだはん。

○こまい小さい時にドツク叩くかれてから、ドタマ頭がわるうなつて、そがえなこととつくりトーニ忘れてしもとんまますよはん。

(な)

○ナシタマーえらいことになりましたな。

○ナシタコトなんというこ言うてんだすいな。

○そがえなことより、いん種での時、うちへもおよりナシテツカハレよ。なつてくたさい

(に)

○六月やいうのに、今日はまた、ようニダエル日だすな。

○あないなニタイマにぶい入に何ができらいや。三日ほど前から尻たたかなできるもんか。

○こんどの船はまんがよかつたで、ニゴぎ船の積み荷の残りようはん残いといたで。

(ぬ)・(ね)・(の)

○われはノベツ開新なくにもものいうてうるさいさかい、わしのネキ開へ来とくれなよ。

○なにヌカスんど、われのほうがようしやべるやないか。

(は)

○バツポもち、バツカシばかり(バツカリ)たべよつたら、バンゲタカになつてほんぼん痛むがいとなるで。

○金毘羅参りせんか、せんかいうたかて、誰もまとめてくれなんだらハカガイカン進行しないがな。

○もうちと誰かハダツはずむてくれたら、わしが一肌ぬぐんやけど。

(ひ)

○あの人よわい人間はむかし、ヒガイシナ子よわい人間やったでな、みんなで大事に育てたもんやで、とうとうヒガイシナよわい人間になつ

てしもたんだはん。

(ふ)

○煮ごぼれせんように、ようフタグ煮をすのを忘れなよ。忘れたりしたらプチマサレンたたかれるなんだ。

(へ)

○ヘツサ久しく話せなんだで、今日はヘツサカリ話しまへんかな。

○ほんまにな、もつとヘンネキすぐそばにおつたらな、ヘタラそしたら(ヘツタラ)よう話できるのにな。

○ヘツサカリ出さへんで、ヘチヤガツ長い間てもとんがわからへなんだがな。

(ほ)

○ホ>NNナそしたららこのようにこないしまほか。そやなあ、ホテそれからこうしたらよろしいな。ホヤケドですかあれだけはあかしまへんで。ホ

タラそしたら(ホツタラ) あれはどないします? あれはホドそこそこライにしときなはれ。ホンほんマ?

○ホンそれだからニヤセーニ(ホンニヤセーテニ) やめといたほうがええ言いましたやろが。へえ、ホンそうだニヤケけれどドなあ、ホンニヤであんたはあかへんのだはん。ぢいつとあたしのホバそばにおりなはれ。

(ま)

○そこにありマハン。はよ取つてつか。まあマジまにあわんヨクニアワン人やで。

○あそこにマン一人前でない人タランがおりますのでな。そうかな、こつちやにもおりマツサーの。

(む)

○もつたいないで、ムサン必要以上にコにやりなはんなよ。

○あれは欲が深いでな、何でもムサンコに欲しいんだはん。

(め)

○鯉こわすが今年はまだメクサやたらに多いな。こない年はメツサめつた(メツソ)とないで。

○お茶碗こわすをメンこわすだらあかん言うても、ようメグンだはん。安物やで、じきメゲルンだはん。ほんなら、うちのを五つほどあげまほわえ。メツソモナイ、さえなことしてもらたらこまりまはん。

(も)

○そないな高いもん、モツチャソビにしたらあかんがな。

○モツト、モツト働かなんだら、モツ金持ちタリヤにはならへんで。

(や)

○あいつまたヤンツ盗むしたんやで。ヤツチモねえやつやな。それでパトカーが来とつたんか。ソーヤガナ。

○この暑いのにヤンザ着たりして、ヤツチモねえ男やな。

○あれやこれや、ややこしいことが重かさなつたんで、大掃除もヤタコタまごころに済すましたんだはん。

(よ)

○ヨンベはヨーケたくまん(ヨーサン、ヨーハン、ギョーサン)魚があがったでな、ヨサリ中夜中、にいやかに言うとつたんや

な。

○ご飯もう一杯ヨソツとくれ。そないヨソモツよそもつたら鼻つくがな。

(ら)

○そないなラツシモナイつまらぬ(ラチモナイ)ことしてくれたら困こまるがな。

(わ)

○そがえなことしたら、さらからワヤ駄目やあな。ほんまにワヤクチャやあな。

## 八、坂越の俗信と禁忌

粟井ミドリ・折方啓三

本項は、坂越で使用されていた俗信（迷信・まじない等）と禁忌を、佐伯隆夫氏の資料を参考にしてまとめられたものである。調査対象者の範囲が狭かったこと、時間的制約をうけたことなどのため、全てを網羅することはできなかった。今後の調査の踏み台に利用して戴ければ幸甚である。

### (1) 衣に関するもの

- 新しい下駄を夕方おろすと狐にだまされる。
- 衣類を縫いさしにして年を越すものではない。
- 祝い事の時に新しい着物をおろすものではない。
- 一枚の着物を大勢で縫うと死人の着物になるといつて忌む。
- 衿の汚れは三年恋もさめる。
- 女の厄年に帯を祝ってもらうと長生きをするが、それがない。
- 片袖だけつけていると、片袖幽霊が出る。
- 着物を裁つ時は「戌の日」がよい。
- 着物を縫う時、袖を先に縫って身頃を後にすると、袖が手伝って早くできる。
- 着物を北向きに乾かすのは死んだ時である。
- 着物を夜おろすと葬式だという。
- 着物の丈を三尺きつちに裁つと、死人の着物でない。

○着物ができたら、一度たたんでから手を通すもの。

○シツケ糸を取り去らずに着ると、狐にだまされる。

○敷布団を上には掛けると出世しない。

○死人の着物を縫う時は鉄を用いない。糸に結びをし  
ない。

○死人の着る白装束は、一人で縫うものではない。

○背縫いを縫う時、糸をつぐと長生きしない。

○足袋をはいたまま寝ると、親の死に目にあえない。

○妊婦が着物を裁つ時に、肩明けをあけると「三つ口」  
の子が生まれる。

○ハシカの人の着物をまたぐと、ハシカの人の目がつ  
ぶれる。

○針に通した糸が長いと「てんぼの長糸」と言つて忌  
む。

○病床にある時は、着物の裾を頭の方にして、逆さに  
掛けるものではない。

○蛇のぬけがらを箆筒に入れておくと、衣装がふえる。

○三つ身の着物は、必ず一度は着せないといけない。

## (2) 食に関するもの

○あつのご飯に、お茶をかけて食べてはいけない。

○甘酒を作る時、ものを言うとき甘いのができない。

○一月七日には七草雑煮を食べる。

○一杯ご飯はいけない。

○梅干の種を海に捨てると悪い。

○大晦日に、おつもりそばを食べると金持ちになる。

○お汁をご飯にかけて食べると、胃がわるくなる。

○お汁を三杯吸うと、アホの三杯汁という。

○お茶をぼんぼんわかすと、隣の家が繁昌する。

○男の子におこげを食べさせると、出世の妨げになる。

○かけ茶碗で食べると出世しない。

○からしをとく時、笑つてとくときかない。怒つてと  
くとよきき。

○元旦に雨戸をあけると、福が出るといつてあけない。



掃除をすると、福をはき出すといってしない。

○木箸と竹箸を一緒にして食べるものではない。

○黒豆の汁を飲むと声がよくなる。

○ご飯を粗末にすると目を患う。

○コンニャクを食べると、牽丸の砂がとれる。

○昆布を焼いて食べると貧乏する。

○午莠を食べると精力がつく。

○笹の葉や竹の皮を入れて、小豆を煮ると早く煮える。

○申年の梅を漬けておくと薬になる。

○四月八日のお釈迦様の誕生日には甘茶を飲む。

○十二月二十九日正月餅をつくことは、苦をつくから

悪い。

○食事の後すぐ寝ると牛になる。

○葬式の供えだんごを食べると夏病みしない。

○大根をおろす時、怒っておろすと辛く、笑いながら

おろすと甘い。

○沢庵漬けなどは三切つけるものではない。

○食べ合わせて悪いもの

うなぎと梅 肉と梅 氷とてんぷら 肉とほうれ

ん草(さなだ虫がわく)

○茶柱がたつと、良い事がある。

○茶碗をたたくと、「我鬼」を呼び出すという。

○月夜の蟹はやせていて、おいしくない。

○冬至に南瓜を食べると中風にならぬ。

○年越しの日には塩鱒を食べる。

○土用の入りに、土用餅を食べると丈夫になる。

○土用の丑の日には、鰻・うし等「う」のつくものを

食べる。

○とんどで焼いた餅を食べると、夏病みしない。

○鍋のまま食べると、口の大きな子が生まれる。

○ナマコを食べると寝小便しない。

○南天の木の箸を用いると、中風にならない。

○葱の白根を食べると頭がよくなる。

○はいそうの後で大豆のご飯を食べると、後のものが

まめになる。

○箸から箸へと物を渡すものではない。

○箸をご飯に突きさしたのを「我鬼のご飯」という。

○箸を長く持つと遠い所へ嫁に行き、短く持つと近い所へ嫁に行く。

○ご飯の炊きかたは、はじめちよろちなかぱっぱ

赤子が鳴いても蓋とるなという。

○下手な歌を歌うと味噌が腐る。

○ほうれん草を食べると血が増える。

○豆を煮る時に、時々びっくり水を入れるとよく煮える。

○ミヨウガを子供が食べると物忘れをする。馬鹿になる。

○餅つきの時、セイロのふちに塩を置くとよくあがる。

○餅をついた日に焼いて食べるといけない。

### (3) 住に関するもの

○朝日の照り込む家は繁昌する。

○新しい家を建てると人が死ぬ。

○家の庭に植えるのを忌み嫌う植物

いちじくー人の血を吸うという。

そてつ

椿ー頭が落ちるので不吉とされる。

びわー病人が絶えない。家運が傾く。

ぶどうーなり下がる。貧乏する。

実のなる木ーなり下がる。

○家の中に池を作るとよくない。

○「おもと」を植えておくと良い事がある。

○神棚が、人が来てすぐ見える所にあると、拝み出す  
といって家が繁昌しない。

○神棚は北向きにするものではない。

○カマドの上に物を置くと罰があたる。

○カマドは北向きにするものではない。

○カマドや風呂に縄をくべると、大黒柱やカモイを焼くことになる。

○家を建てる時、お祓いをして建てないと不吉なことがある。

○東北の方向は鬼門であるから、井戸・便所・玄関など作るものでない。

○庭の木が家より高くなると貧乏をする。

○鼠が家にいると繁昌する。

○蜂が巣を作るとよい事がある。

○分家で、誰も死なないのに新仏壇を作ると、誰かが死ぬ。

○仏様は東または西向きがよい。

○満潮の時の火事は金持ちになり、引き潮の時の火事は貧乏をする。

○宿がえをする時は「ほうろく」と「漬物」を一番に持って行く。

○藁葺きの屋根をふきかえる時、四方を一度に葺きかえるのは悪い。

#### (4) 身体に関するもの

○足の親指より第二指が長ければ、親よりも出世する。

○頭のハゲた人は善人で、情け深い。

○髪の毛の沢山ある人は苦勞する。

○ギリギリが二つある人は意地が悪い。

○爪の中に白い斑点ができると、着物をこしらえてもらうと治る。

○爪をもやすとライ病になる。

○手の指のよく返る人は器用である。

○額の広い人は世間が広い。

○ホクロの位置で次のようにいう。

口のそば — 食いしんぼう、おしゃべり

目のそば — 泣きぼくろ

○眉毛と眉毛の間の広い人は遠い所へ、近い人は近くへ縁づく。

○眉毛の中に長い毛のある人は、長命である。

- 耳がかゆいと良い事を聞く。
- 耳たぶに米が三粒のると、金持ちになる。
- 耳の大きい人は福耳といって幸運である。小さい人は貧相である。

### (5) 生(出産)に関するもの

- 赤ん坊に鏡を見せると、次の子が早く生まれる。
- 赤ん坊のお尻が青いのは、仏様がつめているという。
- 赤ん坊の股の「しわ」が二つあれば、次に生まれる子は男、一つであれば女である。
- 「戌の日」に腹帯をすれば安産、また「戌の日」に生まれると安産。
- お宮で貰ってきたローソクを立てておけば、火が消えるまでにお産が終わる。
- 出産月の一番はじめの日に男の人が入ってくると男、女の人が入ってくると女が生まれる。
- 卵のからを踏むと難産する。
- 父親が四十二歳の時生まれた子は、一度よその門口に捨てて、拾ってもらおうとよい。
- 妊婦が青菜を食べると、生まれた赤ん坊が青いウンコをする。
- 妊婦が火事を見て、その手で顔などをなでると、赤ん坊の顔にアザができる。
- 妊婦がウチワを使うと「血の道」になる。
- 妊婦が牛の綱を跨ぐと、腹の中に十二ヶ月子供がいる。
- 妊婦が産後に「ずいき」を食べると、悪い血をおろす。
- 妊婦が滋養のあるものを沢山食べると、女の子が生まれる。
- 妊婦がナマコやタコを食べると、骨なし子が生まれる。
- 妊婦が薪をさかさにくべると、「さか子」が生まれる。

○妊婦がカマドの上に刃物を置くと、「三つ口」の子が生まれる。

○妊婦がシンシバリをすると、耳に穴のあいた赤ん坊が生まれる。

○妊婦が着物の肩明きを切ると、「三つ口」の子が生まれる。

○妊婦が袋物をこしらえると、アザのある赤ん坊がで  
きる。

○妊婦の顔がきつくなると、男の子が生まれる。

○妊婦の身持ちが悪いと、「ヤダ」な子が生まれる。

○妊娠中に何でも穴を埋めると難産する。

○妊娠中に葬式に行くと「白子」が生まれるというの  
で、葬式に行く時は帯の間に鏡を外向きにして挟ん  
でおく。

○妊娠中に鼠の穴をふさぐと難産する。

○鼻の中に腫物ができると、親戚に子供が生まれる。

○双子を生むことを「ちくしよばら（畜生腹）」と

いって嫌う。

○便所の掃除をきれいにすると、美しい子が生まれる。

○仏サンのご飯を高く盛ると、鼻の高い子が生まれる。

○漁師や船員は「アラチを嫌う」といって、出産後一  
週間位船に乗らない。

## (6) 死に関するもの

○新しい下駄を座敷からはいておけると、葬式がある。

○「あの人は死んだ」と思われている人は、長生きす  
る。

○犬が遠吠えをすると、人が死ぬ。

○遅れて葬列に加わることは、「死者のあとを追う」  
といつて嫌う。

○かしこい子は早く死ぬ。

○烏カラスの鳴き声が悪いと、人が死ぬ。

○北枕に寝ると縁起が悪い。

○高野山・善光寺へ参詣すると楽に死ぬ。

○坂越の三味は七人三味といって、一人死ぬと続いて七人死ぬ。

○大避神社の馬場にある石に腰かけると死ぬ。

○シキビの一本花と彼岸花を忌み嫌う。

○死ぬ時笑っていると極楽へ行く。

○死者は北枕に寝かせる。

○死人のある時、四十九日の間はお宮の鳥居をくぐつ

てはいけない。

○出棺した後で、その人の茶碗を割る。

○死んだ人のある時は、門口に「忌中」と書いて、四

十九日間貼っておく。

○死んだ人のものは、何でも反対にする。

○葬式から帰った後、身体に塩をふりかけて清める。

○葬式の帰りに、後をふり返って見てはいけない。

○葬式の時、新しい履物を座敷からはいておりるとよ

い事がある。

○トモビキの日に葬式を出すと、続いて葬式ができる。

○仲の良い夫婦は、どちらかが死ぬと三年のうちに片方も死ぬ。

○寝言の相手になると死ぬ。

○火葬場で最初に女を焼くと女がよく死に、男を焼く

と男がよく死ぬ。

○針を粗末にすると、死んでから針の山に登らせられる。

○火鉢の中に爪をくべると、死人の匂いがする。

○彼岸の中日に死ぬと、どんな悪い人でも極楽へ行く。

○火の玉が出ると、家に死ぬ人がでる。

○仏花として、山吹・ボケ・ボタン・バラ・藤などは

忌む。

○焼き場の煙をかぐと長生きする。

○湯灌の湯は、水の中に湯を注いでかげんをする。

○湯灌の湯は、蓋をとったまま沸かす。

○よい人は早く死ぬ。

○夜、足袋を履いて寝ると、親の死に目にあえぬ。

○夜爪を切ると親の死に目にあえぬ。

(7) 夫婦（結婚）に関するもの

○男が黒紋付を着るのは、黒色は何にも染まらぬからで、心が変わらぬようにと、あやかるためである。

○男が年下で、女が年上は幸福である。

○女が白紋付を着るのは、白色は何にでも染まるから皆のいうようになるという意味である。

○女が二十二歳で結婚すれば、荷が重なつて不幸になる。

○婚礼の祝物には、「おうつり」を入れぬもの。

○婚礼の日に雨が降れば、降り込むといつてよい。

○角隠しをつけるのは、女が角を隠していばらぬため。

○仲人にはお茶の代りにコブ茶を出す。普通のお茶は苦い思いをするからといつて嫌う。

○ヒツジ女は門にもたすな。

○ヒノエウマ（丙年）の女は夫を殺す。

○夫婦げんかは犬も食わぬという。

○庖丁の刃を向かいあうようにしておく、夫婦げんかが絶えない。

○三つ違いは見てもよい。五つ違いはいつでもよい。

六つ違いは無理な縁。七つ違いは泣き暮す、という。

○六つ違いはむつまじい、ともいわれる。

(8) 嫁・姑に関するもの

○「こち」の頭は嫁に食わすな。

○姑に似た嫁がくる。

○嫁に秋茄子を食わすな。

(9) 気象に関するもの

○朝日にニツコリその日の雨。

○朝そばえとむい違行きするな。

○朝やけがすると雨。

○秋の夕焼け鎌を研げ。夕焼けの翌日は、好天気。

○「戌の年」はぬくい。

○煙突の煙がまっすぐ上がると、天気がよい。

○大霜の日は、天気が良いと暖かい。

○沖にある島が、色濃く見える時は雨。

○蟹が畳の上にあがったり、家の中に入ると雨。

○汽船の汽笛が近くに聞こえると雨。

○雲が東へ走るとよい天気、西へ走ると天気が悪い。

○雲の速度が速いと大風が吹く。

○霜焼けがかゆいと雨。

○地震の時は、竹藪へ逃げるとよい。

○猫が顔を洗えば雨が降る。

○履物を投げて表が出れば晴、裏が出れば雨。

○日が照りながら雨が降ると、狐の嫁入りという。

○ふくろう(梟)が「のりつけほうせ」と鳴くと天気、

「とりおけとりおけ」と鳴くと雨。

○前の晩から雨で、朝になって晴れることを親方日和という。

○三日月を拝むと達者になる。その月の災難をのがれる。

○物の音が大きく聞こえたと雨。

○「やまで」があると暖かい。

○「やまで」が吹くと魚がよくとれる。

#### (10) 農事に関するもの

○オーコを跨いではいけない。

○親の言葉と茄子の花は、千に一つのアダがない。

○胡麻の後へ野菜を作るとにがい。

○仕事は道具がする。

○空豆の花が咲いている時、雷が鳴ると実が入らぬと  
いって悪い。

○竹の実がなると、その年は飢饉である。

○七夕様の日に畑へ行くとよくない。

○大根の種まき、二百十日の土の底。

○土用によく照れば、米がよくできる。



○軒下に蜂が巢を作ると不作。

○豆をまくには二日、三日、四日のように「か」のつく日がよい。

○桃栗三年、柿八年、梅はすいても十三年。

### (11) 夢合わせに関するもの

○朝方、火事の夢を見ると家が栄える。

○朝日の出る夢を見るとよろこび事がある。

○上から落ちる夢を見ると、背が高くなる。

○一富士、二鷹、三茄子の夢は良い。

○火事の盛んに燃えている夢は良い。

○寝る時に手を胸にあてて寝ると、恐ろしい夢を見る。

○歯の抜けた夢は不幸がある。

○龍が天にのぼる夢は良い。

### (12) 火に関するもの

○朝火事は金持ちになり、夜の火事は貧乏になる。

○火事の時、女の赤い腰巻きをかかげると消える。

○棕櫚を火にくべると気狂いになる。

○トンドの火にあたると元気になる。

○鼠が沢山いる家は火事がいかぬ。鼠がいなくなると火事がおこる。

○火遊びをすると寝小便する。

○火の中へ、髪や爪をくべてはならぬ。

○火を跨ぐといけない。

○火をおこす時、二人で吹いてはいけない。吹き負けた方が早く死ぬ。

### (13) 湯水に関するもの

○熱い湯はどこへでも流さぬもの。

○熱い湯をさます時は、湯の中に水を入れる。

○井戸の中へ鮒を入れておくと、病気になる。

○井戸水をくんで、残った水を井戸にかえすと水が出なくなる。

○書き初めは若水で書く。

○寒の水を飲んでおくと夏病みしない。

○五月五日には蓬・菖蒲を風呂に入れる。

○土用の丑の日に、いちじくの葉を風呂に入れてたくと病気にかからぬ。

○流しに煮え湯を流すと虫がわく。

#### (14) 動物に関するもの

○朝蜘蛛が天井から下がると、その日はよい事がある。

○家の中に蛇がくると、金持ちになる。

○犬は三日飼えば恩を忘れぬが、猫は三年飼っても三日しか恩を知らぬ。

○牛の鼻や口がかわいてくると、病気になる。

○ゲジゲジが這うとはげになる。

○スツポンにかまれると、雷が鳴るまで離さない。

○燕が毎年来るのに、その年だけ来ないと悪い事がある。

○猫を殺すと祟りがある。

○鼠がいなくなると火事になる。

○夜蜘蛛が上がると不吉の兆。

○蛇を指さすと指がくさる。

○蛇の皮を財布に入れておくと、金持ちになる。

○ミミズに小便をかけると、チンポがはれる。

○夜口笛を吹くと泥棒が入る。

#### (15) 海に関するもの (漁業・船乗り等)

#### 風

○西から東に雲が飛ぶように流れると、西風が吹く。

○北から南に雲が飛ぶように流れると、北風が吹く。

○台風風の風は、東北↓東↓東南↓南↓西へとまわる。

○風向き

十二〜三月 西風<sup>ニシ</sup> 北西風<sup>アサジ</sup>

三〜五月 西南西風<sup>マジニシ</sup>

五〜六月 魚島の頃の風をアサコチヨマジという。

朝方コチ（東風）が吹き、夜マジ（南西風）が吹く。

十〜十一月 北風<sup>キタ</sup>

○旧暦二月と八月の風を、「ニツパチのカゼ」といつて、突風が吹きやすい。

○東風の時は漁が少ない。

○春ヤマゼが吹くと、イリコミといつて、魚が陸へツケてくる（あがつてくる）。

○朝方オヒーサンの光が雲の下にさすと、風が吹く。

○五、六月頃、小豆島に雲がかかるとヤマゼがあり、海が荒れる。

○冬小豆島に雲が土手ついた時（小豆島の東方に雲が斜めにかかった時）は、西風が吹く。

○雨あがりの風は西から吹く。

普通、雨の降っている時は東から風が吹くが、雨があがると西から吹く。

○五月雨は西で降る。

さつきの雨は、西から風が吹いていても雨が降っている。

○オオキタのあさつて。

強い北風が吹いた時は、あさつて（明後日）雨が降る。

○西のうねりだと西風が吹き、東のうねりだと東風が吹く。

天候

○「夏の夕焼け畔をぬれ」といつて、翌日は雨になる。

○「秋の夕焼け鎌をとげ」といつて、翌日は晴れる。

○「朝の虹は傘を持って」といつて、雨になる。

○晩の虹は翌日晴れる。

○秋の九、十月ごろ、日の出にオヒーサンの北と南にカブニジ（小さな虹）がたつと、日よりが悪く、しけになる。

○東の方に虹全体が見えると、良い天気になる。

○朝、西の方に虹の下しか見えない時は、沖へ出ては

いけない。

○台風台風の雲は、ダンゴのようになって近づいてくる。

○「船霊ふねたまさん」がいさむと、シケが近い。

船霊ふねたまさんは、船をつくる時、船の腰に埋め込まれている。そこからチリン、チリンと音がすると、シケが近い。

○「朝ソバエ遠出すな」といって、朝がた雨が降ると

海がシケる（荒れる）。

○「乾ぬのかみだち上じやうびより」

夕方、乾ぬ（西北）の方角で雷かみがなり、稲光いなひかりがしても、習日は上天気である。

○朝がた、若月（三日月）が「受け月」ならば雨が近く、「立て月」ならば雨なし、という。

○「シラタ雲と大名はいつも上じやうのぼり」

朝がた、西から東に動く性根のない雲の時は、天候の崩れはない。

○霜しもがおりてアラシ（山からの風）が出ると、ぬくい

（暖かい）。

○日よりの穏やかな時は豊漁である。

○家島に雲がかかったら、日よりが落ちる。

○千種川沿いに発生している霧が、八祖山を越えておりてくると天気がいよい。

### 潮

○「春ヒダレ（干潮）、秋タタエ（満潮）」によって

天候の変化が予測できる。

○夏の旧暦七日、八日は、「アケクレタタエ」といって、朝晩の潮位が高い。

○「出でつき三合、入りナカラ（半ら）」

月が出た時は三割潮が流れており、月が入った時は流れが半分の所である。

○十三日の午後三時が「ミチノハナ」である。

干潮が終わって潮の流れが変わり、満潮に入るはじめを「ミチノハナ」といい、旧暦十三日午後三

時がその時にあたる。潮の流れが変わる時、約一

時間流れがとまる。

○北風が強い時は潮がよく引く。

○南東の風が強い時は潮が引かぬ。

○引き潮にハレ（西風）、満ち潮にヤマゼ（南々東の風）が吹く。

### 禁忌・その他

○アラチを嫌うといって、子供が生まれた時は一週間くらい船に乗らない。

○女性が船に乗ってはいけない。

○網をまたいではいけない。特に成人の女性のまたぐのを固く禁じた。

○死人が出た家では、忌が明けるまでは船に乗らない。

○漁に出て不幸があると、初七日までは漁を休む。

○正月三日間と盆は、海へ出ない。

○船の進水は「戌の年」が吉、「申の年」は凶。

○「ワラグロのどうちゅうさ」

編んだ網は、小麦のわらで屋根をして保管した。

そのワラグロから、どうちゅうさ（へび）が出てきたら、良いことがある。

○「月の九日船出すな」という。

○船に乗って口笛をふくと、魚がとれぬ。

○船に下駄をはいて乗ってはいけない。

○祭り船の航路を横切ると不幸がある。

○「新造船に新帆は借錢丸。」

○一月二日の乗り初めは、人に見られないように、暗い間に黙ってする。人に会ってもしゃべってはならない。

○刃物を海へ落とすと事故がある。

○生島の木を切ると気狂いになる。

○星が赤く見えると不吉のしるしである。

○一月十六日は漁に出ない。

この日は釈迦の命日で「仏さんの日」と呼ばれ、漁に出ず、網を休ませる。

○満月の日（月の明るい日）は、漕ぎ物（エビ・カニ

・シヤコなど)がとれない。

○ウキワン(海に浮いている椀)を拾うと、よいことがある。

○不漁の時は、同じ道を通ってかえらない。

○不漁の時、網元は赤飯をたいて網子にふるまう。「まん直し」をする。漁師は船を沖に出して、赤飯とお酒を海の神様(龍宮さん)に供える。酒は船首にかけ、龍宮さんに飲んでもらう。

○漂流者を助けたり、溺死者をひき上げたりすると、大漁になる。海が荒れて溺死者をひき上げられない時は、その近くに木を投げ込む。

○船の右側(オモ)、船尾(トモ)は、不浄の方向とされた。

方向転換は、とりかじ(左まわり)で行なう。

船に死人をひき上げる時は、オモから。

船に乗る時は、トモから。

岸に船を着ける時は、トモツケ(ともの側をつけ

る)をする。

あみあげは、とりかじで。

船の便所は、トモにおく。

#### (16) 禁忌・まじない

○汗疹あせらは桃の葉を煎じてつけると治る。

○生島なまじまの木を伐採すると発狂する。

○イボを落すには常落寺の井戸水をつける。

○臼うすについている餅を食べると、歯はが治る。

○梅干しうめあじをヘソの上にあてておくと、乗り物酔いのりものよひをしない。

○お客を早く返すには、箒ほうきを逆さにたててホウカムリほうかむりをさせておく。

○大避神社おほひがしの上の狛犬こまぬいの足を紐ひもでくくると、足がとまると言いって、家出した子が戻かえってくる。

○肩かたのこりにはすい玉すいたまがよい。

○痢りの虫むしには周世しゅうせいのヤキモチやきもちを食べさせるとよい。

○痢りの虫むしには周世しゅうせいのヤキモチやきもちを食べさせるとよい。

○痢の虫には、臼についている餅を食べさせると治る。  
○胡瓜の初物を海に流すとガタロ（河童）に引かれな  
い。

○七夕に油けのものを洗うと、よく落ちるといい、女  
の髪や油気のを洗う。また、井戸がえもこの日  
にする。

○下駄の裏にスミをつけておくと、狐にだまされない。  
○産褥熱（産後の熱）には、海蛇を黒焼きにして食べ  
させるとよい。

○七夕様に供えてあるものを、盗んで食べると夏病み  
しない。

○山椒の芽や実をとる時、歌をうたうと枯れる。  
○シビレの切れた時には、デボチン（額）に唾をつけ  
て、「しびれ、しびれ京へのぼれ」と三回唱える。

○七夕に泳ぐと、ガタロが足を引っぱる。  
○泳いであがる時、「オーキノガタロヒークナヨ」と  
三回いうと、次に泳ぐ時溺れない。

○釈迦祭りの甘茶で墨をすり、「茶」と書いて柱の下  
の方に逆さに貼っておくと、魔除けになる。

○七夕の日に畑に入ったり、三度豆の畑に入ったりす  
ると、逢いたい人にあえなくなる。

○勝負事をする時、墓石のカケラを持ってしていると勝つ。  
○新調の風呂に、一番に入ると中風にならぬ。

○大便のしたいのをとめるには、自分の名前を手のひ  
らに書くといふ。

○雑布で顔をふくと、恥ずかしがりがる。  
○節分の鯛の頭を柊にさして、門口にさしておくといふ  
除けになる。

○たん瘤こぶには、卵の白味をつけると治る。  
○乳の出ない時、午莠の種を飲むと治る。

○ソコマメには蛇のぬけがらを貼ると治る。

○手首が痛くなったら、女ならば男の末子に、男なら  
ば女の末子に、障子の穴から手を出してくくつても  
らうと治る。

○土用に紫陽花の花を誰にも見られないようにとり、玄闕に吊しておくとは病気をしない。

○土用に紫陽花の花を部屋に吊しておくとは、金持ちになる。衣装がふえる。

○土用の丑の日にのりづけをすると、病気が治らぬ。

○土用の丑の日に海に入ると夏病みしない。

○土用餅を食べると夏病みしない。

○流れ星の流れている間に、願い事を三回唱えるとかなう。

○ナタ豆を煎じて飲むと喉の痛いのが治る。

○七草粥の七草を茹でた汁で爪を洗うと、夜爪を切つてもよい。

○熱の高い時には、ミミズ・カマキリを煎じて飲ませるとよい。

○熱とりには、ヒヨコ草の青汁をメリケン粉でねったものを貼りつける。

○毒虫に刺されると、百足の油（種油の中に百足を入

れて作ったもの）をつけると治る。

○ハシカのまじない

●伊勢エビを煎じて飲ませる。

●モチ米で作ったおも湯を飲ませる。

●門口に「ハシカスミマシタ」と書き逆さに貼る。

●ハシカの時、鼠の糞三つ、柿串の種三粒、小豆三粒を米のとき汁の中に入れて沸かし、ハシカの子を洗ってやり、サン俵の上に乗せて海に流す。

●ハシカが済んだ時、鼠の糞三、柿串の種三、白髪

三本、小豆三粒をサン俵の上に載せ、お酒を三滴

ふりかけて海に流す。

○歯痛は、観音さんにあるお地藏さんに参つてお箸を供え、その箸でご飯を食べると治る。

○歯痛は蛇の死骸を埋めると治る。

○ハゼの木（黄櫨）に出あった時、「親には負けてもハゼには負けぬ」といえばかぶれない。

○ハゼに負けた時、油揚げを焼いて、負けたところを



こすって食べると治る。

○鼻血が出た時は、ボンノクボの毛を二本抜くと治る。

○腹痛の時、「まむしの手」の人になでてもらうと治る。

○ひきつけをおこした時、

●裏の白い「ゆきのした」をすって、飲ませると治る。

●「ゆきのした」の汁を、舌の上につけると治る。

○便所へ落ちたら井戸を、井戸へ落ちたら便所をのぞかせるとよい。

○マユゲ（眉毛）に唾をつけておくと、狐にだまされ  
ない。

○マロトは一文銭をあてて灯芯で焼き切る。または、  
針ではねてとる。

○耳痛には「ゆきのした」の汗をつけて、耳につめて  
おくと治る。

○目が痛い、薬師さんの水をつけると治る。

○目ばちこのまじない。

●着物の左の裾を固くくくって、「治ったらほどく」  
という。

●ツゲの櫛で畳の目をこすり、それを目にあてると  
治る。

●豆を井戸の中へ、「芋かと思つたら豆だった」と  
言つて捨てる。

○火傷やけどには、アロエの汁や、胡瓜の汁をつけるとよい。

○夜尿症を治すには、

●ナマコを食べさせるとよい。

●シヨウモンにヤイトをすえる。

### (17)前兆

○ウドンゲノ花が咲くと大変良いことがあるか、大変  
悪いことがある。

○梅干しが腐つたり、色が変わつたりすると、不吉な

ことがある。

○くしゃみが出た時は、一ほめ、二そしり、三わらい、四かぜ、という。

○茶柱がたつとよい事がある。

○手の爪に白い斑点ができる、衣装が増える。

○手の指にサカムケができるのは、親不幸のしるしである。

○鼻の中にできものができると、親類に子供が生まれる。

○耳がかゆいと良い事がある。または珍しい人が訪ねてくる。

### (18)その他

○イボを数えると増える。

○家の中にウドンゲノ花が咲くと悪いが、これを人に見せると良い。

○表から裏へ通り抜けると、その家にお金が入らない。

○女が「といし(砥石)」を跨ぐと割れる。

○女が卵のからを跨ぐと病気になる。

○大晦日に夜遅くまで戸を開けておくと、福が入る。

○上歯が抜けたら縁の下に、下歯が抜けたら屋根に投げるとよい。

○柿の木を焚くと貧乏をする。

○唐臼を反対にまわすと鬼が出る。

○元旦の朝早く雨戸を開けると福が出る。

○櫛を拾うと、苦を拾うといって悪い。櫛が折れると苦が折れるといつて良い。

○「九」のつく日に山に行くと怪我をする。

○子供を貰うと実子が生まれる。

○青菜を亭主に見せるな。

○財布は春（張る）財布、秋（空き）財布といつて、春こしらえたり、買つたりする。

○硯に湯を入れてするのは、葬式墨といつて悪い。

○写真をよく写すと寿命が短くなる。

○死んだと思われた人は、長生きする。

○山椒の木のそばで、歌をうたうと枯れる。

○乳をオムツでふくと乳の出が悪くなる。

○手を洗つた時のふり水をかけると悪い。

○トンドの時、書き初めが高く上がると上手になる。

○雛祭りが済んだら、早く片付けぬと縁が遅くなる。

○便所へタン（痰）や唾をはくと、氣狂いになる。

○便所でころぶと中風になる。

○ヘソの垢をとると腹が痛くなる。

○ボケの花や椿の花を仏様に供えてはいけない。

○貰つたものを、またよそへあげるとお尻が大きくなる。  
る。

○ミミズに小便をかけるとチンポがはれる。洗つてや

ると治る。

○夜、口笛を吹くと盗人が入る。

○牛の綱は跨いではいけぬ。踏んで通るもの。

○意志強固とか、潔白とか、操をたてるといつて常緑

樹は好んで植える。

## あとがき

坂越在住の方々からの原稿を頂戴することによって、前編にもまして「海に生きた人々とその生活」がにじみだた報告となったことは喜ばしいことである。まず御寄稿下さった唐崎・大西・奥藤・尾上・佐方・三木各氏、回顧談を話して下さった西川・福田氏に厚く御礼を申し上げたい。

海沿いの集落の家と生活用水に関する苦労は瀬戸内の島嶼部や半島部に共通するものであるが、船乗りの生活はあまり調査が行なわれていない部分であり、漂流記には冒険にみちた男のロマンがにおう。他所三昧には近世の人々の温かいヒューマニテイが感じられる。これも他に余り例のないものである。気象や海に関する俗信は機械の普及しない段階の精一杯の科学的知識の積み重ねの伝承として貴重である。方言や俗信は港町坂越ならではの豊富さがみられ、海からと川からの文化の合流が言葉の豊富さで示されている。とにかくどの頁を開いてみても海の遠鳴りが聞こえてくる。

これらの習俗を大切に残してこられた坂越の方々の高い知的水準に敬服するとともに、色々御教示下さった後記の方々にも深く謝意を表する次第である。

# 調査協力者

|        |        |        |
|--------|--------|--------|
| 寺谷 藤枝  | 生浪 島静  | 江崎 喜久江 |
| 江崎 芳栄  | 江崎 倭文子 | 青島 一二三 |
| 渋谷 せつ子 | 玉森 信江  | 寺谷 富貴子 |
| 小賀 はる糸 | 網家 光野  | 山谷 實   |
| 山谷 鈴江  | 大河 喜代子 | 大河 秀三  |
| 瀬戸 實枝  | 岩本 英治  | 福田 太治郎 |
| 西川 六三郎 | 浅井 利男  | 尾上 渡   |
| 三木 竹夫  | 大西 稔   | 那波 保江  |
| 寺坂 みさの | 尾上 綾子  | 岩本 榮   |
| 番匠 ノブコ |        |        |

(敬称略・順不同)

赤穂市文化財調査報告書 (六)

(「ふるさと文化」シリーズ第五集)

## 赤穂の民俗 その二

―坂越編(二)―

昭和六十年三月三十一日

編集 赤穂民俗研究会

(代表 廣山 堯道)

発行 赤穂市教育委員会

〒六七八―〇二

赤穂市加里屋八一番地

☎〇七九四二二三二〇一

印刷 赤穂孔版